Quarterly Journal of Public Policy & Management

季刊 政策・経営研究

2017
Vol.2

特集 オープンカレッジⅡ
Special Edition : Open College Ⅱ

MUFG
三菱UFJリサーチ&コンサルティング

Quarterly Journal of Public Policy & Management
季刊 政策・経営研究
2017 Vol.2
2017 vol.2（2017年2号）通巻第42号

CONTENTS

オープンカレッジⅡ

1 「びっくりぽん」から「マッカーサー」まで
三菱UFJリサーチ&コンサルティング　理事長　中谷　巌

16 「明治維新」とは何であったのか
作家　原田　伊織 氏

33 「歌舞伎400年」その核心と革新
歌舞伎大向弥生会　幹事　堀越　一寿 氏

54 聞き書きで介護の世界が変わっていく
デイサービス「すまいるほーむ」管理者　六車　由実 氏

71 「資本主義」はどこに向かうのか?
三菱UFJリサーチ&コンサルティング　理事長　中谷　巌

86 戦後社会の3つの生き方とその変容
慶應義塾大学総合政策学部　教授　小熊　英二 氏

「びっくりぽん」から「マッカーサー」まで
～西洋文明の普遍性と日本文化の個別性、双方への希求～

三菱UFJリサーチ＆コンサルティング　理事長　**中谷 巌**

【司会】 2016年度のMURCオープンカレッジの第１回の講演ということで、「「びっくりぽん」から「マッカーサー」」までというタイトルで理事長の講演のご案内をさせていただきます。

このタイトル自体は、理事長とお話ししている中で「普遍性」と「個別性」の話の中で出てきた言葉をそのまま使わせていただいております。西洋の合理主義に出くわした日本がどういうふうに来し方、過ごしてきたのかという点も踏まえて、きょうはお話しいただく予定です。

ご案内にありました通り、だいたい１時間程度のお話をいただいた後で、30分程度の質疑応答をするという流れで考えております。ご出席いただいた皆様におかれては、名古屋の方、大阪の方も含めていつでも質問できるぐらいのつもりで、ぜひ質問のネタを考えながら聞いていただければまことにありがたいです。

それでは、理事長に引き継ぎます。よろしくお願いします。（拍手）

講　演

普遍性と個別性

皆さん、こんばんは。中谷です。ことしもオープンカレッジがスタートして、お忙しい中たくさん聞きに来ていただいてありがとうございます。今日は、人間世界が「普遍性」と「個別性」という２つの相反する傾向を追い求めてきたということ、人間の歴史はこの両者のせめぎあい、相互作用、緊張関係の中で育まれてきたといった話をさせていただきます。希望的観測ですが、このような視点から何か仕事の参考になるヒントが得られるのではないかと考えております。

人間の文明史を紐解くと、人間というのは常に２つの方向に興味が向いてきた。人間は生活していく中でさま

ざまな現象に直面する。そのさまざまな経験を「抽象化」できないか、「一般化」できないかという興味がひとつ。別の言葉で言えば、森羅万象の自然界にある種の「普遍性」を求めたいという傾向です。もうひとつは、個別の経験をさらに深掘りしてより個性的でユニークなものにしたいという「個別化」への興味。この２つです。

もちろん、世界をすべて普遍的な言葉で説明しきるということはおそらく不可能です。現実世界に存在する個別事象には、ロジックや合理的解釈だけでは言い尽くせない「不識」な部分というものが必ず存在するからです。もちろん、このような言い方に対しては、「いや、聖書にはすべてが書かれており、普遍性そのものだ」という批判がありうるでしょうが、ここではこの種の神学論争はとりあえず、横において議論を進めさせていただきます。

たとえば、建築について考えてみましょう。まず、ル・コルビュジエの「サヴォア邸」はいわゆる「近代建築の５原則」を満たす近代の代表的建築です。この建物は近代世界ならば基本的にどこに建てられていても違和感がない。特定の文化とか、地域の伝統とかにはあまり関係がないように思える。それは近代建築の「機能性」を追求しつくされた建物だからです。

これに対して、もうひとつ、ル・コルビュジエと対照的なのは、スペインのアントニオ・ガウディの作品だと思います。「サグラダ・ファミリア」や「カサ・バトリョ」

（バトリョ邸）ですが、これはル・コルビュジエの「サヴォア邸」と違って、スペインの風土を強く感じさせる作品になっています。いわば、徹底的に「普遍性」から逸脱し、スペインの個別的伝統に固執した作品と言えるのではないでしょうか。ガウディの「カサ・バトリョ」はたしかに徹底的に個別文化にこだわっている。そこにこの建物の価値がある。しかし、ここには「普遍性」の追求という意図は感じられません。

私のオフィスは神谷町の21階にありますが、窓から見える建築物はきわめて多様です。近代的な高層オフィスビルも数多くありますが、これらの建物は別に東京でなく、どこか他国の近代都市に建てられていてもまったく違和感を覚えない「普遍性」の高い建物だと言えるでしょう。しかし、窓から見える芝の増上寺は徳川将軍家の菩提寺であり、絶対に東京になければダメな「個別性」の強い建造物です。

しかし、高層ビルのような「普遍性」の強い建物と、増上寺のような「個別性」の強い建物の間に位置する、いわば中間的な建造物が実は非常に多く存在しています。こういった状況に対するひとつの考え方は、「本当はもっと近代化しなければいけないのだが、種々の建築規制があるため、一気に近代化できない」というものです。この説を支持する人たちは、だから東京は遅れているんだ、もっと規制緩和して、東京を近代的な、競争力のある都市にしなければならないと考えると思います。

しかし、別の考え方もあります。東京がニューヨークのマンハッタンのような「普遍性」の高い高層ビルで埋め尽くされれば、東京の魅力はなくなるという考え方です。「普遍性」の強い高層ビルと、「個別性」の強い日本的な建物、そして、その２つを折衷したような中間的な多くの建造物、これらが混在しているところに東京の面白さがあるという考え方です。私自身は後者です。東京が効率性一辺倒の摩天楼で埋め尽くされるようになってもなんの魅力もないのではないかと考えています。

東京オリンピックのメーン会場となる新国立競技場の当初案はイギリスの女性建築家、ザハ・ハディド氏がデザインしたものでしたが、当初予算を大幅に上回るということで没になりました。私自身は、経費が高すぎるという問題に加え、彼女が設計した新国立競技場は日本の伝統文化とまったく関係ない、きわめて「普遍性」の高いデザインだったというところに問題があると考えていました。あの建物を東京の真ん中に建造する文明的意味はどこにあるのかと疑問に思っていたのです。あのデザインに対しては、「ちょっと待ってよ、せっかく日本でやるんだから、もうちょっと日本文化を反映したものにできないのか」という批判的意見が強かったと記憶していますが、健全な反応だったのではないでしょうか。そして、最終的に採用された隈研吾氏によるデザインはかなり日本的な要素が取り込まれました。東京オリンピックに使われるエンブレムも４案ありましたけど、最終的には一番日本的な感じがする「市松模様」を取り込んだデザインに決まりました。これでよかったと思います。オリンピックの精神を表すと同時に、東京で開催するのだから、日本らしい要素も欲しい。「普遍性」と「個別性」のバランスが大事だということになりますが、他の３案はほとんど日本を感じさせないデザインだった。

ツリーとリゾーム

なぜこういうことを申し上げているのかと言いますと、人間が培ってきた歴史を振り返ると、常に「普遍的」なものと「個別的」なもののせめぎ合いの中で文明が形作られてきたということを申し上げたかったからです。「普遍性」と「個別性」のバランスをどう取っていくのか。「合理性」「効率性」「機能性」といった論理の積み重ねで形作られる「普遍的なもの」だけでは、人間の基礎的欲求は実は満たされず、そこに説明ができない「美意識」や「歴史観」「自然とのかかわり方」等の「個別的なもの」も同時に必要としている。この２つの欲求を組み合わせていく。そのための人間の営みが歴史なのだという理解です。

蛇足になりますけれども、プラトンのイデア論においては、物事にはイデア、理想形というものがある。その理想形を追い求めるということが人間の仕事だというのが

ギリシャ哲学のエッセンスと言えるかもしれません。

たとえば、有名な「ミロのヴィーナス」やミケランジェロの「ダビデ像」を想起して下さい。ミケランジェロはルネサンス時代の芸術家ですからギリシャ時代の人ではありませんが、徹底的にギリシャ彫刻を再現するためにこの彫刻を制作した。女性と男性の理想形（イデア）、究極の美というのはこういうところにある、ということを見せるための作品です。芸術家の仕事とは、現実には存在しない理想形をいかに形にして示すというところにあった。

それはそれで美しい作品が生まれたわけですが、逆に、イデアの追求にこだわりすぎたという側面があった。人によって評価は分かれますが、それが強過ぎたために、ギリシャの芸術というのは決まりきった様式のものが多く、ダイナミックな作品は生まれなかった。なぜかというと、目の前にある現実に存在するもの、「個別的なもの」は、真実の存在ではないというイデア思想が非常に強かったので、「個別的な要素」をいかに排除して、普遍的なイデアに近づけるかという考え方が強かったからです。イデアへの憧れには、それはそれで素晴らしいものがあったにせよ、それだけでは人間世界のおもしろさは表現しきれない。これが近代以降の考え方です。ギリシャ文化というのは、確かにシンプルで簡潔で、大変美しいけれども、それ以上のものはない、心に引っかからないと言う文芸評論家もいます。ここでも「普遍的」なものと「個別的」なものの対立を見ることができるわけです。

世界は、普遍的原理で説明できるのかという点については、哲学の世界でも昔から延々と議論が続いているテーマですが、この問いに「イエス」と答えたのがデカルト『哲学原理』です。その中で主張されているのが「ツリー構造」の理論です。デカルトは「西洋文明こそ普遍的なものだ」と主張し、すべての現象はヨーロッパから出てきた文明の木、このツリーの枝葉によって説明できるとしました。それが「ツリー構造」です。

ところが、それに対してドゥルーズ＝ガタリという２人の哲学者が『千のプラトー』という本を書きまして、西洋から生まれた文明が世界のさまざまな文明の原点にあり、すべてはそこから派生したものだという「ツリー構造」の理論は、西洋の思い上がりに過ぎない、西洋から発した１本の大きな木によってすべて世界が説明できるなんてとんでもない、西洋中心の世界観は間違っている、ということを主張しました。これを「リゾーム構造論」と呼んでいます。リゾームとは地下茎のことで、世界は西洋を中心に創られたわけではなく、ネットワークでつながっており、文明に優劣はなくすべて平等という思想です。

この対立は哲学の世界でも根深く存在しているようです。いずれにしても、近代世界においては、西洋が世界文明の中心的存在であったことは間違いない。今でもわれわれがモノを考えるときには、自動的に西洋的な物の考え方で考えている場合が多い。そうなっている直接的な原因は、「びっくりぽん」（明治維新の時代）から「マッカーサー」（第２次世界大戦直後の時代）まで、日本の教育システムが「西洋近代こそ文明の中心」という思想で埋め尽くされていたからです。実際、西洋文明こそが普遍的真理であるという前提のもとにほとんどの教科書は書かれてきました。

しかし、そろそろ、このことに関して日本人にも西洋文明がすべてだという考え方に対する反省が出てきたのではないでしょうか。オープンカレッジで、次回来てもらう予定になっている原田伊織さんという人は、『明治維新という過ち』という本を書いていますけど、明治以降の日本史が薩長史観（薩長両藩が日本を近代化に導いたという歴史観）で書かれていることに対して、それは偏った見方であり、薩長両藩を持ち上げすぎていると批判されています。多くの日本人は、明治維新の際の薩長の激しいテロリズム（数々の暗殺）が大きな役割を果たしたと思われるのに、それに対しての歴史的総括がないまま、あれは致し方なかった、正しい行動だったなんて信じ込まされているというわけです。薩長史観という言葉を西洋中心史観と言い換えればその構造はこれまで議論してきたことと同じ構造になります。

覇権国（歴史の勝者）が発するメッセージは、「普遍的」なものとして受け取られがちであり、事実、私たちもともすれば、明治以降の「薩長史観」、第２次世界大戦以後の「マッカーサー史観」、そして、近代以降今日までの「西洋中心史観」をベースに思考し、行動する習慣が定着している。しかし、そのような思い込みから脱却し、「普遍」と「個別」の相互作用について意識を高める時期を迎えたのではないだろうか。私がそう申し上げる理由のひとつは、西洋近代から生まれたグローバル資本主義が行き詰っているからなのです。

しかし、西洋の知識人の多くは早くから西洋文明の危機を認識していました。たとえば、シュペングラーは1918年に『西洋の没落』という著作をものにしている。1918年といえば、第１次世界大戦が終わった年です。世界をリードしているはずの普遍的なヨーロッパ文明が大量の戦死者を出す悲惨な第一次大戦を引き起こしてしまった。それ以前の19世紀という時代のことを振り返ってみても、世界の先端を行っているはずのヨーロッパはほとんどの時期、戦争に明け暮れていた。なんで理性的であるはずの西洋人が、戦争に明け暮れてきたのか。何かおかしい。そういう問題意識で『西洋の没落』は書かれたのです。

普遍的な西洋文明のエッセンスは「都市」に集約されていますが、都市は母なる大地から遊離した人工的な存在です。ここに流通する貨幣は現実的なものに一切制約されることのない形式的・抽象的・知的な力であり、文明を支配している。ここに群集する人間は故郷を持たない頭脳的流浪民、ノマドです。彼らは高層の賃貸アパートに住み、自然とは離れた環境でみじめに眠る存在だというのです。

彼らは日常的労働の知的緊張を、スポーツ、快楽、賭博という別の緊張によって解消している。このように大地を離れ極度に強化された知的生活からは、不妊の現象が生じる。シュペングラーの予言では、人口の減少が数百年にわたって続き、世界都市は廃墟となる。知性は空洞化した民主主義とともに破壊され、無制限の戦争をともなって文明は崩壊する。経済が思想、宗教、政治を支配した末、西洋文明は21世紀で滅びる。

これが1918年に書かれたこの本の主張です。人口がまだ増え続けていたこの時期に不妊現象が起き、人口減少に至ると看破したのはすごい。日本の人口減少も人工都市、東京の出生率が飛びぬけて低いことが大きな要因になっています。シュペングラーが1918年の段階でこういうことを議論していたということは驚くべきことです。大事なのは、ここで「文明」というものが、大地から栄養を吸収している地域の伝統文化から切り離され、人工的なものになってしまったために、栄養分を吸収することができなくなり、活力が枯渇してしまうという考え方です。実はシュペングラーは、「普遍」と「個別」の緊張関係がなくなると文明は崩壊する、没落するということを言っているわけです。「普遍」が生きながらえるためには「個別」文化からエネルギーの供給を受ける必要があるということです。

普遍的文明としての資本主義

その普遍的な文明のうち、最も現代的なものは資本主義というシステムです。資本主義の普遍的な考えというのは申し上げるまでもなく、資本へのリターンを最大化するのが経済活動の目的だということです。そのために必要なのは、あらゆるものを「商品化」することです。人間の労働サービス、土地、それから貨幣、こういったものを土着的なものから解放することで「商品化」し、自由に取引できなければいけない。資本の増殖のスピードを最大化するためのメカニズム、すなわち、マーケット・メカニズムというものをあらゆる生産要素に適用できるようにしなければいけないということです。さらに言えば、これらが自由に国境を超えて取引できるようにしなければならない。グローバリズムのことです。資本は必要ならば、国境の壁を越えて利潤が最大化できるようにいつでも自由に移動できる必要がある。グローバル・キャピタリズム。これが1990年ころから世界を駆け巡った「構造改革」の思想的背景です。

中谷理事長

さらに言えば、企業というのは資本家の利潤を最大化するための「道具」であるとする考え方も生まれてきました。そこから生まれてきたのが、いわゆる「エージェンシー理論」に基づくアメリカ流コーポレートガバナンスの理論です。この考え方によれば、経営者は株主の代理人（エージェント）であり、経営者が自分勝手なことをしないように、彼らが株主利益を最大化するように仕向けることが必要だという理論です。

そのために何が必要か。いろいろありますが、大きく言って２つです。ひとつは、経営者を監視するため、中立的な社外取締役を取締役会定数の半数以上、雇わなければならないというもの。もうひとつは、経営者の報酬を株価に連動させる等して、経営者の利益と株主の利益を一致させるような報酬体系をつくらなければいけないというものです。

このアメリカ流ガバナンスの考え方を日本の上場企業にも適用しようと、金融庁がコーポレートガバナンス・コードを作り、日本企業にそれに従うように指導を始めています。それに対して、上場企業は、この金融庁が持ってきたコーポレートガバナンス・コードに対して、どういう対応をしたらいいのかということをいろいろな形で議論しています。

私の理解では、大部分の日本企業の経営者は、「企業が株主のもの」という考え方には違和感を持っている。本音では、ちょっと違うよねこれ、と思っている。社外取締役によって経営を監視するなんてことできっこない。会社の現場なんて社外の人間にはとうてい分からない。現場で何が行われているか知らないで、どうして経営者を監督できるのか。その証拠に、三菱自動車はなんでああいうことになっちゃったのか。フォルクスワーゲンはどうして不正ソフトを使ったのか。東芝は委員会等設置会社で最も先進的なガバナンスを持っていたはずなのに、利益操作をしてしまった。ということで経営者が株主のエージェントとして動かなければいけない、だから社外取締役が経営者を監督するというアメリカ流のコーポレートガバナンスは実は破綻を来しているのではないのか。こういう疑問です。

日本の経営者が、本心からはアメリカ流のガバナンスのあり方を信じていないとすれば、どうすればよいのでしょうか。それは、はっきりと、アメリカ流のガバナンスは少なくとも日本企業にはそぐわないという意見を発信すべきだと思うんですね。金融庁がアメリカ流のコーポレートガバナンスを導入しようとしても、日本の経営者がこぞって「それは企業経営の実態にそぐわない。だからわれわれは金融庁の提案してきたガバナンスコードには従わない」という意見を出すならば、金融庁もその意見に従うかもしれない。その結果、世界に日本企業はステークホルダーを重視した日本流ガバナンスでやっていくということを知らしめることができるかもしれないと思います。

日本人の悪いところは、自分が信じていないことでも「お上」に逆らうと面倒だから、さしあたり「お上」の言う通りにしておこうとする態度です。これでは、アメリカ流に飲み込まれてしまい、結局、日本の競争力もダメにしてしまうかもしれない。したがって、グローバル資本主義がさまざまな矛盾を露呈している現在、日本のような非西洋の国がその矛盾に対するアンチ・テーゼを提案していく。そういったことが必要になっているのではないでしょうか。

ひとつ例題的にお話ししますと、コダックと富士フイルムのケースです。十数年前、アナログ（銀塩）フィルムの需要が激減してしまって、デジタル化していきました。

コダックは「資本の論理」に従ってあっさりと倒産の道を選びました。儲からなくなったら撤退する。これが「資本の論理」です。しかし富士フイルムは、売り上げの80%以上あったアナログフィルムの需要がゼロになっても会社をたたまなかった。何としても、この80%をほかの業態で埋めようと必死に努力しました。アメリカ的な考え方、あるいは資本主義の考え方だと、もうそれは撤退しろという形になります。

なぜかというと、資本家は自分でポートフォリオを組むことができるからです。儲からなくなったところから資本を引き揚げ、それを成長分野に再投資すればよいという考え方です。コダックがつぶれたって、それにかわって他の投資先企業が伸びてくればそれでいいと。はっきり言えば、「ポートフォリオの組みかえは資本家に任せてください」ということです。

こういう考え方は日本にもかなり浸透しています。IR説明会で若いアナリストたちが質問するのはことごとく「資本の論理」をベースにしているように見えます。たとえば、「どうして余剰な現金を持っているんですか。どうしてそんな無理な多角化やるんですか。採算の悪い事業からはさっさと撤退すべきでしょう」こういう質問です。それに対して、たいていの日本の経営者は、曖昧な言いわけに始終するというのがせいぜいのところです。

でも、もっと根本的に議論してほしいというのが私の言いたいことです。富士フイルムは日本の会社であり、コダックとは会社のあるべき姿に対する基本的思想が違う。企業は資本家の「道具」ではなく、人々が生活する場所だ、共同体だと。富士フイルムという会社（共同体）に縁あって入社したのだから、そこで生活を共にしている仲間たちとことん頑張るんだと。そこに組織の存続価値がある。もちろんアメリカの資本家たちはそうは考えないでしょう。会社は解散して失業が発生しても「労働市場」があるから、雇用調整はマーケットに任せれば良いという考え方です。しかし、日本の場合、会社はみんなのものという共同体思想が強く、これが日本企業の競争力の源泉になっている場合も多いと。

企業というものは社会的に見てどういう意味があるのか。アメリカ的な資本主義の思想は、企業は単なる契約の束であって、「生活の場」とか「共同体」なんていうものはそれが資本へのリターンを最大にするという目的とはそぐわない場合には意味がないということになります。だから、だめな会社はすぐ撤退してください、倒産してください。こういう自然淘汰の思想になっているんだけど、はっきり言って日本人はそれにはなじまない。もちろん転職する人はたくさんいますけれども、依然としてトータルで見ると、やはり企業は共同体、生活の場であるという感覚が強い。そのことに引け目を感じる必要は毛頭ないのではないでしょうか。それならば、そうと世界に向かって堂々と主張すればよいのではないでしょうか。企業をそのように見ることが日本企業の価値観であり、実はそのことこそ、日本企業の競争力の背景にある考え方なんだと言わなければいけない。そういうことをベースにした理論の再構築をしなければいけない。こういうことだと思います。

「選ぶ文化」と「育てる文化」

それと関連したことを申し上げれば、「選ぶ文化」と「育てる文化」。実は私が毎週土曜日にやっている私塾で、トヨタの張名誉会長に来ていただいたことがあります。彼はご存じのように、アメリカで10年間苦労に苦労を重ね、アメリカにおけるトヨタの地盤を築き上げた功労者です。その塾で、受講生のひとりが、「アメリカ企業とトヨタでは何が根本的に違っていたのか」といった趣旨の質問した時、張さんは、「アメリカは『選ぶ文化』です。つまりマーケットから、人材にせよ、資本にせよ、技術にせよ、必要に応じて調達すればよい、場合によっては会社を買うことも含めて、市場を利用して最適な会社組織をつくればよいという考えだ」というわけです。しかし、トヨタの考え方はまったくそうではなくて、「育てる文化」だという答えでした。

長い期間、トヨタという独特の共同体の中にいて、トヨタ的な価値観に染まり、その中で良い商品、品質の高

い商品をつくるにはどうしたらいいかということで、みんなで悩み、互いに提案しあいながら、商品の完成度を高めていく。こういうことは、マーケットから必要に応じて人をとってくるだけでは達成できません。だから、少なくとも中核的な人材は時間をかけて内部で育てなければいけないんだと、こういうことをおっしゃいました。

それと非常に共通するなと思ったのは、やはり、私の塾に来ていただいた東レの日覚社長の話です。東レはご存じの通り1970年ごろに合成繊維の競争力がなくなり、炭素繊維の開発に社運を賭けました。これが商品として会社の大黒柱になるまでにそれから40年、50年もかかったのです。初めはボーイングに飛行機の機体に炭素繊維を使わないかという提案をしたが、まったく相手にされなかったそうです。繊維で飛行機をつくる、そんなばかなことないでしょうということで、門前払いもいいところだったというお話でした。

その間にゴルフクラブや釣竿等で食いつなぎながらもしつこく開発を続けた結果、ついに今ではボーイングの機体の相当部分は炭素繊維によってつくられているそうです。そこにくるまで40年ぐらいかかっているわけです。これ「選ぶ文化」でできますか。どんなに門前払いを食わされても、ひるまず、炭素繊維の将来性に命を懸ける技術者たちがいた。彼らが磨きに磨いてきた技術の結晶がこの炭素繊維なんですよ。これも「育てる文化」の中でしか生き残れない。炭素繊維の会社は、今は世界中で日本にしかないそうです。西洋的な資本主義の思想では、そんな40年もどうなるか分からないものにコミットできません。その結果、炭素繊維の会社は、今では世界中で東レ、三菱レイヨン、東邦レーヨンの3社しかないということです。

すべての業界において「育てる文化」が良いということはないと思います。ただ、ある種の技術とか、ある種の製品・品質とか、そういうものを完成させるためには、「育てる」という考え方もどうしても必要になる場合がある。それにもかかわらず、何もかもアメリカ型モデルに追随する必要はない。堂々と日本型モデルを主張すればよいのではないでしょうか。

東芝がなんで利益操作やっちゃったのか。東芝は最も先進的なコーポレートガバナンス形態を持っていた会社ですよ。委員会等設置会社ですから。取締役の過半数は社外であるし、みんな有名な人ばかりです。でも、会計操作についてはまったく無力だった。それは無理もないことです。現場で何が行われているのかなど、社外の人間には分かるはずがないのですから。

アメリカ流コーポレートガバナンス論のもうひとつの柱は、報酬はできる限り業績や株価に連動すべきであるという考え方です。つまり株価に経営者の報酬を連動させると、経営者も株価が上がるように意思決定するはずだという考えです。そういうふうに経営者を動機づけすべきだという考え方です。東芝の社長がどうして、もっと利益出せと部下に命じたのか。強い金銭的インセンティブをつけ過ぎると、それに引っ張られてしまう。長期的な意味で正しい投資計画ではなくて、短期的に利益が上がるような投資計画に走ってしまうかもしれない。業績連動報酬はやりすぎると意思決定を歪める可能性があるということです。

まとめますと、アメリカ流コーポレートガバナンス論の2本柱は、いずれも間違った経営判断を正す力はないということです。大事なのは会社の組織文化、風土、それから倫理観、こういったものを会社の中でしっかりと創り上げられているかということです。私はしたがって、アメリカのビジネススクールも、間違った「エージェンシー理論」を教えるのではなくて、本当は倫理学を重要な教科として教えるべきだと思います。上役が不正なことをやれと要求してきても、現場に十分な抵抗力があるようにすべきです。

このような考え方について皆さんは賛成なさるでしょうか。もし賛成なさるのなら、しかるべき立場の人ははっきりとそういう意見を発表すべきなのではないでしょうか。アメリカ流のコーポレートガバナンス・コードを金融庁が押しつけてきたときに、「あれは間違っている。アメリカ流ガバナンスはわれわれには合わない」と、日本の

上場企業のほとんどのトップがそういうことを明言すれば、金融庁の役人たちも、彼らの意見を取り入れるようになるのではないでしょうか。

ところが日本の経営者は、金融庁とけんかするのはしんどい、とにかく言う通りにしておこうと、こうなっているんじゃないか。これが日本の健全な資本主義体制をゆがめていると私には思えるわけです。だから普遍に対する、一見普遍と見えるものに対する抵抗というものをどういうふうにしていくのかが、日本にとっては大きな課題になっているのではないでしょうか。

シリコンバレーでアメリカのエリート層の人たちと会ってきたベンチャーキャピタル関係の仕事をしている友人に聞くと、アメリカという国はやっぱりすごいと、アメリカは依然として元気だし、次々に新しいベンチャーが生まれている、あの国はすごいと言っていました。しかし、彼はアメリカの底辺にいる民衆と会ってない。アメリカ社会の分断に気づいていない。底辺の人たちのグローバル資本主義に対する恨みにも根深いものがあり、それがトランプ現象となって表れている。こういう点を考えると、世界を覆っている西洋文明という普遍的世界観というものが、一番大もとのアメリカで今根元から崩れようとしているのかもしれません。これまで「普遍的真理」と言われてきたものと「リゾーム的価値」というものがどういう形で融合していくのか、お互いに是正しあっていくのかということこそ非常に大きなテーマであるし、日本人にとっては特にそうなんじゃないかというふうに私には思えるわけです。

「からごころ」と「やまとごころ」

もちろん日本にも問題は多々ある。日本が理想的な姿にあるとは言えない。本居宣長は江戸時代の国学者ですが、彼は玉勝間という本の中で、「からごころ（漢意）」について語っています。「漢意とは、漢国のふりを好み、かの国をとふとぶのみをいふにあらず、大かた世の人の、万の事の善悪是非（よしあし）を論（あげつら）ひ、物の理をさだめいふたぐい、すべてみな漢籍（からぶみ）の趣なるをいふ也。」

つまり自分は、これこそ真実なんだって人に言い募っているわけだけど、それってほとんど漢籍（中国の文献）、つまり今で言うとアメリカ的な発想に則って言っているのに、そのことを自分が気づいていない。これこそ自分が考えついた正しいことなんだと言っているけれども、ほとんどこれは「漢籍の趣なる」なんです。ということをなんと江戸時代後期にいた本居宣長さんが言っている。

本居宣長は、「古事記伝」という44冊の「古事記」の研究をやった人です。「古事記」というのは、まだ日本に日本語というものがちゃんとできていないときに書かれた神話ですけれども、これを外来語である漢字を使って書いたものです。外来語を使っていかにして日本の心を表現したのか。本居宣長はこういった大きなテーマに挑戦した。本居宣長はこの「古事記」の1行1行を丹念に読んで、この漢字というものを使わざるを得なかった、非常に苦しみ抜いた日本人の本心（やまとごころ）を読み解くという作業をやった。

先ほども述べた明治維新の「びっくりぽん」、戦後の「マッカーサー」も本居宣長流に言えば同じ「漢意」です。幕末ぎりぎりまで「攘夷、攘夷」と言っていた勤王の志士たちが開国した途端「文明開化」、「鹿鳴館」でしょう。もう徹底的に「漢意」（正確には「夷心」）になってしまった。それは便法として短期的には必要だったという見方ももちろんあり得ますけど、その後、第二次大戦があって、今度はマッカーサーが入ってきた。アメリカンデモクラシーというまた新しい波が来て、教育の現場とかそうい

うのがみんなそれによって塗り変えられた。この「漢意」という日本人の病理は相当だなと思わざるを得ない。今日でも、自分ではそうと気づかずに「漢意」の中にひたっている人（アメリカかぶれ）がどれだけ多いか。この「漢意」からどうやって脱却するのか。必要なのは、われわれ自身がこういった「漢意」の病理に気づくということなのではないでしょうか。

本居宣長は、それぞれの国、民族の行動パターンとか思考の形を理解するには、神話の世界に戻らなければいけないと言っている。しかし、マッカーサーは日本人が日本の神話を学ぶことを禁じました。その結果、われわれはほとんど日本の神話のこと知らないですよね。「古事記」は学校では勉強しちゃいけない。禁止されちゃったんだから。でも、アメリカとかヨーロッパの子供たちは、「ギリシャ神話」とかユダヤ・キリスト教の「創世神話」とかみんな知っていますよ。みんな勉強しています。神話というものは、その民族のエートスを色濃く反映していますから、自分の民族のことを知ろうと思ったら、神話を勉強することが不可欠なんです。

この西洋世界を席巻したユダヤ・キリスト教と古事記を比較してみるとどうか。最大の違いは、神が世の中をつくった（天地創造）というのが西洋です。神は英知の塊であって、一定の意図のもとにこの世界を天地創造をしたと。だから神様というのは、人間から見るとむちゃくちゃ偉いわけです。神と人間世界は完全に断絶しています。神が人間世界をつくったんです。したがって、ユダヤ・キリスト教文明の下では「つくる」というのがキーワードになります。

ところが「古事記」を読みますと、神様と人間は非常に近いです。ひょっとしたらわれわれは神様と血がつながっている。ご存じでしょう、天孫降臨で天照大神のお孫さんが高天原から降りてきて、そこで待ち受けていた猿田彦たちと融合していって、そこで神様の子を生んできたわけです。だから、神様とわれわれは血がつながっている。そして何か神の意図にあらかじめでき上がった世界があるのではなくて、生んだ者が次々に何かになっていく。「生む」と「なる」というものが古事記のキーワードなんです。ですから、日本人にとっては血の連続性というのが非常に重要です。永遠に続くことは大事、系譜的連続における無窮性という発想が強いです。これが万世一系の皇室という考え方とつながっているのですね。

「今」「ここ」を大切に考える

もうひとつ、「古事記」で一番大事なのは、「今（いま）」です。今、目の前にある問題をどうやってしっかりとこなしていくか。過去から受け継いだものを将来にどうやって受け継いでいくのかというのが現役世代の非常に重要な仕事です。だから、日本企業は現場が強い。受け継いできたものを目の前でうまくこなしながら、次世代に受け継いでいく。こういう「今」「ここ」を徹底的に大切に考えて日々努力する。これが日本人の根本的発想の中にある。

ところがユダヤ・キリスト教的な世界では、人間にとって一番大事なことは「最後の審判」です。「最後の審判」がいつくるかは分からないけど、「最後の審判」がいつか来るよという教えですね。その教えの日に、自分も神の国に行けるようになるにはどうしたらいいか。つまり「最後の審判」というものに焦点を合わせて、そこに行くための戦略を考えるわけ。「最後の審判」、これはエンドです。エンドというのは、英語では「最後」という意味と同時に「目的」という意味もあります。この最後の目的、つまり神の国に行くという目的に向かって、自分は今日の生活をどういうふうに過ごすべき、これを戦略的に考えなければならない。西洋人が戦略的なのは、ユダヤ・キリスト教的な物の考え方が根底にあると思います。

ところが日本人は、日々受け継いだもの、目の前に起こってきた問題をどうやってこなすかということが、無意識のうちに最も重要なテーマになります。ですから、次々にこなしていく。だから現場が強い。アメリカ人に日本人と同じような現場のパフォーマンスを上げろなんて、これは無理です。逆にアメリカの経営戦略を日本にそのまま押しつけようと思ったって、そんなのうまくいかない。アメリカでMBAを取った人は、基本的に日本で

は偉くなれないことが多い。もし、このことが事実だとすれば、それは欧米と日本とでは根本的な物の発想が違うから。MBAの勉強が意味ないと言っているんじゃありません。それは知っておいた方がいいでしょう。つまり階級社会的な発想で物を考えると、どういうことになるのかということをちゃんと分かってなければいけないということです。ですから、このオープンカレッジなんかでリベラルアーツを勉強する理由はこういうところにもあります。こういうところまで来ると、非常におもしろいことがいろいろ考えられるということだと思います。

もう時間がなくなったので最後、皆さん方は次の問いに答えてください。日本本社の経営トップが買収した外国企業のマネジャーたちに初めて会いに行きました。この時あなたが本社の経営トップだったとして、いかなる態度をとるのがよいと思いますか。

1. 友好的な態度をとるため真っ先に握手を求める。
2. 皆さん方のやり方を尊重するので頑張ってほしいと激励する。
3. 日本企業のやり方に従うように促す。

さあ、皆さん方、手を挙げていただきましょう。皆さんがトップだったらどれですか。分かれましたね。それはある意味当然です。相手がどういった歴史や文化を持っているかによって答えが変わってくるからです。大事なのはその買収した会社はどこの国で、どういう宗教的、文化的、歴史的があるのかということを十分に知ったうえで対応を考えるべきです。階級社会的な国の会社ならば、はるばる日本からやってきたマスターたる人たちが、自分たちに対してどういう命令をしてくれるかということを心待ちにしているわけです。その時に、仲良くしようねと言わんばかりに握手するだけでは主従関係が崩れる。だって彼らが心待ちにしているのは、新しいマスターがどんなすばらしい戦略、ビジョンを持って自分たちを指導してくれるのかと思っているのに、握手されたら対等の立場になるわけです。それでは相手は戸惑ってしまいます。

もちろん、ただ単に傲慢な態度をとりなさいということを言っているわけでは毛頭ありません。でも、それぞれの国、民族の特性、価値観の根源にあるものを見きわめて、どういう対応をとったらいいかということを考えなければいけないということを申し上げたい。唯一の答えは実はありません。

以上、「普遍」と「個別」という話から敷衍しまして、さまざまな話題を提供させていただきました。皆様方のご意見をお聞きできればと思います。（拍手）

質疑応答

【司会】 どうもありがとうございました。

ということで質疑応答の時間に入らせていただきたいと思います。非常にブロードなというか広範なテーマをありがとうございました。いっぱい質問がこの中にあると思うので、まずは挙手ベースでお願いしたいと思いますが、いかがでしょうか。

では、齊藤さん。

【質問】 ひとつ質問なんですが、われわれは環境の分野でEUがすごく理論先導で、そこでバーンとビジョンをつくって、それが日本にもアメリカにも行くという流れがすごく多いんですけれども、EUはまさに「設計主義」なのかなと思って見ていたんですけれども、やはり失敗するんですかねというところが質問なんです。よろしくお願いします。

【中谷理事長】 「設計主義」というのは、それまでの実績や歴史的伝統、民族の価値観等に重点を置かず、その時代時代の理念をもとにして制度を創ることができるという考え方ですが、僕は「設計主義」にまったく意味ないと言っているのではありません。特に、日本人の場合、「保守主義」の伝統が強く、「連続性」を大事にし過ぎるために、改革が遅れがちになる傾向がありますから、「設計主義」の思想も適度に必要です。たとえば日本における人口減少問題は非常に深刻であり、これに歯止めをかけようとすると、相当思い切ったことをやらざるを得ない。成り行くままに任せてほっといたら、間違いなく人口はどんどん減っていく。日本人のエートスの基本は「無窮性」「連続性」にあるということで、成り行きに任せてその場その場で頑張ればいいんだという話だけではどうにもならない。日本国自体がなくなるからです。

環境問題についても、そういう「設計主義」的な戦略はどうしても必要になると思いますけれども、本来ならば日本人の環境に対する、自然に対する共生思想というものが根本にあったはずなんです。そして、人間

中谷理事長

による自然環境の搾取に対しても節度のある対応をしてきたと思うんですけれども、現代においては西洋的な「自然は征服すべき対象」というフランシス・ベーコン流の思想が強くなりすぎている気がします。ここで一度立ち止まって、自然との共生という根本的な精神に立ち返る必要があるでしょう。

それから、ヨーロッパ、EUが環境対応の先進国だと言われているけれども、彼らがやろうとしていることの裏側にある本当の狙いをしっかり分析することが必要なのではないか。そういう努力を通じて、日本人の環境問題における貢献余地があるのではないかと思います。

確かにおっしゃる通り、EUが先進的な取り決め、規制をやって、それに対して日本企業はどうやってそれに合わせるかという現場主義的な発想から抜け出せないという問題は確かにある。グローバル社会においては、ルールメイキングの力が最重要だという言う人は多いですよね。ただ、私もそれは反対ではないのですが、ルールメイキングにおける手法も欧米的な手法で同じように発想してやっていくのではなくて、日本人が提案するルールメイキングの基本的な思想というものを大事にしてほしいという気持ちを持っています。もっともそれは具体論ではないので、実際、環境問題をやっておられる齊藤さんのお考えを本当はお聞きしたい。

【質問】 企業の人たちが集まった委員会でそういった議

論を２回ぐらいしましたが、半分ぐらいの人が、戦略的になるためにはすごく悪人にならなければいけない。植民地をあんなに持ってきたイギリスの真似をわれわれはするのか、それがわれわれはハッピーなのかみたいな話も出てきてしまって、非常におもしろかったんです。日本はもう戦略をつくることにエネルギーを割くのをあきらめて、できたものをいかに現場力でやってそこで力をつけるのが良いのではないか。逆にそれを守れないレベルの技術のルールをつくって、それができるのは日本だけだみたいな世界もいろいろある。そういうところで日本は真摯に対応していくことでプレゼンスを高める。ルールメイキングしなくてもできるんだというところで、力を入れませんかみたいな話がメーカーさんから出てきて。それが一般的な話かどうか分からないんですけれども、その委員会では、本当にルールメイキングがいかに大事か。でも、いかに日本人に向いていないかみたいな話が、みんな共通として思っているんだなというところがありました。

【中谷理事長】 ひとつだけ具体的な例をお話しします。空調メーカーのダイキンという会社があります。今、中国でナンバーワンのエアコンメーカーは「格力」という会社ですが、ここは格安のルームエアコンを大量に生産し、販売している会社です。ダイキンのインバーター技術は省エネ技術としてダイキンの比較優位を支える非常に重要な技術です。ところがダイキンはある時、驚いたことに、その虎の子のインバーター技術を格力に無償で提供すると決めたのです。

その結果、格力は、なかなか手に入らない高価なインバーター技術を無償で手に入れた。格力は大喜びで自分たちが生産するエアコンにそれを装着することにしました。ダイキンはなぜそんな「敵に塩を送る」ようなことをしたのか。その理由は２つあった。

ひとつは、その見返りに格力の低コストの量産技術を学べることです。もうひとつは、格力が中国共産党に大きな影響力を持っているという点に注目したのです。格力はインバーター技術を自社製品に装着すると同時に、インバーターを今後、中国で生産されるすべてのエアコンに標準装備させるように共産党に働きかけ、それを実現したのです。これで、ダイキンのインバーター技術が中国全体で使われるようになった。

インバーター技術を無償で提供するということだけ考えると、ダイキンがなぜそんなことをしたのか分からないでしょうが、インバーター装着を標準装備にしたことで十分採算が合うことになります。これは厳密な意味でルールメイキングではないんだけれども、実は思わぬところからそういう流れになって、その結果ダイキンはすごく有利な立場に立つようになったというわけです。

なかなか面白いケースですね。それぞれの業界で多様なやり方が可能性としてあるということだと思います。わざと規制を強化して、日本企業だけが対応できるようにしようとか、そういう考え方もありだと思うんです。実際に日本が石油ショックの後、自動車が成功したのはそうですよね。アメリカ・カリフォルニア州の排ガス規制が強化され、対応能力の優れた日本がすごい得したということがありました。そういうことで、ルールメイキングについては非常に多元的に考えていかなければいけないことなんでしょうね。

【司会】 ありがとうございます。

齊藤さん、よろしゅうございますか。

きょう実は何人か新入生の諸君も来てくださっているんですけれども、誰か代表して。

よろしくお願いします。

【質問】 本日はお話まことにありがとうございます。

本日のお話を伺っていて、皆を代表してというわけではないのですが、ぜひご意見をお伺いしたいことがあります。中国の方々、特に中国のエリートの方々が持たれている考え方をどうとらえたらいいのかなというところがあります。きょうお話しいただいた「設計主義」に少し近いような考え方も持っている一方で、ただその源泉がヨーロッパとはまた違うような気がするんです。

なんでこのようなお話を差し上げているかといいますと、昨年しばらく北京大学に行って、環境問題に関する議論をさせていただいたことがございまして、その際に気づいたのは、北京大学の方々は割と観念的なところに基づいて、それぞれの地方がどうだからこういうことを話しているんだというわけではなく、安定性という概念が大事だからこういう話をしているんだ、と彼らは言っていました。その概念に基づいていろいろな解決策について話をしてくれました。

逆に日本人は意外と地方に基づいた話をしていたのですが、その際に思ったのは、概念的なものがベースにあって、そこから議論するという仕方に彼らがなれているのかなと思いました。ただ、それではヨーロッパの方々の持っている概念的なものに基づいてツリー的な思考をしていくのかというと、たぶん少しその出自が違って、彼らは国の中にいろいろな人たちがいて、それをまとめ上げるために何かひとつの大きな強い概念を持って、そのような考え方をしているのかなと思いました。古代ギリシャに関してはあまり詳しくないんですが、ではギリシャがそういう環境にあったかというと、もう少し民族的な統一性はあったと思います。

もう一度まとめますと、中国の方々も少し「設計主義」的な概念に基づいた話をされることも多いとは思うんですが、ヨーロッパとも少し違うような気がしていまして、中国の方々の考え方をどのようにとらえたらよいのかというのがご質問です。お願いいたします。

【中谷理事長】 それはちょっと難し過ぎる質問だと思います。それは北京大学に留学したあなたのような人の方がよく分かっているのではないでしょうか。ヨーロッパのすごいところは、啓蒙思想という、国境や民族を超えた思想を創り上げたところです。もともとキリスト教自身が、特定の民族を優先していたユダヤ教から卒業して、どこの国の人にも恩恵が行くような宗教に仕立て上げたから、世界的に広まったわけですね。

中国の場合は、ヨーロッパほどの普遍的議論ができているかどうかは微妙ですが、日本とはかなり違うと思います。中国は非常な多民族国家なので、この人たちを「漢字」という普遍的道具を使いながら統一していたわけです。

中国は儒教の教えを捨てて共産主義思想に走ったわけですが、今では共産主義イデオロギーがほとんど消滅してしまった。宗教も捨て、共産主義思想も捨ててしまった今、中国は何を頼りに国を維持していくのか。これが今問われていることだと思います。何か中国全体を統一するような普遍的な物の考え方、価値観というのはどこにあるんだろうということを、今中国の指導層は模索していると思います。

【司会】 それでは、大阪と名古屋の方にもご質問をいただきたいと思いますが、いかがでしょうか。

【質問】 それではひとつ質問させていただきます。

きょうのお話を聞いていて、一言で言うと民主主義のアプローチのような話から、要はマジョリティーとマイノリティーの話があって、民主主義は基本的にマジョリティーというのは間違える、正しい民主主義ですね、マジョリティーというのは間違えるのが当たり前なので、マイノリティーの立場であったり視点でもって、マジョリティーがやっていることをちゃんとチェックしましょうというのがちゃんと働くと、民主主義というのは機能するというのがあって。

たとえば企業の中でいうと、さっきの現場主義もそうなんですけど、現場がちゃんと元気で、なおかつ会社としてやっている企業というのは、現場の意見がちゃんと経営側にフィードバックされて経営そのもの

が、監視というわけではないですけど、チェックされているとかそういったことがちゃんとできていると強い会社になっていくというのは経験的に感じているんです。そういった場合にそういうマイノリティーというか、現場であったりその本筋ではない部分から、そういうチェックをかけていくアプローチというのは、理事長から見てどうお感じになるのかなと。

なぜこういう質問をしているかというと、先ほどからいろいろ議論があるように、今の話というのは二元論的なんです。右と左があって、左から右を見てみようという話なので。そもそも二元論というのは、ヨーロッパのデカルト主義的なところにある、アウフヘーベン的なところにあるものですから、これは実は理事長のおっしゃっていることとはちょっと違うんですよという話なのか、このあたりが全然整理できないものですから、質問させていただいたということです。

【中谷理事長】「デカルト的な二元論」だとおっしゃいましたけど、そういうふうに分けないのが日本的な考え方なんじゃないでしょうか。だから、どんなに経営の立場から見て能力がないと思われている人がいたとしても、その人を西洋の会社だったら、お前は能力ないから首だというふうになるんだと思うのですが、日本の場合は、その人にふさわしい仕事を与えて、なんとか活用していこうとする。共同体の仲間になった人たちに対する上に立つ人たちの対応というのは、アメリカ的な組織と日本的な組織ではかなり違うのではないでしょうか。

ですから、マジョリティーとマイノリティーと初めから分ける必要はなくて、一体感を醸成するということが経営の非常に大きな課題になっているんじゃないですか。だから少数者の意見をチェック機能として働かせるという発想自体が、日本社会にはなじまないところがあるような気がしますけど、いかがでしょうか。

【質問】大変よく分かりました。ありがとうございます。

【司会】ありがとうございました。

そろそろ最後の質問にいきたいと思います。

中谷理事長

お願いします。

【質問】参考図書に出ていた「反知性主義」のことを中心にお聞きしたいんですが、実は私は中高がクリスチャンスクールだったんですけど、今から思うと長老派なんです。この本にも結構長老派のことがいろいろ書いてあって、今になって長老派というのは、こういう人たちだったんだなということがよく分かったんですけれども、それで子供心に聖書を毎日礼拝であるんですけれども、そのときにすごく頭に残っているのが、「神との契約」というのがものすごく出てくるわけです。それを毎日毎日聞くわけです。それともうひとつ怖いなと思ったのは、神は結構罰を与えるんです。それで従わせる。神って意外と怖いなというその２つが頭に残りながら卒業していったということがあるんです。

それで社会人になりまして、日本が割と超大国になったときに、結構世界と軋轢があるときに、「契約」という概念を向こうがやっていて、日本と割とフェーズというか、感覚的に合ってないなという感じがありました。それはなぜかというと、日本だと「口約束」というのはなんとなく約束みたいなんですけれども、向こうにしてみると、契約書をつくらなくても約束は約束で守るみたいな感じがあって。それはどこにベースがあるのかなと思ったら、たぶん「神との約束」というのは、神ではなくて「口約束」なんですね。そういうところが違うのかなと思って、本質的なところが日本と違うなと思ったことがあります。

最近になって思ったことは、これは宗教やっている人に聞いたんですけど、日本のクリスチャンというのは数%、２～３%ぐらいしかいないらしいんです。一方で韓国は２～３割とかすごい違いがあるんです。ですから、先ほど理事長が宗教は割と戦略的にキリスト教はやるということをおっしゃったのですが、韓国というのは意外と戦略というか、戦術というか、結構たけているところがありますね。一方で日本は、そこのところは弱いというのが確かにあると思うのです。そう思うと日本人は、キリスト教になじまない思想を持っているのかなと思ったんですけれども、その辺についてお考えを聞かせていただければと思います。

【中谷理事長】 まず「契約」という概念が基本的に日本人にはなじまないですね。「契約」というよりも「暗黙の了解」で動く。神様と一緒に手を携えていろいろなことを成し遂げましょうよという物の考え方だから、１回１回契約するとかそういう発想になっていないです。

たとえば会社に入ったときも、厳密な契約書に皆さんサインして入っていますか。みんな暗黙の了解でしょう。暗黙の了解の中で善をなすという考え方で日本社会はやってきたのに、それを契約というふうになると、では契約書に書いてないことはやってもいいのねということで、下手に契約を結ぶと倫理観が劣化するんですよ。日本はそういう考え方です。キリスト教における契約というのは、普通の１対１の対等な契約ではないでしょう。

【質問】 そうですね、割と一方的でそれで罰も与えて、神様というのは結構怖いんですよ。

【中谷理事長】 それに善行を重ねたから、神が恩寵を与えるかというとそんなこともないでしょう。聖書にもすごい一生懸命やっている人が最もひどい目に遭うとかいう話が出てきます。

人知のはかり知れないところで、神様がいろいろな形でおぼしめしをくださっているという考え方なので、契約というけれども、普通、ＡさんとＢさんが契約しましたという契約とは全然違うと思いますよ。私の知っている限り。日本人は伝統を大事にしながら毎日の生活をまじめに全うするというところに価値観を持っている人が多いわけで、全知全能の神がいて、その人は自分たちとは隔絶した存在でという感覚になじめないでしょう。

しかし、それでは、韓国人はなぜキリスト教に転向する人が多いのかという疑問が出てくるかもしれませんね。その答えは「事大主義」です。長いものには巻かれろという思想です。韓国は地政学的に中国に隣接し、圧倒的な中華文明の影響を受けてきた。多くの局面では好き嫌いとは無関係に、中華思想に従わざるを得なかった。そういう歴史を持つ韓国ですから、その時々の権力者に従うという傾向が強いのではないでしょうか。今は西洋文明が入ってきて、それに従うというのが韓国での当然の価値観になります。だからキリスト教が日本よりもずっと簡単に受け入れられたのではないでしょうか。

日本は島国で外国に攻められることもほとんどなくて、自分たちの神話の世界で受け継がれているエートスを維持して、すべて「日本流」でやってこられた国です。だから圧倒的なパワーを持つ全知全能の神様は感覚的に合わないと思っている人が多いと思います。ですから、ミッションスクールの卒業生でもキリスト教に改宗する人は非常に少ないですね。

【司会】 どうもありがとうございました。

ちょうどお時間になりましたので、改めて理事長に拍手をお願いいたします。（拍手）

ご出席の皆さん、本当に90分間ありがとうございました。

開催日：2016年4月27日

「明治維新」とは何であったのか

作家　**原田 伊織 氏**

【司会】 それでは、ただいまより第２回MURCオープンカレッジをスタートいたします。本日、ご登壇いただく先生は原田伊織先生ということで、皆さん、何人ぐらいお読みになりましたか。（会場でかなりの挙手）それなりに多いですね。ありがとうございます。奥書のところのプロフィールをそのまま読ませていただきます。作家。クリエイティブディレクター。昭和21年京都・伏見生まれ。近江佐和山城下、彦根城下で幼少年期を過ごし、大阪外語大学を経て広告、編集制作の世界へ。現在も、マーケティングプランナー、コピーライター、クリエイティブディレクターとして活動していらっしゃるということで、その原田先生が何で歴史書を？というのは、これから追い追いと先生から伺いたいと思います。まずは１時間ばかり、ご講演をよろしくお願いいたします。（拍手）

講　演

歴史を身の内に入れる

原田でございます。きょうは、お招きいただきましてありがとうございます。よろしくお願いいたします。

お手元の資料、「「明治維新」とは何であったのか」という、これに沿って全部お話できればよろしいんですけれども、１時間というお時間ですので、若干はしょらせていただくことがあるかと思います。ただ、それぞれ事例として挙げていることも多いものですから、皆様の場合は「釈迦に説法」という部分もたぶん多いと理解しておりますので、逆にポイントになる部分で、これはどうなのだという点については、後で質疑の時間も設けていただいているようでございますので、そのときにでもぶつけていただければありがたいと思います。

私自身、今ご紹介いただきました通り京都・伏見というところで生まれまして、酒蔵のあるところですが、ちょ

うどこの本で扱っております幕末動乱のときには、一番物騒なエリアでもあったというところです。母方の祖父が、私から言いますとひいおじいさんになりますけれども、幕末のころにちょうど京都へ出てきた。それ以来、両親は京都であったわけですけれども、それから後、私自身は琵琶湖のそばで育つことになるのです。このように身近な人間に置き換えてみますと、幕末動乱と申しましても、せいぜいそんな時間・距離だということですね。それで、いろいろな著名な歴史上の人物を横に並べてみましても、ああ、このときに母親が生まれたのかとか、おじいさんはどうだったのか、そういう見方をしていただきますと非常に歴史が身近になるといいますか、いわゆる「鎌倉時代がね、奈良時代がね」ということとは、また違った意味で身の内に歴史を入れていただけるのではないかと考えております。

たとえば新撰組、芝居になったり映画になったりしており、誰でも知っている素材ではあります。新撰組で一番長生きをしたのは永倉新八でしょうか、大正６年に亡くなっておりますけど。ということは、私の父親が大正４年生まれですから、というふうに身近になるわけでして、せいぜいそんなものだということを感じてください。たとえば司馬遼太郎さん、幕末の歴史については司馬遼太郎さんの著作に負うところが私たちは大きかったわけですけれども、あの方は新撰組のことを書く場合、ずい

ぶんいろいろな方にインタビューをされています。それで新撰組は、最初は壬生の屯所にありました。行かれた方もおありかと思いますが、その壬生の屯所のそばにお寺がありまして、そこの境内で子供たちが遊んでいる。そのときに子供好きの隊士が何人かいて、たいがい近所の子と遊んでいる。そういう方が、司馬さんが昭和30年代にインタビューされたときには80代になっていらっしゃったりということですね。直接インタビューされている。そうしますと、「新撰組の誰それと私は遊んでもらったよ、あそこで」ということになるわけでして、その辺は、非常に私は司馬さんが羨ましいですね。たぶん、そうやって身近なところにひとつスケールを、物差しを置いてみて、歴史というものを、年号を暗記するということではなくて身の内に入れていただくことが、おそらく皆様の日々のかなり高度な難しいお仕事のうえでもなんらかのヒントになるのではないかという思いもいたします。

官軍教育の誤り

本日のレジュメに３つ、最後を含めますと４つぐらいになりますが、項目を挙げさせていただきました。ひとつは「官軍教育の誤り」ということで、もうひとつは「司馬史観の罪」です。これはあえて申しますが「罪」ということ、それで「「明治維新」という過ち」、これは本当に過ちであったのかどうかという大問題ですけれども、私は今の時点で、どちらかといえば民族としてひとつの大きな過ちではなかったか、それは一回検証してみてはどうでしょうかというのが今回の著作といいますか――実は３部作ということで来月も１冊上梓させていただきますが、過ちではなかったか、それは検証してみる価値があると考えております。

そして、一番最後に「世界は「江戸」に向かっている」ということを１行、項目だけ書かせていただきました。これも今年中には、なんらかの最初の問いかけを皆様方にもできればと考えておりまして、９月末までには原稿も用意したいという、そんなスケジュールです。「江戸」と、あえて鍵括弧をつけまして「江戸」、江戸システムのこと

大島氏

なのか、江戸の価値観なのかということですが、いずれにしても、一言で申し上げれば「世界は今「江戸」に向かっている」という考え方をしております。ですから、明治維新というもの、あるいは幕末動乱の出来事の延長線上として、私自身がゴールといいますか、ひとつのゴールですけれども、世界中が今の行き詰まりを脱してどこへ向かったら正解かと考えるかというときには、これは「江戸」に向かっているでしょうという、身近な現象でそのことを解き明かしてご説明できるのがベターかなと思っておりまして、その作業を続けていきたいと考えております。

最初に「官軍教育の誤り」についてです。明治維新あるいは幕末動乱に関する今の教育、あるいはそこで教えられる内容といいますか、それを一言で「官軍教育」というふうに言っております。これはたぶん、幕末を扱われる方皆様はこの表現をお使いになると思います。別の言い方をさせていただければ「薩長史観」という言葉があったり、やはり「官軍史観」、「薩長史観」という言い方が一番多いとは思います。ご存じの通り、薩摩・長州というのは勝ち組でありまして、薩長土肥という言葉がありますが、実質的には薩摩･長州、さらに突き進めていきますと、西南の役以降は特に長州です。「長閥」――長州閥のことを「長閥」と呼んでおりましたが、言ってみれば「長閥」の体制といいますか、政治的価値観といいますか、それが平成の今も続いているという考えをしております。

「古事記」、「日本書紀」がそうでありますように、だい

たい歴史書といいますのは、あるいは歴史そのものは勝者が書くものでして、そのこと自体をあまり責め立てても、これはしようがないことだと思います。問題は、それを何百年も放っておかないことだと思っておりまして、普通の民族――普通の民族と言い方も非常に漠としておりますが、今、地球上におります普通の民族国家の場合、100年、200年もたちますと、たいがい自分たちの歴史を振り返って検証してみるというのが普通の営みであろうと思います。ただひとり、日本がやっていないといえばやっていない。思い切り長い時間軸を今から過去にさかのぼって引いてみて、その上に幕末以来の出来事を、どちら側につくかはちょっと置いておきまして、どちら側についたとしても、都合のいいことも、都合の悪いことも誇張せずに、あるいは隠さずに、一回フラットに並べてみましょうという、検証というのはそういうことでまずはよろしいかと考えております。

そういう視座に立ちますと、今の官軍教育というのは、この辺が違うのではないですかということがいっぱい出てくるということですね。2種類に分けて、史実を隠蔽しているという側面、もうひとつは史実を歪曲しているという側面があります。レジュメにいくつか挙げておりますのは、その事例としてお考えください。たとえば、京都を舞台にして日本の夜明けを信じて勤皇の志士たちが、映画ですと鞍馬天狗の助けをかりまして――「鞍馬天狗」をご存じないですか、ひょっとして。ご存じですか。嵐寛寿郎ですね。私たちは「アラカン、アラカン」と言って、ああいうモノクロ、砂嵐が降るような映画しか見る機会がなかった昭和20年代というのがありますけれども、アラカンが鞍馬天狗で、杉作が松島トモ子でしたね。白馬にまたがって格好よかったですね。「月光仮面」の元祖かなという気もしますけど。桂小五郎、正義の志士ですね、勤皇の志士ですから。正義の志士桂が危ない、どこからともなく鞍馬天狗がさっとあらわれて「杉作行くぞ」みたいな、そんなシーンで、ああいうシリーズを何本見ましたか。ですから、エンターテイメントの世界においても、ある意味勤皇史観といいますか、「勤皇が正義で佐幕は悪」という非常に明瞭な色分けがなされていた。分かりやすいですね。非常に分かりやすかったです。

そういう京都で勤皇の志士が活躍していたということですが、実際に活躍というのは何をやっていたか。これは史実に照らしますと、はっきり申し上げて「テロ」ですね。暗殺というのはテロだとすると、彼らのやっていたことは、ほとんどがテロリズムに該当すると思います。

勤皇の志士はテロリスト？

いくつかざっと読み上げますと、たとえば安政の最後、安政7年というのは万延元年のことでもありますけれども、西暦で申し上げますと1860年です。大江さんの「万延元年のフットボール」という、あの万延ですね。イギリス公使館の通訳・伝吉という男が暗殺されております。大老である井伊直弼が江戸城の桜田門外で暗殺されております。ご存じのとおり「桜田門外の変」というものですね。イギリス人の水兵2名、イギリスの仮公使館で暗殺をされております。このときの犯人は松本藩の藩士。また、土佐藩の吉田東洋が暗殺されております。これは土佐勤皇党・那須信吾という男がおりまして、これが犯人ですね。これの弟が後の宮内大臣をやっております田中光顕です。それから、摂関家のひとつであります九条家の家臣・島田左近という侍が暗殺されております。これは薩摩の田中新兵衛が犯人です。同じく九条家・宇郷重国も暗殺、これは土佐勤皇党の岡田以蔵――岡田以蔵というのは、ひょっとしたらご存じかもしれませんね。「人斬り以蔵」「人斬り半兵衛」とかいろいろ言われておりました。だいたい、「幕末四大人斬り」というのがありまして、日本三景じゃあるまいし、人斬りに四大人斬りというのもどうかと思いますが。だいたいそういう覚え方が好きですね、私たち日本人は。人斬りの場合は、どういうわけか四大人斬りになりまして、金閣寺の寺侍・多田帯刀、これは、実は井伊直弼の右腕といいますか、懐刀と言われた長野主膳の側室の子供なんですが、多田帯刀が暗殺等々、これずっといきますと、結構何ページにもなるんですね。

たとえば、こういう場でちょっとあれですけれども、目明し猿（ましら）の文吉という男の暗殺は非常に残虐でして、竹を肛門から突き刺して、脳まで全部それで貫き通して、そのままの形で串刺しのようにして町にさらした。この手の殺し方がやたら多い。たいがい殺された人間は手足ばらばら、あちこちに、こっちの屋敷に右手を放り込んでおく、こっちの屋敷に首を放り込んでおくみたいなことがあります。佐久間象山も暗殺されております。たとえば冷泉為恭という絵師がいましたけれども、これはひどかったですね。箔をつけるため、かなり長期間追いかけ回した。この犯人は長州藩士ですけど、絵師だったら殺しやすいと思ったのかどうか。それで自分はまだひとりも殺っていないのでどうもひとりぐらいやっておかないと仲間内で発言力がないというひどい話なのです。これは実際にあるんですね、実は伊藤俊輔、後の伊藤博文ですけれども、彼がやった暗殺もそれですね。幼いころからの仲間といいますか井上聞多、後の井上馨ですけれども、これと一緒になってということが多いんです。伊藤は儒学者を殺しておりますが、それ以外にもいろいろと殺っているんです。そのことは、たとえばアーネスト佐藤というイギリス公使館の書記官ですが、「一外交官の見た明治維新」ですとか有名な著書がありますけれども、彼らの記録にも出てくる話です。そのとき伊藤は、何も言わないけれども、にやにやしていたというようなことで、高輪のイギリス公使館ができたときも、あれを焼き討ちしたのも、伊藤、井上、高杉といったあたりですね。

もともと薩摩・長州というのは後ろ盾としてイギリスの支援を受けておりましたので、イギリスも明治になってからもそんなにぎゃあぎゃあ言っていないんですけれども、すべてそういう補償といいますか賠償は幕府がやりました。ずいぶん金を使っていますね。

下関で４ヵ国の艦隊を砲撃した事件というのはご存じかと思いますが、あのときの賠償金も幕府が払いました。薩英戦争のとき、薩摩では、東郷平八郎たちがまだ15～16歳というときですけれども、あの賠償金も幕府が払っております。そういう点でいいますと、幕府財政も大変なんですね。

つまり、こういうことが全部隠されてきたということです。私は鞍馬天狗しか信じていなかったものですから、実態はこういうことだったのかと驚きました。

「鞍馬天狗」の中で「桂さん、日本の夜明けは近い」みたいな台詞があったかと思うのですけれども、じゃ、その桂さんはこのときどうしていたのか。実は彼は長州の激派、過激派とも激派とも言いますが、それのリーダーでした。ただ彼は非常に巧妙といいますか、慎重といいますか、当時のニックネームが「逃げの小五郎」と言いまして、危険からは必ず距離を置いて逃げる。池田屋騒動のときもそうです。あれはたぶん、私は計算して逃げていると思います。知っていたと思いますけれども、そういうことで、こういうことは全部隠蔽されてきたということです。

「鎖国」は存在しない

そして、私たちが意外に基本的なことで大きな錯覚をしているのが、「鎖国」の実態です。そもそも日本は江戸期、「鎖国」をしていたのかどうか。そして、「鎖国」というのは何なの。実は、国をがっちり閉じていたという事実はありません。江戸４口、函館――函館のことは正式には蝦夷口、そして、長崎出島でご存じの通り長崎口、対馬口、もうひとつは薩摩口、この４つの口が幕府公認の対外窓口でありました。特に後々問題になりますのは対馬口です。ここには朝鮮半島から、朝鮮通信使というものが江戸期に13回来ていますので、単なる交易だけではないのです。その通信使の記録が、日本と韓国では解釈が違っているという問題が今新たにありますけれども、あれはちょっと別問題でして解釈の違いようがないんですね。時の政権が都合のいいところをどう利用するかというだけの話でして。

では、「鎖国」というのは何だったのか。「鎖国令」というような法令があって、それで出入国を禁止したのかというと、そんな事実はありません。そもそも「鎖国令」という法律もありませんし、「鎖国」という言葉が一番最初

にあらわれたのは西暦で申し上げますと1800年です。しかも、それはケンペルというヨーロッパの方から来た医者が帰国して、発表したのはドイツで発表したかと思うのですが、彼の論文の中に出てくる言葉のある部分を「鎖国」と訳しただけです。

そのころの日本では書籍は、版木をつくってかなり流通はするのですけれども、これについては写本しかないので、一般には一切出回っていないですね。ということは江戸期に、少なくとも1800年には「鎖国」という言葉は誰も使っていないし、知らないということになります。「鎖国」は、実は明治以降に普及した言葉です。

しかも、そのケンペルの論文といいますのは、ある意味管理貿易のひとつの形であり、それが、そのときの日本の国情に照らして、それがいかに合理的かということを論文にあらわしたもので非常に肯定的なんですね。事実、明とも交易は続いている。明が清になっても同じことです。そして、シャム、ルソン、長崎口ではオランダという形で、確かに細々とではありますけれども、海外との交易はずっと続いている。「鎖国令」という令も存在しないし、完璧に国を閉じたという事実もありません。そこも大きな誤りです。公教育においては、この4口のことは、たぶん私たちは何も知らされていなかった。ですから、これは「明治新政府がこうこうこうして、やっと日本は国を開いてヨーロッパの文明を取り入れてこうだよ」と、明治維新を肯定するためにということでしか考えられない。鎖国ひとつ取り上げてもそういうことになります。

「薩長同盟」も存在しない

では、歪曲の方になるとどうなるか。たとえば有名な薩長同盟と坂本龍馬についてですが、実は「薩長同盟」という同盟は存在しません。特に軍事同盟として存在したかのように言われますけれども、両者が一緒になって幕府を倒したということは事実無根であります。さすがに、最近になって多くの学者の方も気が引けたのか、「薩長同盟」という言葉は使わなくなりました。でも、急にというのも何なのでしょうね、やはりできないので「薩長盟約」というふうに学者の皆さんはおっしゃるようになりました。となれば、薩摩と土佐の「薩土盟約」とかもありますし、その程度みたいなことになるのですが、この薩摩と長州の盟約というのはいいかげんな話でありまして、これが結ばれる――結ばれるというか、もし同盟として結ぶのであれば、せめて覚書1枚、契約書的な何かがあって然るべきです。それを桂（木戸）と西郷が契ったということであれば、両者が署名した書面があって然るべきです。しかし、それは一切存在しません。

どういうことかといいますと、確かに、彼らは京都の薩摩屋敷で会っています。ただ、その2～3日後ぐらいですけれども、木戸の方から、つまり桂の方から、そのとき一緒にいた坂本に対して手紙を出しています。「あのとき西郷と話したのはこうこうこういうことだったよね」と確認の手紙を出しています。そのときに坂本の方で、「ああ、そうですよ。それで間違いないですよ。私もそれで聞いていますから間違いないですよ」という返事をしました。実は、それだけの話です。それが今、「薩長同盟」という仰々しい話になっているのです。

そもそも、この会談の半年前に下関で長州はすでに薩摩の力をかりていますし、先ほどの伊藤俊輔、伊藤博文ですけれども、それと井上聞多、いつもこの2人は一緒ですが、彼らが長崎の薩摩屋敷に薩摩藩士という名目で出入りしているんですね。それは確認されていまして、なぜかといいますと、グラバー商会経由で、薩摩が入ってグラバーが入って長州が入って、三角形で密貿易をし

ていたのですね。武器の密貿易、これのために井上も伊藤も薩摩藩士という名目で長崎に入っている。つまり、薩摩と長州はその時点でそういう関係であったということですね。そのとき長崎の薩摩屋敷にいたのは小松帯刀ですから、これは公然と、といいますか、両者の間ではそういう関係が成立していた。それから半年たって京都で３者がどうこう言ったって、これは今さら何を言っているのということで、時間的にも薩長同盟というのは、言われているような同盟は存在しないということになります。これはひとつ、歪曲の事例になるかと思います。

「坂本竜馬」と「坂本龍馬」

もうひとつ申し上げますと、坂本龍馬についてです。坂本龍馬といいますと、司馬遼太郎さんの「竜馬がゆく」が国民的な人気を博して今日の龍馬像は確立したと理解しております。司馬さんは尊敬する大学の大先輩でありまして、坂本龍馬について批判するのは私も非常につらいものがありまして、とはいえ、違うことは違うでしょうということです。

司馬さんの「竜馬がゆく」の「竜馬」という字は、実際の「坂本龍馬」という郷士崩れのような男の「龍」の字とは違いますよね。ですから、これは司馬さんらしくないといえば司馬さんらしくないのですが、すでに逃げを打っているわけです。「あれは小説だよ」ということですね。ですから、これはひょっとしたら私たち読者の方に問題があるのかもしれません。「リョウマ」、読み方は同じだけれども、この「坂本竜馬」と実際の「坂本龍馬」は字が違うではないか、これは別人ではないかと言われればそれまでです。

では、龍馬がひねり出したという「船中八策」はどうなんだと思われるかもしれません。あれは龍馬作とも何とも確証はありませんし、そもそも船中八策なるものが存在したのかどうか、それすら疑わしいですね。

それで、実際の坂本龍馬といいますのは、言ってみれば、今申し上げたグラバー商会のトラフィック兼営業担当というのでしょうか、そういう位置づけが実態に近いということです。

当時の長州藩は、平たく言いますと幕府からもう完璧ににらまれていて、にっちもさっちも動きがとれない。一方で薩摩は、もともと公武合体論ですから、倒幕なんか藩主は考えたことはないんですね。考えているのは西郷と大久保等の少数派でした。そして、薩摩がグラバー商会から武器を買う、それを長州へ流す。長州は金がないから、それを米で払う。薩摩は米が欲しい。三者ウィン・ウィン・ウィンということで、その三角取引が成立したわけです。だから、先ほどの２人は、そうやって薩摩藩士名義で長崎に出入りできたわけです。三角取引が成立したのはいいんですけれども、武器を誰が長州へ運ぶのか、ということで、グラバーが「ああ、うちに坂本というのがいるから彼を使おう」という話になったのですね。それまで、坂本龍馬は、たしか月３両何分かの給金で小松帯刀が飼っていた男でした。

勝海舟がいろいろなことを書いているじゃないかという反論がおありかもしれませんが、明治になってからの勝海舟の話というのはあまり信用できません。「氷川清話」とかいろいろな記録が残っていますけれども、あれを全部チェックしますと間違いだらけです。そもそも日付も、ひどいのは年度が違う、人の名前が違う。あれほど信用が置けないものはない――だから、あれは資料として使えないですね。たとえば咸臨丸のことをみずから語っています。初めて日本人の手で太平洋を横断したことについて、「これが日本で初めてだよ、俺がやったのが」というふうに実際に語っています、「氷川清話」の中でも。でも、これは真っ赤なうそでして、あれはアメリカ軍の士官が全部操船をしているわけで、勝は船酔いがひどくてこもりっきりで、それどころか艦長の木村摂津守が気に入らないので、ここでボートをおろせだとか、この嵐だから艦長にみずからやってもらえとか、そういうことばかり言って足を引っ張っただけというのが実態です。なぜそれが分かっているかといいますと、木村摂津守自体の記録もありますし、たまたまその船に福沢諭吉が乗っていた、小野友五郎も乗っていたということで、そのあ

たりの記録、証言を全部つき合わせますとそういうことになるということです。ですから、坂本・勝、強いてもうひとりあげますと吉田松陰、司馬さんの評価したこの３人が司馬さんの大いなるミスといいますか、私は罪だと思っています。

人物でいえばその３人ですが、事件で申し上げれば「桜田門外の変」について、「歴史を進展させた」という言い方で、司馬さんは桜田門外の暗殺を評価しています。集団であれ個人であれ、「この暗殺は歴史を躍進させた」とか、「この暗殺はだめだよ」とか、暗殺とテロを区分するということはどういうことなのでしょうか。それをやったら最後ですよ。それはヒットラーとか毛沢東と同じになってしまう。おおよそテロに、「これは正しいテロ」という考えを持ち込むことは間違いです。テロはすべからくテロで否定すべきです。私はそのスタンスですが、暗殺も然りです。暗殺という手段について、「この暗殺は正しい暗殺」とか「これはだめな暗殺」とか、それを言ってはだめでしょう。「教条主義」という言葉がありますが、それは教条主義者がよくやる手です。だから、一部の学者・研究者が、司馬さんと昭和維新の共通点というのをよく指摘されるのはそういうところですね。つまり「明治絶対主義」、「明治維新至上主義」に陥る、そこが、「司馬史観の罪」のもとです。あの３人とひとつの事件を高く評価したということが間違いのもとではあります。

今の坂本の例、勝の例、吉田松陰の例、そして薩長同盟の例、ここらあたりは歪曲の範囲に入るかと思います。こんな感じで、私たちは隠蔽という側面と歪曲という側面で官軍教育と通常言われております歴史を教わってきた。私自身がたっぷりとそれに浸かっていた、そういうことなんですね。

司馬史観の罪

戦後になって、さらにそれに拍車をかけたといいますか、それを固定的に確立したのが司馬さんの「司馬史観」ですね。３人とひとつの事件について特に申し上げましたけれども、これはもう少し根深いものにつながりまして、歴史の連続性を遮断しているということです。

明治維新至上主義の立場に立ちますと、どう考えても昭和に入ってからの軍国主義というのは困るんですよ。あれは、言ってみれば長州軍伐の産物なんですけれども、そうなると司馬さんとしては具合悪いんですね。ご自身でもおっしゃっていますけれども、「私は龍馬が好きで、好きで」と。それはいいんですよ。講演とか雑談程度でも「長州も好きで、好きで」と、それは結構なんですけれども、それが発展していって、明治はクリスタルのように合理性が尊重された時代で、昭和だけが、痛いと言っていいほど民族としての連続性を持たないという断定をしたのです。

したがって、昭和一ケタから敗戦に至るまでは、まるで異民族の歴史のように、美しい日本人の歴史とはまったく関連がないというニュアンスのことをおっしゃる。それが、後にどんどんその期間が短くなるんですけれども、この20年だけは、最後は昭和16年の近衛体制はとそこまで縮まってくるのですが、40年であれ、6年であれ、5年であれ、同じ民族の歴史を一部分だけ、これは民族としての連続性を持たないという言い方は承服しかねる。それはあり得ないでしょう。同じ民族の同じ歴史、1本の線、先ほど申し上げた同じ1本の線の上に絶対あるはずですから、なぜそこだけ遮断するのか。そこを遮断した方が、維新至上主義の立場に立ったときは都合がいいのです。ストンと落ちるでしょう。明治維新はすばらしい、美しかったとストンと落ちます。腑に落ちると思うのです。だから、そういうふうになってしまう。

北一輝もそうですね。今申し上げた昭和維新の理論的支柱というのは北一輝ですが、あれがあって例の2.26が起きますが、「治安維持法以前の日本が理想郷である」と、司馬さんとまったく同じようなことを言っています。つまり明治なんですね。そこが、学者さんがいろいろなネーミングをつけて、「社会民主主義」の立場ではないかとかいろいろな言い方がありますけれども、いずれにしても、先ほどのテロの区分といい、今の歴史の一部を、「これはちょっと連続性を持たない」というふうに葬り去る

ことは暴論ではないかとさえ私は思っております。

司馬さんという方は、私なんかは足元にも及ばない、ご存じの通り「知の巨人」と言われる非常に偉大な方で、私自身が大きな影響を受けていますし、まして大学の大先輩です。ただ、「先輩、ここは違うでしょう」と、これは申し上げざるを得ないですね。それは、その影響が自然と大きくなったゆえに「罪」と言っていいぐらいの影響力があると思います。

「明治維新」という過ち

そのようなポイントで、そもそも「明治維新」というのは、そういう誤りを全部史実に照らして並べられたとして何だったのだという話になります。

「「明治維新」という過ち」という私の本のタイトルの通りですが、どこが過ちなのだと言うと、前の時代を全否定したということです。これはよくありますね。政権が変わる、いわゆる古い言葉で言いますと「天下が変わる」といいますか、天下人が変わったりしたときに、前の権力者、前の政権、前の天下というものを、一部だけではなくて全否定しますね、何から何まで。これが大問題です。たとえば、明治になってお雇い外国人がたくさん日本に来て、ベルツ博士なんかもそうですが、帝大を中心にして教鞭をとるんですけれども、あるいは画家、医者、ビゴーなんかもそうですね。彼らの前で薩摩・長州出身の新しい華族、公爵・侯爵・伯爵・子爵・男爵、こういう人たち及びその関係者がなんて言っのたかというと、「日本には歴史はありません。これから始まるんです」という言い方をしています。それが倒幕勢力サイドの、言ってみれば思想ですね。その言葉に象徴されるように、その前時代、つまり江戸期というものを完璧に悪の時代として全否定した。これが過ちのひとつにつながるのではないかと思います。

それと、そもそも「明治維新」という言葉が、いつ普及したか、いつ一般化したかという問題です。

2.26事件を生んだ昭和維新運動という水戸学をベースにしたムーブメントあるいは政治運動がありました。結果的に、その前の5.15もそうですけれども、2.26事件という若手将校の反乱というものが起きるのですが、あのときに東京は全部戒厳令が敷かれましたね。戒厳令というと、私たちはまったく自国には関係ないことのように思っていますけれども、東京には戒厳令が敷かれたことがあるわけです。ちょうど東日本大震災で九段会館の天井が落ちましたが、あの九段会館は反乱を鎮圧する司令部が置かれた場所です。その横に昭和館というものが今、立派に建っていますけれども、戒厳司令部のあったのがあそこの交差点のちょっと先の九段会館です。あのころの――あのころというと、私が生まれるたかだか10年前です、昭和11年ですから。そのころ、「明治に回帰しよう」と、明治を理想郷のように位置づける、「昭和維新」と言われた運動が熱を帯びてきて、この辺が北一輝の影響かと思いますが、そのときに「明治維新」という言葉が一般的に普及しました。もちろん動乱の直後にも「維新の大業」という言い方、もともとこれは水戸学の言葉ですが、そういうことがありましたけれども、「明治維新」という言葉が一般の方々に定着したのは昭和維新のときです。そこにもすでに誤解があります。

水戸学の言葉としての「維新」は「天誅」、つまりテロリズムをやって事を新たにするということを内包しています。ですから、橋下さんが「日本維新の党」をつくったときに私はびっくりしました。別に橋下さんがテロを起こすつもりはさらさらないと思うので、単に知らなかっただけということですけれども、「維新」という言葉をよく勇気を持って使ったなというのが最初の印象でした。

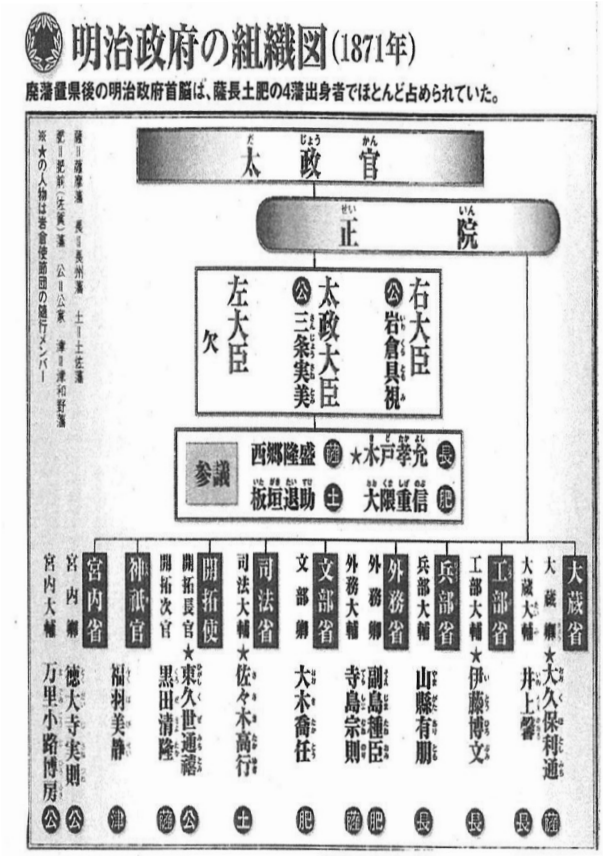
この「維新」という言葉自体が水戸学と深い関係があるのです。水戸学は、国学の鬼っことでもいいますか、天皇を神格化するひとつの学問なわけです。元凶は水戸黄門です。そこから始まっているんですけれども、いずれにしても前の時代を全否定してしまったということです。

それと、そもそもあの維新運動はなんのグランドデザインも持っていなかった。幕府を倒そう、慶喜を倒そう、それだけですね。じゃ、倒してどうするの、後どうするの、という青写真がまったくなかったのです。ここが大

問題で、じゃあどうしたかというと、実は幕末の幕府にそれはある程度用意されていたのです。幕末の阿部正弘政権、井伊直弼政権、あのあたり――堀田正睦政権を入れてもいいのかもしれません。あのあたりの政権に、私はテクノクラートとあえて認識していますが、小栗上野介、水野忠徳、岩瀬忠震、川路聖謨、井上清直、といったそうそうたる者たちがいました。彼らがつくった、あるいは彼らが構想していたことをそのままやるしかない。たとえば、廃藩置県は小栗の郡県制を実施したものですね。また、横須賀に製鉄所、あの時点の製鉄所というのは造船所のことですが、それも幕府の構想のままです。それで議会、これも小栗の公議政体そのままです。幕臣の西周もそれを慶喜に献策していますけど。ですから、幕末の優秀な官僚の中には、慶喜を大統領にした政体という構想がありまして、その公議政体というものをどうやってつくるかという構想があったんですね。それを踏襲した。したがって、さすがの司馬さんも小栗のことを「明治の父」と呼んでいますけれども、「明治の父」と呼ばれる人間は全部、今申し上げた３つの政権の時代の幕末の優秀な幕府の官僚であったという言い方もできます。

どこまで復古すれば気が済むのか

もうひとつの過ち、これが大きいのですが、司馬遼太郎さんには「「明治」という国家」ですとか「「昭和」という国家」という著書といいますか講演録があるのですが、その他の方々もそうですが、明治になって初めて四民平等になって「国民」をつくったということをよくおっしゃる。「国民」をつくったと。でも、これはとんでもない間違いで、国民たるものはひとりもつくっていないですね、倒幕勢力というものは。つくったのは「皇民」であります。天皇の赤子、みんな天皇の子供であるという「皇民」はつくりました。「国民」はつくっていない。司馬さんが、勝海舟のことを評価するときにこういうことをおっしゃる。「確かに勝のやったこと、これも、これも、これもめちゃくちゃです。でも、勝の場合は許されるんです」と、こういう言い方になる。なぜ勝の場合は許されるのだ。坂本



出所：別冊宝島『日本近代史「明治維新」という嘘』監修　原田伊織

と並んで、国民をつくったひとりだからですと。これは、ちょっと腑に落ちないですね。

そもそも明治の最初の政権、太政官政府といいますか、それが資料にお配りしたような仕組みになっています。

維新でどこへ復帰すればいいんだということで、これは律令時代の名称ですね、全部。この太政大臣は三条実美というのはどういう人間か。長州過激派に操られただけです。８月18日の政変というものがありまして、孝明天皇の怒りを買って都落ち、いわゆる「七卿落ち」、たぶん歴史の時間で習われたと思います。七卿落ち、７人の公家が長州に落とされた。そこから後、長州はずっと朝敵ということになるのです。その長州過激派に操られて朝廷をうまく操縦しようとしていた三条にたいして、孝明天皇が堪忍袋の緒を切ったみたいなことなんですが、政権がひっくり返ったときには、その七卿落ちで長州へ落とされたことのみが勲章になるんですね。その勲章だけで太政大臣をずっと務めます。それで下級公家だった

岩倉が右大臣。左大臣をなぜ空けてあるか、岩倉が後で自分で就任するつもりだったのでしょう。大蔵ですとか、工部、兵部、外務、これは全部律令時代の名称ですね。確かに復古政権です。

では、どこまで復古すればいいんだということですが、このときにできた神祇官は、あまりやることがないので何をやったか。日本中の寺という寺、僧侶、仏教の弾圧ですね。つまり、日本の伝統文化の破壊です。タリバンが仏像を爆破したりしましたけれども、あれと同じですね。興福寺、内山永久寺――このうち内山永久寺は、この地上から姿を消すぐらい破壊されましたから。奈良の興福寺も、今は奈良ホテルですとか奈良県庁のそばですけれども、あれは全部興福寺の敷地だったのですが、興福寺の五重塔は25円、一説では15円で売りに出されて、興福寺の経文というのは、包装紙にするために町方に二束三文で売却されたのです。このように徹底的に仏教は弾圧されました。なぜか。これは外来のものだからです。尊皇というのは、神代の時代からわれわれがかくかくしかじか守ってきた大切な信条であったということで、仏教までも外来だと言い出したのです。

では、どこまでさかのぼれば気が済むのということになるのですが、それは建前の世界です。やっている実際は西欧崇拝といいますか、とにかく西欧文明を模倣しろということですから、これは非常に極端なんですね。たとえば明治30年代ぐらいになりまして、大山巌という日露戦争の陸軍の総司令官がいますけれども、彼のところへある男が「閣下、あのときはたしか、尊皇はいいんですけれども、攘夷ではなかったですか。尊皇攘夷ではなかったんですか、われわれは」みたいなことを大山に言った。どこまで本気で言ったのか、嫌味で言ったのかもしれないですけれども、そのときの大山がたった一言、「あのときはあれしかなかったんです」と、そんな程度なんですよ、尊皇攘夷というお題目は。

世界は「江戸」へ向かっている

中谷理事長は経済学の権威でいらっしゃいますので、

原田氏

その前で非常に僭越なことを申し上げますけれども、昭和20年代というのはマルクス経済学がほとんど主流といいますか、力があったと理解しておりますが、その中でもやはり講座派だと思われますし、その講座派の連中が結構、この考え方を定着させてしまったという面はあるかと思います。しかし、人間の歴史というのは教条的にはいかないでしょう。生身の人間が喜んだり、悲しんだり、怒ったり、それに付随して起きるいろいろな出来事が喜びも悲しみも一緒にして堆積していく、その積み重ねが歴史だと思われます。しかし、たぶん講座派の人たちはそうはとらないのですね。そもそも大前提が「人間はホモ・エコノミクスである」ということであったかと思います、初歩的な話で恐縮ですが。そういう歴史観ではとらえられないだろうと思います。たまたま今は、ニューパラダイム派ということなんでしょうか。このあたりは逆にお教えを請いたいと思いますが、もうパラダイムがシフトしていくということはよく言われていることかと思いまして、おそらく皆様も、日ごろのお仕事を通じてそういうことはひとつの軸として論理を組み立てて、いろいろコンサルティングにも当たっていらっしゃるのではないかと思います。

前の時代を全否定するというような歴史観は、もうそろそろ終焉と言っていいかと思うのです。たとえば、日本でいえば堺屋太一さんが「知価社会」ということをよくおっしゃいました。個人の納得ですとか好みですとか、そういうものが物財よりも価値を持つ、なおかつそれが

具体的な財を生む、そういう社会がポストインダストリアル社会、つまり脱工業化社会の姿だということをしきりにおっしゃったかと思うのです。それが具体的にぴったり正解かどうかというのはこれから出ると思いますが、ただ、その動きはおそらく80年代にイギリスとアメリカで始まっているはずですし、日本では20年遅れて始まっているはずですし、皆さんの身の回りに起きていると思います。街で起きていること、そういうところへの影響といいますか、社会的な価値観の影響を受けた現象というのがいっぱい出てきているはずで、それを見逃すなということですね。

私は、よくスタッフに言うんですけれども、そういうものを「時代の気分」というふうに呼んでいます。かつて私の若いときには、京都の町家がブームになるなどということはあり得ない。田舎者の私ならともかく、若い女性が風呂敷だ、手拭いだと、そんなもの相手にするか、当然相手にしなかったですね。フランス人が、何であれほど「豆腐、豆腐」と言うのだ。彼らの発音だと「トーフー」と言うらしいんですけど。それで「もったいない」、そんな言葉がなぜ国際語になるのだ。「おもてなし」もそうですね。

もっと卑近な例で申し上げれば、きょうお帰りのときに、どこかでひょっとしたらそういう光景に出会う方がいるかもしれませんが、町の酒屋さんの入り口の一杯飲み屋みたいなところ、酒屋さんとカウンターで飲む場所が一緒になっているような店があったりします。あれは、かつてはおっさんの世界だけの話で、そこへなぜ若いか女性が行き出した。もっと申し上げれば、新橋というのはおっさんの町でした。それが、なぜ若い女性が新橋を席巻するようになったのか。席巻と言っていいぐらい、一時若い女性が大変な数になりました。それが新橋の主流になって、それは、ちょっと今はすたれましたけどね。ただ、ニュース番組なんかを見ていると、サラリーマンイコール新橋と定型でそこに聞いたりしている。あれは新橋の今の実態ではないですね。飲み屋さんを全部回ってみて、代表性はどこまであるかという話ですよ。

そういうふうな日常私たちが目にできる現象、そこに地下水のように流れている新しいパラダイム、その影響が出ているはずです。そこが時代の気分をつかまえるという作業で、とても大事なことで、それなくして企画書は書けないと私はよく言います。あんな不便な京の町家に真っ先に惚れ込んで、麻生圭子さんでしたか、向こうへ住み着いちゃったんですけれども、それは今から15年ぐらい前の話で、それからずっとそうなっている。

そもそも今居酒屋へ行って、あるいはちょっと高級な居酒屋といいますか、ほとんどが純粋な和ではないですね。フレンチの要素がどこかに入っているということですとか。また、若い20代の女性がなぜ花火職人になるのだ。それが何で許されるのか。なぜ杜氏、酒蔵に入って酒を発酵させるのが杜氏ですけれども、あれは女人禁制の世界ですね、伏見でも灘でも、どこへ行っても。なぜ女人禁制か、あれは髪の毛が落ちるからですね。別の理由もありますけれども、それを押して、私はどうしても酒をつくりたいという女性が登場している。ですから、なぜそういう現象が起きるかということです。そこの「なぜ」という部分が、「世界は「江戸」へ向かっている」というところへ最終的に結びつくと私は信じております。海外の学者が先に江戸を評価し出して、海外で評価されると、たいがい日本の学者さんは評価します。お決まりのパターンでありますが。

世界史には大きく分けて、古代、中世、近代という時代区分しかありません――ありませんと言うと言い過ぎかもしれませんが、それで済むんですね。ところが、日本史を論じる場合は、古代、中世、その後に近世、その後に近代というふうに近世をはさまないと説明ができない。かつて、舛添さんの原稿に赤を入れて、彼が近代と書いたところを近世と書き直して返した。そうしたら、また彼は近代と書き直して戻してくる。分からないなと、また書き直して、何回も往復して、あまりにも納得しないので、そのまま近代で通しましたけれども、つまり、国際政治学者として華々しく登場した舛添さんは向こうの歴史の近代しか知らなかったのでしょう。その「近世」という

ものを今、海外の学者が評価し始めている。この「ということは」という後がこれからの私たちの仕事、皆様方の仕事ではないかという気がしております。

　済みません。あちこち飛びながら、はしょりながらで乱雑な話になりましたが、ここで一応締めさせていただきます。ありがとうございました。（拍手）

質疑応答

【司会】 原田先生、どうもありがとうございました。

それでは、限られた時間ではございますが質疑応答という形にさせていただきます。

【質問】 どうもありがとうございました。きょう、直接原田先生のお話をお聞きできるということで、とても楽しみにしておりました。本当にありがとうございました。

せっかくの機会なので、ぜひ３つばかりお聞きしたいことがあって質問させていただきたいのですけれども、まずひとつ目ですが、私なんか、まさに薩長サイドがつくった歴史教育を受けた人間なので、この本を読ませていただくと、まるで信じられないというか、SFを読んでいるのではないかと思ってしまったわけなんですね。しかし、先生がこうやって書いていらっしゃるわけですから、たぶん本当なんだと思いますし、それと、もしこれが名誉棄損に当たるのであれば、たとえば吉田松陰の子孫であるとか、東北に行った世良の子孫からたぶん訴えられているというようなことになるのでしょうけれども、そういうことはない。そうすると、これはたぶん本当のことなのかなという感じはしたのですが、あまりに歴史教育で学んだことと違いがあるので、にわかに信じられないという部分も多いのです。質問としては、なぜ今までこのような本というか、こういうようなことが世の中に出てこなかったのかなということがひとつ。

それから２つ目ですけれども、確かに、司馬遼太郎さんが書いた本にすごく影響を受けているなと思うんですね。追い打ちをかけるように、たとえばNHKの大河ドラマでも「竜馬がゆく」とか「花燃ゆ」とかいろいろやると、あの辺がとてもキラキラ輝いている感じに見えるわけですね。そうしますと、「知の巨人」と言われる司馬遼太郎さんでしたら、膨大な資料を読んでいらっしゃるわけですから、たぶんいろいろな自分の考えと違ったような資料もたくさん、きっと遭遇したと思うのです。でも、そこを切り捨てたというのか、何かよく分からないんですけれども、そうすると、確信犯でそういう美の方向に導いてしまったのか、それとも本当に信じて、たとえば龍馬とかそういうものに対して心酔していったのか、どちらだと原田先生は思っていらっしゃるのかというのが２つ目。

それから３つ目なんですが、長州テロリストということで長州のことがよく出ていると思うのですけれども、長州が、要するに陸軍の思想のもとになり、その陸軍が悲惨な戦争に日本を導いたというようなことの連続性があるのではないかということが書かれていました。そして、たとえば、もし歴史で「たられば」がなければ、もしかしたら日本はスイスのような国になったかもしれないということも書いてあります。そうしますと、パッと私が思い浮かんだのは、今の首相は、たしか長州の人だなとちょっと思ったわけですね。そうすると、これは遠巻きに安倍晋三さんの内閣に対する批判も入っているのかなと思ったので、その３つをぜひ直接お聞きしたいと思いました。よろしくお願いします。

【原田】 最初のご質問、なぜ今までこれをお書きになる、あるいは発表される方がいらっしゃらなかったのか。これは、まったくいらっしゃらなかったわけではないです。内容的に、この部分は誰それさんもおっしゃっている、というのはあります。ただ、それをやると、私がそうですけれども、かなりバッシングを受けるんですよ。「ふざけるな」ということで、たとえば某自治体の首長の方が、「最近、原田というのがこうこうこういう本を書いているけれども、これは買ってはならぬ、読んではならぬ」という訓示をされました。これは厳密に言いますと――厳密に言わなくても地方公務員法にも違反しますし、言論統制の極みではないかということになります。

なぜそれが分かったかというと、それを聞いていた職員の方が、今ブログですとかいろいろありますからそこへ書いてしまった。それをある週刊誌の記者が見

た。それで長州へ取材に飛んだ。あっ、言ってしまいましたね（笑声）。長州のどこかの自治体です。それでコメントをとってきて、私のところへお越しになりまして、誰それがこうおっしゃっている、誰それがこうおっしゃっている、それに対する見解はと、そういうことが、暮れからことしの初めにかけてございました。つまり、それほどちょっと怖い話ではあるんですね。今でも、名前を書かずにファックスなり手紙というのがよく参りまして、まあひどいものですよ。ですから、それが大きな要因ではなかったかと思います。

それがすべてかどうかというと、ちょっと疑問ですけれども、ただ、タイトルを含めまして、ここまではっきりとしたものがあったかどうかというのは、ちょっと首をひねりますが、５年前に同じタイトルで同じ内容の本を出したら、まず売れていないと思います。つまり、先ほど申し上げた、今パラダイムが変わっているという、今の時代だから、皆さん、それを気づいてくださるといいますか、中には読んでくださる方が出てくる、そういうことだと思います。

それと２つ目は司馬さんの件でしたか。あの方の個人的な体験、陸軍戦車隊に対する司馬さんの嫌悪感、これは強烈なものがありますね。それを通じて、日本という国はなんてつまらない、くだらない戦争をしているんだということをあちこちで書いたり、おっしゃったり、これが強過ぎてということがひとつ大きな要因としてあると思います。それで、司馬さんのおっしゃることで確かにごもっともというのは、幕末動乱についてもたくさんあります。今、司馬史観の罪ということで浮き彫りにしましたけれども、これは、確かに司馬さんのおっしゃる通りということはたくさんあります。司馬さんには私も影響を受けています。ですから、個人の好みとか好き嫌いがあって、司馬さんは小説家ですから構わないと思うんです。問題は、その読み方だと思うのですね。

たとえば「坂の上の雲」にしましても、確かに、あの日露戦争というのは防衛戦争という側面が強いと私も

原田氏

思いますが、本当にあの通りだったらどうかというと、これはちょっと違いますね。あのときに国際的にも評価を受けた軍人たちというのはどこの誰だったか。元桑名藩がいたりということですね。愛媛、松山藩の秋山兄弟というのはそうですね。あれは賊軍にされた藩でして、土佐から500人ばかりわーっと来て松山藩はえらい目に遭っています。だから、秋山好古は、終生土佐を憎んでいますね。たとえば彦根藩にもそういうのがいまして、日露戦争の二百三高地で「白襷隊」という抜刀して切り込むという部隊がいましたが、これは全滅しました。それをやったのは、たしか中村という彦根藩の藩士です――私の田舎の彦根藩ですけれども。そして、彼らは一様に何を言ってやっているか。「賊軍の汚名を晴らす」、これを合言葉に全部やっている。そういうことがありますから、おそらく司馬さんはそういう現象に感銘も受けられたでしょうし、それを小説という形であらわされた。

司馬さんは確かに膨大な資料を集めておられた。ただ、典型的な事例で申し上げれば、司馬さんほどノモンハンの資料を持っていらっしゃる方はいらっしゃらない。しかし、「嫌だ、書かない」と。なぜか。ノモンハンについては書く気が起きない、汚い。幕末は書いても、戦後はあの人は書きません、ほんの一部しか。なぜか、汚いということです。ひとつはそういう司馬さんの、好みというとふさわしくないかもしれませんけれども、そういうキャラクターの問題と、戦車隊にいた

ときの理不尽なされ方といいますか、それが司馬さんの神経には耐えられなかった。その昭和陸軍に対する恨みみたいなものが明治の美化へつながっている部分はあると思います。

それと３つ目が、「アベ」といいますと、私は阿部正弘のことしか思い浮かばないぐらいでして、そういえば、あの方はそうだよねという程度なんですね。たしか、吉田松陰を尊敬する人にあげていたかなと。同じように、日本共産党の宮本顕治さんですとか野坂参三さん、みんな長州の方ですが、あの方々も含めて日本は右も左も尊敬する人の第一に吉田松陰ということです。あまり私は、安倍さん個人にどうこうというのは、まったくないですね。個々の政策論になって、これはこれで、むしろ野党の言っていることより安倍さんの言っていることの方がまだましという政策もあると思いますし、逆もあります。ですから、これに関しては安倍さんということは意識していなかったです、正直。

よろしいですか。お答えになったでしょうか。

【司会】 ありがとうございました。

もうお一方ぐらいいかがですか。いらっしゃいますでしょうか。

【質問】 本当に大変すばらしいお話をありがとうございました。ご著書の方も事前に読ませていただいて、大変感銘を受けました。

きょうは、ちょっと時間がなかったので、たぶんこのご著書で書かれていることの一部しかお話ししていただけなかったと思いますけれども、特にご著書の第５章の「二本松会津の慟哭」は、やはり白眉かなと思います。

それで質問は、この本から少し離れてしまうことになるかもしれないのですけれども、先生のご意見をお伺いしたいと思います。

この本の中では、主に国内の動乱のお話を書かれていますが、そのときの国際的な動向といいますか、特にイギリスという国の思惑をどうお考えなのかというところをお聞きしたいんですね。この第５章の中で、

薩長の軍備と、それから賊軍にされた奥羽列藩同盟の軍備も比較されていますけれども、結局これは、主にイギリス製の最新兵器で勝ったという分析ではないかと思うのです。それで、薩長というのはご案内の通り、この直前にそれぞれイギリスと戦争していますね。先ほども事実として出ましたけれども、長州の場合は下関戦争、馬関戦争を1863年から1864年に。それで、薩摩は薩英戦争を1864年にやっていますと。普通に考えると、戦争をした国とその後急速に仲良くなるという事態はあまり考えづらいと思うのですね。

もちろん、かつての歴史等で習った説明によると、この両藩は、イギリスと戦争したことによって攘夷というのは不可能だと直ちに悟り、急速にイギリスに接近して、その軍備を取り入れた、こういう説明になっていると思うんですけれども、このときイギリスは何を考えていたのだろうか。ひとつの仮説として、一方でイギリスがその後どういうことを世界にしていったか。たとえばサイクス・ピコ協定の話とかを考えると、これは国内で内戦を起こさせておいて、その後、列強と日本を分割しようと考えていたのではないかなというふうに思うんですけれども、その辺のお考えはいかがでしょうか。

【原田】 たいがい、今お話の通り、私たちも同じような教育を受けて育っておりまして、あの戦争を通じて攘夷の不可なことを悟ってというような教えられ方をされました。ただ、これは違いますね。特に薩摩の場合は、それの２～３代前から蘭癖大名、つまり今で言います

と、蘭癖というのは西洋かぶれという意味ですけれども、強烈な西洋かぶれの大名が藩主になっていた藩でして、そのころからイギリスとは深い縁でつながっております。それで、今名前が変わりまして「鹿児島中央駅」というふうになっていますけれども、あの前に12人の「若き薩摩の群像」というような青春の群像が、五大友厚、森有礼等がありますけれども、あれは、長州五傑と同じように密出国で秘密留学した侍たちです。それぐらいイギリスとは両藩とも縁が深かった。縁が深く、支援も受けていた。

問題はイギリスサイドですけれども、ジャーディン・マセソンという会社、今も存在しますが、それがあの時点で清国――中国の侵略、アヘン戦争等の手先、お先棒を担いだといいますか、ジャーディン・マセソンの存在なくしてアヘン戦争というのはない。ご存じかと思いますけれども、ジャーディン・マセソンはイギリスの東インド会社の分身みたいなものです。後の時代の名称ですから、もとは東インド会社です。イギリス本国の政治と極東の出先でやっていることは違うんですよ。極東の出先がしょっちゅう暴走しているんですね。それで、イギリスのパーマストン内閣のときはそれでよかったわけです。強烈な砲艦外交を展開した内閣ですから、これはヨーロッパ各国からも恐れられていた。パーマストン内閣だから東インド会社の血を引くといったようなものであるジャーディン・マセソンはあれほどのことができた。

ところが、日本にとっては神風が吹いたといいますか、パーマストン内閣が、何とつぶれるんですね。パーマストン自体が急死といいますか、病死といいますか、これは、まさに神風でして、そうなると、東洋の出先は勝手な動きができなくなってしまった。したがいまして、日本国内が倒幕という具体的な動きに入ったときには、イギリスの方には日本侵略という目論見は消えています。ですから、そこも官軍史観、ちょっと公教育のあれと違ってくるのですが、これはイギリス本国の基本的な方針としてできない、だめとストップをかけていますから。初代公使のオールコックのときはパーマストン内閣でいけた。パークスのときになると、できなくなった。それがひとつあります。

それとイギリス、これはアメリカも同様ですけれども、日本という国を見たとき大君政府、つまり幕藩体制といいますか、あれを見たときに、下関戦争の例を見ればよく分かるんですけれども、確かに、あれでもって簡単にひとつの藩は制圧できるんです。ところが、60余州300諸侯とまで言われて、60いくつの国に分かれて約300名、正確には270名前後の大名がいて、それが不完全とはいえ、それぞれ軍備をしている。言ってみれば、究極の地方分権かもしれません。

徳川幕府というのは、実に小さな政府でした。ここがポイントで、私たちはついつい徳川という強力な政府が軍事力、武力でもって各藩を抑えていたような錯覚をしますけれども、それはまったくないですね。幕府直轄はたかだか400万石です。日本全国はだいたい3,000万石です。徳川直参旗本、御家人たちは400万石、そして徳川本家だけとればたかだか400万石です。一方で、外様ですけど加賀前田藩は102万石、やはり外様ですけど島津は約78万石ですので、そうしますと、ほとんどイーブンで戦争できそうな感じでもあるんですね。そこが問題でして、そうしますと、徳川体制というのは思い切り小さな政府にならざるを得ないんです。その分各藩が、ある意味独自に貨幣を発行し――藩札ですね、独自の統治システムを実施していました。直轄領には代官を置いています。この代官というのは非常に優秀です、勘定所から派遣されていますから。水戸黄門の世界で悪代官というのがいますが、あれは真っ赤なうそです。逆です。手付・手代という10人弱の人間で10万石ぐらいを全部、行政も司法も見るわけですから、代官というのは優秀です。そういう体制において、下関をひとつ落としたら、さあ、次はどこを落とす、これを全国やるのか。いくらイギリスが世界の7つの海を支配したからといって、この島国で一気にそれができるかというと、できないですよ、

あの体制は。つまり、中央集権体制ではなかったということで、これが幸いしていますね。ですから、そういう徳川の統治体制の問題と、ポイントはパーマストン内閣が倒れたこと、これが大きいと思います。

ちなみに武器は、アメリカで南北戦争が終わりまして、それがどっと流れてきたということが大きいですね。お答えになりましたでしょうか。

【司会】 どうもありがとうございました。

では、時間がかなり押しておりますので、最後に理事長、一言だけよろしゅうございますか。

【中谷理事長】 どうもありがとうございました。大変おもしろい話でした。確かに、明治維新については「薩長史観」で、そして、戦後は「マッカーサー史観」のもとに教育を受けてきましたから、われわれの考えの中には、勝者の論理による歪みが色濃く受け継いでいるのだと思います。

それに対して、先生からは、そういう見方は一方的過ぎる、裏側にあるものをちゃんと見る必要があるというお話を伺いました。これはバランス上非常に良かったと思います。ひとつだけ気になるのはテロリズムを司馬さんが肯定したという点です。幕末に頻発したテロリズムがちゃんと総括されないまま昭和に入ってしまった。日米開戦がなぜ起こったかということを考えたときに、ひとつの要因としては、戦争反対を声高に言い募ることに対して、陸軍の若手将校のテロに対する恐怖感というのが、大戦前の日本社会では非常に強かったことが挙げられると思います。5.15、2.26事件が起こり、それに対しても明確な粛清は行われなかった。正義のためなら何をやってもいいんだというテロ容認の傾向に大きな問題があったと考えます。

問題は、明治維新にはどういう大義があったのかという点です。その点をさておくとして、政変には、テロや大量の殺戮がつきものですね。フランス革命のときは、少なく見積もって60万人、そして多く見積もると200万人の犠牲者が出た。日本の明治維新が世界的にすごいねと言われている理由のひとつは、犠牲者がたかだか3万人だったということなんですね。確かに会津討伐とか、理不尽なことが行われたのは確かであり、これが非難されるべき事件であったことは間違いありません。実は私の女房の先祖が会津でして、北海道に開拓使として追われたという歴史があるのでいつでも聞かされているんですね。「薩長、けしからん、けしからん」と。きょう、本当は呼んできて聞かせたかったぐらいなんですけど。（笑）

中谷理事長

フランス革命においては、「近代というものをつくり出すため」という大義のために200万人の人間を殺した。ただ、その後、フランスを初め西欧諸国はそれをどういうふうに総括したかということが問題です。

日本の問題は、確かに維新の犠牲者がたった3万人と少なかったとは言え、テロリズムの是非に関する総括が終わっていないという問題があって、今、日本の戦前の総括ができない理由も、さかのぼると明治維新のテロリズムの総括が終わっていないというところにあるかなという問題提起はすごく重要だと思います。

つたない感想ですけれども、本当にありがとうございました。

【司会】 ありがとうございました。本日は終了でございます。

開催日：2016年5月20日

「歌舞伎400年」その核心と革新

歌舞伎大向弥生会　幹事　**堀越 一寿 氏**

【司会】 定時になりましたので、始めさせていただきたいと思います。MURCオープンカレッジ2016の第3回ということで、きょうは、いい意味で異色のスピーカーをお呼びいたしました。歌舞伎といえば松竹ですけれども、弥生会という大向うの会がありまして、若手ですけれども、そこで幹事をやっておられる堀越一寿さんをお呼びいたしました。大向うって見たことないよというか、声は聞いているけど、見たことない方ばかりだと思うので、ふだんどんな方が声をかけていらっしゃるのかというのに注目して話を聞いていただければと思います。では堀越さん、よろしくお願いします。（拍手）

講　演

ふだんの言葉にも残る歌舞伎の影響

初めまして、よろしくお願いします。堀越と申します。

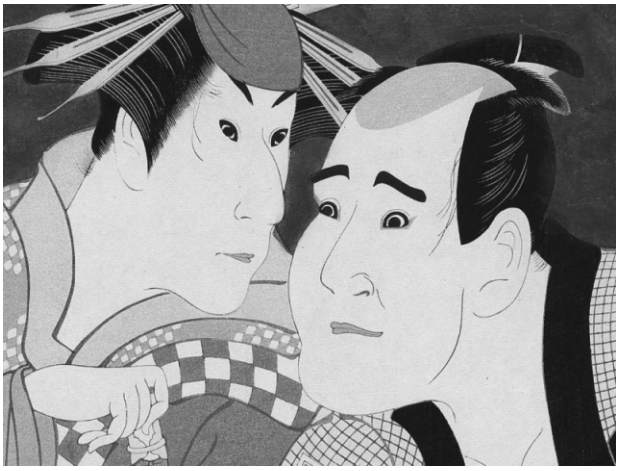
大向うというふうにご紹介いただいたので、大向うという言葉を聞いて何を言っているんだと、何のことだろうと思う方もいらっしゃると思うんですが、ご存じの方はどのぐらいいらっしゃいますでしょうか。――かなりの方がご存じですね。ありがとうございます。

歌舞伎の舞台では、役者が見得をしたり、花道を登場するときに、その役者の屋号の声をかけて役者にエールを送るという慣習があるわけですね。私は、その大向うを20年くらいやっております。そんな形で歌舞伎とずうっと長くかかわってきております。

大向うの声はどんな声かというと、さきにデモンストレーションしておきますと――マイクが入っていると危ない――、「中村屋（なかむらやーっ）」と、こんな感じで声をかけるわけですね（拍手）。きょうは、のどが荒れてしまっているんですけれども、こんな感じで声をかけてやっております。

歌舞伎のお話ということで、歌舞伎入門編という形にしてしまうと、おもしろがっていただけないのではないかと思いまして、きょうは、より興味を持っていただけるような話をできたらいいなと思って持ってまいりました。

初めに、ふだん歌舞伎とご縁があまりない方も、最近決まったオリンピックの柄ですね、これはご存じだと思います。これは市松模様と申します。なぜ市松模様というか、その昔は石畳と呼ばれていた模様なんですね。すごい古くからあった紋様だと言われています。これがあるとき市松模様と名前を変えたわけですね。なぜかというと、佐野川市松という歌舞伎役者が江戸時代に登場い



出所：東京国立博物館　研究情報アーカイブズ

たしまして、彼が市松模様と今呼んでいる模様を非常に好んで衣装に用いたんですね。

そのことから庶民の間にこの柄が非常にはやりまして、市松模様、市松模様と名前を変えたということです。歌舞伎のことを知らなくても、歌舞伎役者の名前は使っていたりするということです。

まずはふだんにも歌舞伎の言葉ってあるということを知っていただくと、「おっ、歌舞伎、意外と自分たちの生活の中にあるかもしれないな」と思われるのではないでしょうか。たとえば「幕を切って落とす」とよく言いますね。「幕を切って落とす」のも歌舞伎の発明ですね。舞台につり幕がしてあって、それを柝（き）の音と同時に振り落とすと言いますけれども、振り落とすと、後ろに大道具がバッといきなり見えるという視覚効果を強調するような仕組みがあったりします。誰かの「さしがね」でこうなったという言い方もありますが、この「差し金」というのも歌舞伎に出てくる道具です。長い鯨のひげの先にチョウチョなんかがついていて、パタパタ動かすという。これを「差し金」と呼びまして、誰が操っているのかといったら、「差し金」の先には黒子がいる。そういう形で、ふだん使っている言葉の中にも歌舞伎の言葉がある。

ところが、こういった数字がございます。歌舞伎の知名度はおそらく100%だと思います。ここで歌舞伎を知らない方といって手を挙げる方はおそらくいらっしゃらない。しかし、歌舞伎の生の舞台をごらんになったことがある方はどのくらいいらっしゃいますかということになりますと、どうでしょうか。きょうは比較的多いのかなと思いますけれども、生の歌舞伎の舞台を見たことがあるよという方は手を挙げていただけますか。（半数近くの参加者が挙手）――すごい確率ですね。すごいです。

一般の方にこれで手を挙げていただくと、100人中5人ぐらいしか手が挙がらないと言われております。5%ぐらいしか歌舞伎を見たことがないと、非常に残念だなと思いますが、これが実態ですね。なので、きょうはその辺をお話ししていきたいなと思います。

大島氏

歌舞伎はロック

今の私たちは、歌舞伎というと、古典と思いますね。クラシックだと思うわけですけれども、歌舞伎が誕生したときからクラシックだったかというと、そんなことはないですね。歌舞伎が誕生したころに日本でクラシックだったものは何かというと、能楽です。これは歌舞伎よりもさらに200年以上歴史が古くて、観阿弥という人が将軍義満に気に入られたのが1370年前後と言われておりますから、歌舞伎誕生の200年以上前ですね。それから武家の教養として保護されるようになって、能というのは、その当時、クラシックだったわけですね、歌舞伎が誕生したころには。

能もそうなんですけれども、クラシック音楽もそうですね、宮廷音楽だったりしますね。モーツアルトは宮廷音楽家です。能も、武家式楽と言いまして、庶民には公開されていないものでした。世阿弥の「風姿花伝」はすごく有名ですけれども、あれが世間に公開されたのは明治時代以降だそうですね。それまでは能に携わる人たちの間でだけ秘書として伝わってきたということで、庶民の目に触れるものではなかった。

もうひとつ、能というのは、そうやって武家が保護したのもありますけれども、変化しないことに価値が置かれていまして、ほぼ600年前と今と同じように上演されていると言われています。極端に無駄な表現を省いたものですね、能というのは。足が一歩歩むと1年、時が過ぎ

たりするという、すごく省略され過ぎていて、私は、能は寝ちゃうことが多いんです。どっちかというと、止揚するというか、グッと時をとめるような部分がある。能では舞といいますけれども、舞踊といったときの舞は回転運動だと言われ、踊るという字は跳躍運動だというんですね。能には、道成寺の鐘入りとかは別として、跳躍運動はなく回転運動のみ。歌舞伎には踊りというのがあって上下運動がある。そんなところから言っても、能というのは当時クラシックで庶民にはあまり縁がないものだったと考えられます。

さて、歌舞伎が生まれた当時に「傾奇者（かぶきもの）」と呼ばれる人たちがいたと言われています。傾奇者って、どう定義するかというと、私の考えでは「時代にちょっと生まれが遅すぎた人たち」と言えると思います。戦国時代であれば、どんな人たちでもチャンスがあったわけですけれども、身分制度が固定していく中で、「俺はもう少し早く生まれていればな」という人たちが奇抜な格好をして時代に対してちょっと反旗を翻すというか、反抗的な態度を取るというものが傾奇者だったと思われます。

奇抜な風俗をして、エネルギーをあり余らせた人たちがいた。そういう中から、出雲阿国という人が歌舞伎踊りを始めるというわけです。これは何かというと、おそらく存在としては、ロックに近いわけです。

「河原者」という言葉がありますけれども、こういった芸能に携わるものたちは、身分としてはすごく低いですね。歌舞伎役者って、人別帳でひとり、２人と数えられてなかったんですね。１匹、２匹と数えていたんですね、江戸時代は。そのぐらい虐げられし民でもあった。

そういった庶民の中から生まれてくるものとして歌舞伎があったわけです。ロックンロールもそうですね。黒人音楽からスタートして、黒人音楽、ブルースとかそういうものがあって、その上にロックが始まった。そこには庶民としてのエネルギーというんですかね、庶民を熱狂に巻き込んでいくエネルギーがあったと考えられる。歌舞伎も同じです。

もうひとつは、歌舞伎がロックだと定義すると、ロックというのは時代と切り結んでいくものですね。歌舞伎もそうだと私は思います。歌舞伎やロックなんて時代と切り結ばなければいけないわけです。つまり、当時の武家式楽に対して歌舞伎というのは「僕らの演劇運動」なんですね。われわれにとってリアリティのある、われわれにとって楽しめるものを生み出していこうというエネルギーが原初の歌舞伎にはあると考えられるわけです。

ところが、そういうムーブメントは時の幕府にとって

出所：pixabay　クリエイティブコモンズCC0

はあまりおもしろいことじゃなかったわけですね。時代が安定して身分制度が固定していってという中で、庶民が元気になり過ぎるというか、一方向に向きやすいんです。エンターテイメントって、意外と人を先導する力があったりしますよね。

かつてウッドストックというロックのムーブメントみたいなものがありました。芸術というのは、ある意味、こうやって人を動かす力がある、ムーブメントが起きる可能性があるわけですね。

歌舞伎の歴史＝弾圧の歴史

当時、幕府は何が嫌だったかというと、一揆をものすごく嫌っていましたね。だから、自分の直轄の領地の中で一揆が起きた大名は、身分としては危なくなったりとか、家が取りつぶされたりとか、いろいろ危なかったわけですね、そういった意味では。こういった庶民運動はあまり盛り上がり過ぎちゃ嫌なわけですよ、幕府としては。

歌舞伎というのは、そうなったことから、いろいろと幕府から弾圧を受けていくわけですね。だから、歌舞伎の歴史って、実は弾圧との闘いでもあると考えることもできます。

たとえば当時、現政権にかかわる演目を上演しちゃならんというルールがありました。だから、徳川某とかが舞台に出てきちゃいけないわけです。そのちょっと前の人たちも出てきちゃだめです。徳川政権が樹立した直後、豊臣にシンパシーを寄せるような物語とかは上演してほしくないわけです。関白殿下がよかったなと言われちゃ困るわけですね、庶民の人たちに。なので、幕府は現代のわれわれの政権にかかわるものをやっちゃだめよと規制しました。

歌舞伎に「仮名手本忠臣蔵」という演目がありますね。忠臣蔵は徳川綱吉の時代の実際の事件を題材としてつくられたお芝居ですね。忠臣蔵の事件って綱吉のときに起きたんですね。生類憐れみの令とか、あれをやっているころに浅野内匠頭が吉良上野介に切りつけて、四十七士の討ち入りがあり、それを題材に数十年後にお芝居がつくられたということです。数十年後につくったとはいっても、徳川政権にかかわる話なので、そのまま上演したらアウトなわけです。

庶民は何をやったかというと、時代設定を変えて上演するわけです。これは1300年ころの太平記の時代のお話ですと。仮名手本忠臣蔵に出てくる登場人物って、全部名前が史実とはまったく違います。浅野内匠頭は塩冶判官高定という名前になりまして、吉良上野介は高師直という名前になりました。大石内蔵助はどうするんだというと、大星由良助という名前になって出てくるという。そういった形で、いろいろルールをすり抜けながら、歌舞伎というのは庶民の中に浸透していくわけですね。

禁令が生んだ女形の文化

ただ、歌舞伎にとって一番大きな変化があったのは、間違いなく女優を禁止されたことです。初めから女形とかあったと思ったら、そうじゃないわけです。さきほど、出雲阿国が始めましたとお話ししましたけれども、出雲阿国は女の人ですね。女の人が始めたもので、今残っているのは宝塚ですかといったら、そうじゃないわけですね。宝塚はまだ100年ぐらいです。幕府が女性は舞台に上がっちゃだめよという禁令を出したことで、現在に継承される歌舞伎の姿が決まってきたわけです。

女優を舞台に上げちゃだめだというという禁令には、風紀が乱れるからという建前がありました。阿国のパフォーマンスがはやって、同じようなことをやる人たちがどんどん出てきて、そうすると、手っ取り早く稼ぐために、舞台に上がっている女の人を男に見定めさせて、「今夜、あの娘とどうですか」という商売をする連中がたくさん出てきたので、これじゃ風紀が乱れるからだめよということで禁止しますということになったわけです。その一面ももちろんあったわけですね、初めのころは。

その後、歌舞伎の人たちが何をやったかというと、美少年を売ることを考えて若衆歌舞伎をつくったわけです。前髪のきれいな男の子たち、今でいうとジャニーズ

堀越氏

商売的な形かもしれないですけれども。当時、江戸の人たちって、性に対してはすごく奔放な考えを持っていることが多くて、美少年を普通に商家の旦那が買ったりするということがあったわけですね。それがあったので成り立っちゃっていた。でも、若衆歌舞伎もだめよということになって、月代を剃ったちょんまげの人しか舞台に乗っちゃだめというところまでいって、今の歌舞伎の源流ができ上がってくるわけです。なので、女優が禁止されたことは、歌舞伎にとって結果としては幸福ですけれども、当時、本当はリアルな芝居をしたかったわけです。ところが、女形にいくしかなかったわけです。

女形が初めから今みたいな女形だったかというと、実は違うんですね。女形が初登場したころは、いかに女優のかわりに男を使うかということに必死だったわけです。初めから男ならではの美しさを出そうと思わないです。女優が禁止されちゃったけど、おれたちの芝居は男と女がいる舞台じゃなければだめなんだという中で、女らしさを出そうとしたら、どうしたかというと、女になろうとしたんですね、初めのころの女形というのは。

初代芳沢あやめという1673年生まれの女形がいるんですけども、彼は何と言っているかというと、「日ごろから女性らしい暮らしをすることが大切だ」という芸談を残しているんですね。そうしておかないと、舞台に立って、ここが見所だ、女としての見せ所だと思うほど、男が出てきてしまうからと言っています。彼はこういう芸談が非常に多くて、一緒に共演する男役をする人の前でご飯を食べちゃだめだとか言っているわけです。むしゃむしゃ食べるところを見られちゃうと、色気が感じられなくて、共演相手が冷めてしまうからとか、いかに女になろうとしたかということをものすごく追求したわけですね。

今回、課題図書として挙げていただきました私の書籍「歌舞伎四〇〇年の言葉」ですけれども、この本には書けなかったエピソードもありますね。ほかの女形で駕籠に揺られ過ぎて生理になっちゃったという芸談が残っているんです。なるわけないんですけれども。そのぐらい女性になり切ろうとしていたということが美談として残っているわけですね、初めのころ。だから、今の女形とは発想が初めのころは違ったわけです。

その結果、歌舞伎で何が起きていくかというと、写実の芝居をつくりたいと思いながらも、様式性がすごく要求されていくわけです。それはしょうがないです。女形の女をより女らしく見せるために、男役の方もより男らしく見せるという方向に移っていくわけです、演技様式が。だから、歌舞伎の発達というのは女形をいかに不自然に見せないかという背景が相当にあるわけです。そのためにものすごくいろいろなことがやられているわけですね。様式と写実ということになっています。

皆さん、ご存じじゃないと思いますけれども、たとえば女性の内股歩きってありますね。着物を着たら内股で歩かれますよね。その方が女性らしく見えると言われるから。最近、浴衣とか着てタッタッタッタとジーパンのときみたいな歩き方をしている女の子を見ると、眉をひそめるじゃないですか。でも、内股歩きって初めから女性がやっていた歩き方じゃないんですよ。特に初期の江戸のころの着物って、今みたいに身幅が狭くなくてギュッと着ていないんですね。もうちょっとゆったり着ています。古い浮世絵とか見ると分かります。ぞろっとした着方しています。

女の人も実はスタスタ歩いていたんです、江戸時代は。ところが、初代中村富十郎という人が舞台でいかに女らしく見せるかというのを研究した結果、内股歩きを発明

したんですね。発明した内股歩きを見た女の人たちが「ああやって歩くと、もっとかわいく見えるわね」というので、女形から女の人が歩き方を輸入したんですよ。だって、内股歩きって歩きにくくないですか、実際としては。生理的には普通に歩いた方が歩きやすいと思います。

宝塚の男役をやる女の人は２本の直線の上を歩けというんですね。足が交差しないように歩きなさいと、最初のころ教えられるんです。それは男らしく見える歩き方だから。でも、私たち、ここにいる男性の方は、ふだん歩きながら、わざわざ２本の直線の上を歩こうと思っていないですね。そんなふうには意識していないです。だから、歌舞伎では形というものをすごく重視していくことになります。

歌舞伎の身体性

そこで歌舞伎の中でとても重要になってくるのが身体性になるわけです。自分の体の使い方をどれだけ意識的にするかということについて、歌舞伎はとことんやっています。さっきの女らしく、女になろうとした時代から、今はどうなったかというと、坂東玉三郎さんはこうふうに言っています。「女形は現実の女性ではないんです。女性の生理的な部分を抜いて魂の部分だけを自分の体に入れ込んで、お客さんが見て女だと思うものを表現しなければならない。生活感みたいな現実的なところよりも、どういう魂であるかを重要視する」。先ほどご紹介した歌舞伎役者・吉沢あやめとまったく違うことを言っていますね。吉沢あやめは「ふだん女として暮らせ」と言っているのに対して、そこじゃないとおっしゃっているわけです。一方で、「心を表現するためにそれ相応の技術を持っていなければいけないし、それを表現するのに不自然でない肉体をつくっておかないといけない。いろいろなスポーツをして上半身の筋肉をつけてしまったら、踊っていても形が悪くなる」ということを玉三郎さんは言っています。

玉三郎さんがどのぐらい肉体を鍛錬しているかというと、彼のホームドクターみたいな方が以前言っていましたけども、マーシャルアーツ、東洋武術の現役の選手と同じ筋肉のつき方だと言っていましたね。見せる筋肉ではなく実戦的に使う筋肉。玉三郎さんは普通に180度開脚とかできるんです。おなかがペタッとくっついちゃう。

女形って、どのくらい不自然に体を使っているかというと、私はできませんけれども、この肩甲骨を後ろで合わせるというんですね、ギュッと。それをやるとどうするかというと鳩胸的な感じで胸が出て、着物を着てこれをやっていると、女性らしく体型がコントロールされてくるわけです。その不自然な姿勢でお芝居をする。玉三郎さんの場合は背が高いので、相手役の方より小さく見せるために、ひざを折って演技をしなければならないので、グッとひざを折ってお芝居されますね。歌舞伎役者というのは、心だけではなくて体で表現していく部分を大変に重視します。そこが大きな歌舞伎のポイントになってきます。

なので、歌舞伎の身体性というのは、この文字にも出ていると思います。昔は「歌舞伎」の「伎」はにんべんじゃなくておんなへんだったそうです。

外国人によく言うんですね。英語で言うと、SING、DANCE、ACTだよと言います。声の要素と、体の動作の要素と、そしてアクト、わざおぎとしての要素ですね。かつて、八代目幸四郎という今の幸四郎さんのお父さんがこんなことを言っています。「おれたちがやれば歌舞伎な

出所：登壇者作成

んだ」と言っていました。身体性というものがやはり歌舞伎の中における核心のひとつなんですね、間違いなく。

これはおもしろいなと思ったんですけれども、以前、歌舞伎役者の中村吉右衛門さんが女優さんたちと共演したことがあります。歌舞伎の舞台ではないんですけれども、黒澤明の「蜘蛛の巣城」を舞台にかけたんですね。ふだん吉右衛門さんは女優さんとは演技しませんから、方法論的には吉右衛門さんは男だけど、男素のままというよりは、より強調された男性を表現するのにたけている。一方で女優さんたちは自分が女であるという前提に疑問はないので、そのまま素で演じている方がとても多かったんですよ。

その中で唯一、吉右衛門とバランスがよかった女優さんがいたんですね。それは誰かというと、麻美れいさんという元宝塚の男役トップスターの方ですね。彼女は自分の性別を突き放してみる訓練をしたことがある人です。だから、自分の女性という性をいきなり受け入れるのではなくて、いったん突き放して、女の人の体つきとかを改めて造型して演じていると見えました。そうすると、この人は女優だけど、女形みたいな演技をする人だなとすごく思ったんですね。

だから、必ずしも歌舞伎役者だけが身体性を獲得しているわけじゃないですけれども、自分の体の動きに対してものすごくセンシティブに感覚を持っているというのは歌舞伎役者の特徴になってくるんじゃないかなと思います。これを私たちは芸と呼んでいるんじゃないかなと思います。肉体を通して表現していく技術を芸と呼んでいるのではないか。これが分かってくると、とてもおもしろいわけですね、歌舞伎は。

革新する現代の歌舞伎

ちょうど半分の時間が過ぎたところで、きょうのもう一個のテーマの「革新」に来ました。先ほどチラッと話題に出した「仮名手本忠臣蔵」というお芝居があります。これはもともと文楽の演目です。歌舞伎というのは純粋に自分たちのものだけで発展してきたかというと、必ずしもそうではない。いろいろなものを貪欲に取り入れて自分たちの舞台を革新し続けてきているのですね。「忠臣蔵」「義経千本桜」「菅原伝授手習鑑」と呼ばれる人気作品が３つあるんですけれども、歌舞伎の世界でも堂々と三大名作とうたっておりますが、全部文楽からきている演目です。当時は著作権などない時代ですから、文楽で忠臣蔵が大ヒットした数ヵ月後には歌舞伎で上演しています。

一瞬「おいおい」と思わなくもないですが、今で言えば、大ヒット漫画の映画化だったり、ドラマ化だったり、違うメディアに転用していくというのはよくありますね。歌舞伎はそれをたくさんやったのです。常に自分たちをアップデートしていく。それは何かというと、大衆文化を背景にしているからですね。

たとえば、こんな芝居も大正時代にできています。「葉武列土倭錦絵（ハムレットやまとのにしきえ）」という外題のお芝居です。気持ち、なんとなく読めますね。これは大正時代にシェークスピアのハムレットを日本版に翻案して、ハムレットは「葉叢丸」という名前で出てきます。オフィーリアが「織姫」だったかな。染五郎さんが20年ほど前に復活上演しました。こんなものもつくってしまう歌舞伎、かなり貪欲です。

先ほど時代と切り結ぶという話をいたしましたけれども、時代と切り結んでいくということは、そのときどきの民衆の要請に応えていかなければいけないという宿命を歌舞伎は負っているのかなと私は思っているんですね。革新と核心と、どうかかわっていくかというのはこの後になります。

昨年、市川染五郎、中村勘九郎、中村七之助がやった「歌舞伎NEXT」と名づけて上演された「阿弖流為（アテルイ）」という芝居です。これはどんな舞台だったかというと、シネマ歌舞伎というのがありまして、間もなく上演されるので、その予告編を持ってきてみました。こんな内容ですね。

＜http://youtu.be/ZeyZEOPuurc＞

これは大ヒットいたしまして、東京と大阪でそれぞれ

上演されて、たくさん客さんが入ったんです。

歌舞伎って、こういうものをやってしまう部分があるわけですね。そして、スーパー歌舞伎Ⅱ「ワンピース」がありまして、こちらはもっとすごかったですね。東京で２ヵ月、その後、大阪、博多、連日満員で立ち見が出たという舞台で、しかも、今年のうちに映像化されてシネマ歌舞伎になり、さらに来年の10月には新橋演舞場でもう一度再演するという話を聞いております。こちらは四代目市川猿之助がやりました。その時代、その時代で、お客さんが求めているものにどんどん応えていこうとするという、これは歌舞伎の本能みたいなものですね。

６月は四谷怪談を渋谷のシアターコクーンで、非常に斬新な演出でやっております。そもそも歌舞伎のキービジュアルがこれでいいのかという「スーツか！」みたいな、びっくりなんです。

四谷怪談は忠臣蔵の外伝なんですね。なので、ある意味、スーツは四十七士の象徴として使ったのかなというふうに見ることはできなくもないですが、それにしても、これかという驚きはあります。実際、ごらんになると、これが歌舞伎なのかなと思うぐらいに非常に斬新な演出です。和楽器をひとつも使っていないうえに、トランペット、エレキギターが鳴っています。相当不思議な舞台ですけれども、とてもおもしろいですね。

歌舞伎はいつから古典になったのか

こういう革新の対極にあるのが古典としての歌舞伎ですね。いつから歌舞伎って古典になったんだろうと思うわけです。誕生したときからずうっと時代と切り結びながらやっていきながらも、片側には古典作品というのがばっちりあるわけですね。今、われわれが見る「忠臣蔵」は1700年代に書かれたお芝居ですから、250年前ぐらいの作品を見て涙したり笑ったりするわけですね。ただ、江戸時代の間は、同じ人気演目を再演するにしても、上演のたびに役者がした工夫は違ったと言われています。

歌舞伎が古典化したのは、おそらくこの人が亡くなったときなんです。

この人は九代目市川団十郎といって、今の海老蔵さんがもし団十郎になれば十三代目ですから、少しさかのぼります。江戸時代に生まれて明治36年に亡くなった歌舞伎役者で、この人自身が「自分が江戸を知っている最後の歌舞伎役者です」と言っていました。実際、この人を最後に江戸時代を知っている歌舞伎役者はいなくなるわけですね。江戸時代を知っている役者がいなくなったということは、もうひとつ言うと、そろそろ江戸時代を知っている観客がいなくなったということですね。生活背景というのは当然あって、それを共有している間は歌舞伎は現代劇でいられたわけです。その生活背景が明治に入ってガラッと変わっていくわけです。日本って、変えるときはガラッと変えちゃうんですよね。

九代目団十郎たちが苦悩したことのひとつに、お客さんたちが歌舞伎をあっと言う間に古くさいものとして扱うようになったという時代の背景があります。それがさっきのハムレットだったり、もうひとつは明治政府の方針とうまくあわせていくために、散切りものといって、明治維新の後は、ちょんまげを結っていない人たちのお芝居がいっぱいつくられているんです。逆にわれわれとってはちょんまげを結っていない芝居なんか見たっておもしろくもないからほとんど上演されませんけれども、明治維新の後に武士が職業を失って生活苦に陥った芝居とか、そういうお芝居がいっぱいできたんですね。

まだ明治時代に慣れることができずに、ちょんまげを結ったままの人と、時代になじんで髪の毛を普通に切りそろえて出てくる男性が出てきたり、「何が御維新だい」というせりふがあったりするお芝居があったりわけです。江戸を懐かしむ心と、だんだん江戸から離れていくものがあって、この九代目の死を境に江戸との断絶が起きていく。

この辺から歌舞伎が古典化していくんです。というのは、残された役者たちが江戸時代に上演されていたものに対する生活感というのが自分たちも分からなくなっちゃうわけですね。昔は江戸の生活をしながら江戸の生活のお芝居をしていたんだから、当然、自分の感覚とし

出所：登壇者作成

て江戸時代が体の中にあるわけですね。当たり前です。ふだん暮らしている私たちの生活が自分の感覚にあるのと同じです。

でも、昔やっていた人気のお芝居を今やろうと思ったら、今の歌舞伎役者も同じだと思いますけれども、ふだんは車に乗ってスーツ着て生活している人が江戸時代のリアリティを出さなければいけないということになってくる。江戸を知っていた人たちのやっていた通りにやろうじゃないかというふうに自然となっていったのが歌舞伎の古典化ですね。

型の芸術

そこで型というものが生まれてくるわけです。歌舞伎って型物だとか、型の芸術だと言われますけれども、完全にそういうふうに言われるようになったのは最近なんですね、明治時代を最近と呼ぶかどうかというのは議論があるかと思いますけれども。

型について、九代目団十郎が亡くなった直後に、その下の世代の六代目尾上梅幸という人がこんなふうに言っていますね。「九代目団十郎、五代目菊五郎が死んだとき、後に残った弟子たちの舞台を見ると、団十郎の弟子はみんな前かがみになって出てきたのに反して、菊五郎の弟子はみんな反り身になって出てきた。これなどはおかしな例ですけれども、いずれも師匠の悪いくせをとって、よいところを少しも使っていない一例になります。よいところはまねしてもらいたいですが、悪いことは誰がしても悪いのですから気をつけなければいけませんが、とにかくまねというものは必ず悪いところをとるのがしきたりのようになっているのが嘆かわしいことだと思います」と言っています。

つまり、師匠がやっていたことを無批判に受け入れるということが起きてしまったんですね、このときに。なんでもかんでも師匠のやっていた通りにやっておけば間違いないだろうと。ところが、実際に先輩を見ていた人たちは、岡目八目で、妙に悪いくせばっかり映しちゃっているとみたわけです。

九代目団十郎が型に対して何と言っていたか。「昔の名人のことや故実を調べるのは当然のことですが、むやみに昔の人の型にこだわるのはよくありません。型とは、要はそれを演じた人の長所を言うのですから、これを参考とするだけならよいとして、まるっきりまねをするのはよくありません。つまり、まねというのは自分の芸を束縛して長所も失わせてしまうものだからです」と、九代目団十郎は言い残していますね。

ただ、いなくなっちゃった後だと形でしか残せなくなっちゃったという部分があるわけです。九代目団十郎は形骸化への危惧をすごく持っていたと思われます。たとえば、六代目尾上菊五郎という人は昭和初期の名優で、今でも六代目と言えば菊五郎のことと歌舞伎ファンにはそのぐらい通りのいい名前ですが、その人が子どものころに九代目団十郎に育ててもらったというか、芸を仕込んでもらっているんです。その六代目は。「おじさんは余り形を直さない人だった。その形はそれでいいといって、むやみに形ばかり直さなかったな。「おれにはできねぇ

な、おまえのその形は」とも言ってくれた。こっちはそんな深い気持ちはわからないから、おじさんのとおりの形をしようとすると、「いけねぇ、いけねぇ。おめぇはおめぇの形でやっていけ。その形を磨いていけばいいんだ」と言った」と。

「あるお芝居で、九代目市川団十郎の門弟が「そこはこうだ、ああだと直す」と稽古をつけてくれたときに、九代目が見ていて、「いけねぇ、いけねぇ。幸坊――菊五郎の子どものころの名前です――のとおりでいいんだ。おめぇのほうがまずい。幸坊は幸坊の天分でやっているんだ。おめぇのはつくり事だからいけねぇ」といったことを今でも覚えています」という言い方をしています。

これがおもしろいのは、九代目団十郎をよく見ていた人がこういうことも言っています。「本当の団十郎の性根をつかんでいるのは六代目だけですね、私の見た役者では」と言っています。「不幸にして、菊五郎が五代目菊五郎の子であって、魚屋宗五郎や何かが柄にはまって熊谷なんかできないで、これは不幸なんだが、もし菊五郎が熊谷や何かのできる人だったら団十郎になりますね」と言っているんですね。「本当の団十郎の系統を継げたのは菊五郎しかいない」と言っています。「あとは、みんな団十郎の魂がちっとも入っておりません」という言い方をしています。つまり、形だけを受け継いだ人たちに対してはまったく団十郎らしさを認めてないんですね、この人は。形だけ受け継いだ人はいっぱいいるんです。今の幸四郎さんのおじいちゃんに当たる方ですけれども、七代目幸四郎は九代目団十郎にずっとついていて、その後、九代目団十郎の通りにやっています。やっていますというのがいっぱいあったんだけども、まったく認められていないわけです。一方で、九代目団十郎のやった演目はやっていないけど、九代目団十郎の芸風を残しているというふうに六代目を評している。同じことをやっているんじゃなくて、どう役に取り組んでいるかというところをとっているわけですね。

今言ったように型物というのは静止してしまっているので、それではだめなんですね。四代目中村雀右衛門と

いう人はこう言っています。「古典といっても、今生きていなければ古典ではありません」と。

そうやって考えていったときに、彼らが本当に伝えたいものは何かというふうに考えたりすると、これはビジネスでも同じだと思うんですけれども、形と心って両方あると思うんですね。若い新人が入ってきたときに、こういう考え方でやってほしいとか、こういうふうに物事に取り組んでほしいというふうに指導したいと思いながらも、短期に成果を出すためには、このやり方でやってねといって型を与えてしまう方が楽なことってありますね、仕事をしていて。マニュアルでやらせてしまった方が楽なことってあります。短期で成果を出すという意味では。

同じですね。歌舞伎も型でやれば、ある程度成果が出るんですよ。型どおりという成果。若い子たちは型どおりにやりなさいという言い方も逆にあるんですね。そうすると、舞台で一応、それらしく見える。でも、精神を学ばないと深みが出ていかない。ベテランの役者さんたちは、その役にどういう精神を入れていくかというのをすごく考えていらっしゃいますけれども、形だけになっていくと、そこはなかなかうまくいかない。

精神と形式のバランス

玉三郎さんとか勘三郎さんとか、こういう人たちは精神という言葉を言っていますね。たとえば十五代目片岡仁左衛門さんはこんなふうに言っています。今の仁左衛門さんです。「芝居を鋳型にはめ込んだり、お手本をな

ぞってばかりいては本当の歌舞伎の楽しさは消えてしまうと思います。型を受け継ぐと同時に、先人が心がけてきた精神をも受け継ぎ、次世代へ残していかなければなりません」と、明らかに形だけを継ぐということに対して否定していますね。

これは古い役者も言っていて、17世紀後半の役者ですけれども、「敵役をやっていて顔も手足も赤く塗って存分に立ちはだかるように演じたとしても、心の中まで真っ赤に染まり切るほどの強さを持てなければ、ゆでた伊勢エビの殻と変わらん。心と表現がばらばらになっていたんじゃ、凄まじさは出ません。幾ら目をひっくり返してにらもうが、心からにらまなければ恐ろしさは出てきやしません」ということを言っていて、形だけじゃだめだよというのは言っているわけですね、昔から。でも、つい型物になっちゃったりする。

そう考えると、歌舞伎の課題と私たちの持っている課題は意外と似ているんじゃないかと思いますね。マニュアルだけでは残せないものはどうしてもあるよねという話になっていくと思っています。マニュアルというのは言語化したものですけれども、とある言語学者で「言葉で伝わるものはコミュニケーションのうち7%ぐらいだ」と言う人がいます。私がしゃべっている言葉を字幕スーパーだけで音なし、映像なし、字幕だけで読んだら、言いたいことの7%ぐらいしか伝わらないということですね。つまらなそうにしゃべっているか、楽しそうにしゃべっているかとか。よく悪口は世界何語で言われても分かるという話がありますけれども、そういうことですね。話している人の見た目や口調があるからこそ意味が伝わる。

同じように歌舞伎の型もそうだと思うんですけれども、ビデオが発達してから、若い子たちが形をまねていくのはうまくなったけど、本当に何をやらなければいけないかが分からなくなってきているといって、ビデオでお稽古することをベテランの人たちは批判しますけれども、それでもビデオでおけいこしちゃうという子たちが今はいる。

そこから何が伝わってくるのという話ですね。テレビで歌舞伎を見て楽しいと思う人はいますか。生の舞台を一回見たことがある人たちからすると、相当つまらないですよ。一回テレビで見てから行ってみようと思って、テレビで見ちゃって歌舞伎から完全に離れた人なんていくらでもいますね。テレビで最初に見る歌舞伎は本当につまらないですね。それでは伝わってこないからですね、特に身体性みたいなものはそうだと思います。テレビからはなかなか伝わってこない。

核心と革新は両方失っちゃいけないわけです。この2つをどうバランスさせていくかというのは歌舞伎にとって、これからすごく大事な部分ですね。これはわれわれもそうだと思いますけれども、自分たちのコアになるものが何かということと、一方でイノベーションは必要だ。ただ、どっちかだけだと滅びていく可能性がある。

先ほどお見せした今月の四谷怪談のコクーン歌舞伎も、なぜおもしろいかといえば、中村獅童や中村勘九郎、中村七之助、中村扇雀という人たちが、自分の中にある歌舞伎役者としてのコア、核心を見つけ出して演じようとしているからおもしろいんですね。ただ新しい演出に乗って、そのまま現代劇の役者のようにやってしまったら、最近の新劇と変わらなくなっちゃうんです。なんで歌舞伎でやっているのという話になっちゃうんですけど、きちんと核心をつかんでいれば、うまく歌舞伎になっていく。それは不思議なんですね。

逆に、歌舞伎をやっていても、ときどき歌舞伎に見えなくなるときってあるわけですよ、役者さんによっては。それは見失っているんですね、自分のコアになるものが何かというのを。先ほど言ったように、特に古典歌舞伎は型があるのでいいんですけど、そういう意味では新作歌舞伎は非常に難しいところがある。

一言で言えないことが歌舞伎の魅力

おもしろいことに、時代と切り結ぶという話の中で、中村勘三郎さんが野田秀樹さんを歌舞伎に招いたり、宮藤官九郎に脚本を書かせたりしました。実は宮藤官九郎

が初めて歌舞伎座で書いた脚本はたいへん評判悪かったんです。途中で帰るお客さんがたくさんいたということです。すごいタイトルでしたからね。「大江戸りびんぐでっど」というゾンビが出てくるお芝居だったんですね。無茶するなぁ、と思いました。ただ、勘三郎さんが新しい人たちを歌舞伎に呼んできたのは結局、今の時代を切り取る作家に書かせたかったからですね。それは時代と切り結んでいくという方。その中で自分たちがどう歌舞伎役者であり続けるかということだったのかなと思っています。串田和美さんが演出に入っているのも、そうですね。

これは核心と革新といいつつも、あと肉体と精神みたいなものが両方ないといけない。歌舞伎役者は特にそうだなと思うんです。私たちもそうですね。健全な体に健全な心はというわけではないですけれども、歌舞伎の場合は、どこに向かってお芝居するかという、その辺がすごい大事になってくるということだと思っております。

「歌舞伎のおもしろさみたいなものを一言で言ってください」とよく言われるんですけど、「何が歌舞伎の魅力なんですか」とも言われるんですけど、何が歌舞伎の魅力かといったら、一言で言えないことが歌舞伎の魅力ですね。ずるいんですけれども。

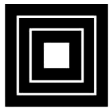
歌舞伎は流れていくというよりも、積み重なっているんですね。たとえば「仮名手本忠臣蔵」は1735年ごろにでき上がってから250年ぐらい過ぎて今でも上演されていて、その間に役者の工夫がそこにどんどん積み重なってきていて地層のようになっているわけです。

そうすると、今あるものを今の役者がどう解釈しようとするかというときに、さかのぼって演技を組み立てているわけですけれども、同じお芝居を違う役者で見るという楽しさがあるわけです。中村吉右衛門がやる大星由良助と片岡仁左衛門のやる大星由良助は感触が全然違ったりしますし、先ほど言ったように型にどう自分の魂を入れていくかなんですね。

「寺子屋」というお芝居があるんですけれども、それはわが子を犠牲にするお芝居なんですね、自分の主君のために。でも、亡くなった勘三郎さんや今の仁左衛門さん、吉右衛門さんが同じ型で同じ場面を演じても違う場面で感動したり泣いたりすることがある。どこに劇のピークを持ってくるかという、お芝居に対する向かい合い方と設計の仕方が違うんですね、役者によって。その辺が何度も歌舞伎を見るとおもしろいということになってくるわけです。その辺をつかんでいただけると、おもしろいなと思っております。

もうひとつ、歌舞伎の軽い話を一言入れさせていただきます。歌舞伎を見るときに、デザイン性とかそういうものも見てほしいなと思っています。こういう柄ですね、「かまわぬ」とか。これはご存じですかね。ここがかまで、輪っかで、ひながらのぬで、かまわぬなんですけども、市川団十郎家の模様ですね。これは、細かいことにはこだわらないというのをあらわすための模様なんです。ちなみに「かまいます」というのもあるんですよ、別のおうちの模様で。こういうデザインが歌舞伎の世界にはすごく多くて、先ほど言ったような部分とは別にコマーシャリズムというか、こういうグッズを売ったりしていたわけですね、歌舞伎役者は自分で。そんなところも実はあったりする。

こんな柄の浴衣を着て出てきたりすることもあるんです。これも役者の名前がついていまして、これはカタカナのキ、５本線、４本線、足すと９、これは呂ですね。どうなるかというと、「キ九五呂（きくごろ）」となります。菊五郎格子というんですけれども、こんなデザインもあったりする。今度、中村芝翫を中村橋之助が襲名しますけれども、４本線が四で、和だんすの取っ手を鐶（かん）と呼ぶんですね。これで「芝翫縞」なんて名前がついていたりする。これは市川海老蔵の家の紋ですね。「壽の字海老」というんですけども、壽という字をようく見て、もう一回、海老を見てください。この部分、海老が壽という字になっているんですね。デザインの粋みたいなものも歌舞伎にはすごいたくさんありまして、きょうはかたい話をメーンにしてしまったんですけれども、こういった部分もおもしろいんですね。



三升（みます）
市川團十郎の家紋で、大中小の升を重ねて、上から見た姿を図版化したもの。由来は定まりませんが、米を測る升が三つというのを縁起が良い、としたためという説が濃厚です。

重ね扇に抱き柏（かさねおうぎにだきがしわ）
尾上菊五郎の家紋。三代目菊五郎が細川侯の邸に参上した時、ちょうど端午の節句で殿様から扇に柏餅を載せて出されたのを自分の扇に受けて頂戴したのに因んで尾上家の紋にしたそうです。

角切銀杏（すみきりいちょう）
中村勘三郎の家紋。元は鶴を家紋にしていたところ、徳川綱吉が娘の鶴姫を溺愛し、庶民に鶴の紋様や名前に鶴の字を使うことを禁止したために、末広がりを意識して銀杏の葉を図版化したと言われています。

三つ大（みつだい）
坂東三津五郎の家紋。三津五郎の屋号である「大和屋」の「大」が「三」という意図で図版化されたものです。「大」の字を太く書くことで、一見文字には見えませんが、江戸時代にはこうした文字をデザインしたものが多いようです。

鎌輪ぬ（かまわぬ）
荒事の始祖である、市川團十郎家のシンボルともいえるもので「細かいことにはカマワヌ」という洒落になっています。見た目にも大胆な意匠で、三升とともに力強いイメージが感じられます。

壽の字海老（じゅのじえび）
市川海老蔵のための紋様。その名の通り「壽（ことぶき）」という「寿」の旧字体を海老の姿としてイラスト化したものです。江戸のひとたちの文字を意匠として楽しむセンスというのは、とても洗練されていたんだと思わせてくれます。

六弥太格子（ろくやたごうし）
市川團十郎が六弥太という役を演じた時に作られた柄。
家紋の三升をアレンジしたものですが、とてもモダンなイメージもあり、こんな柄を300年も前に作っていたと思うと驚かされます。

菊五郎格子（きくごろうごうし）
尾上菊五郎のための格子模様。
縦に5本、横に4本の格子の間にカタカナの「キ」と、漢字の「呂（ろ）」があります。これで「キ」「９（5本と4本の交差部分）」「５（5本線）」「呂」＝菊五郎となります。

中村格子（なかむらごうし）
中村勘三郎家の格子模様。
5本の細い線と、1本の太い線の格子の間に「中」「ら」があります。
つまり「中」「6（5本と1本の交差）」「ら」＝中村となります。江戸の模様にはこうしたダジャレも多く見られます。

芝翫縞（しかんじま）
中村芝翫の縞模様。
縦に4本の縞と、箪笥の取っ手である鐶（かん）の意匠を互い違いに配列してあります。
つまり「4」「鐶」＝芝翫（しかん）と読ませるようになっています。

斧琴菊（よきことききく）
尾上菊五郎家のシンボルで、市川團十郎の「鎌輪ぬ」に対抗して作られたと言われています。「斧（よき、と読むのです。変換できますよ）」「琴（見えないですけど）」「菊」＝善きこと聞く、と縁起の良い紋様で、いまも人気があります。

播磨屋格子（はりまやごうし）
二代目中村吉右衛門の格子模様。
かなり強引ですが書かれている文字のような模様は本名の「波野」の「波」をひらがなの「は、り、ま」を重ねて書いてあります。これに8本の横縞をあわせて「播磨屋」、2本の縦縞で「二代目」となります。

出所：登壇者作成

身体性と物語性

歌舞伎の演目全部おもしろいかと言われると、歌舞伎って全部で3,000ぐらいお芝居があると言われています。3,000あるうちの上演されるのが700ぐらいと言われているんですね。頻繁に上演されるのが400ぐらいと言われていまして、中にはつまんないお芝居もありますね、残念ながら。そういうときはデザインを見るとか、そういう見方もある。

もうひとつ、歌舞伎の芸の話というか、歌舞伎の芸って肥大化し過ぎている部分がないとは言えなくて、まったく物語性のない演目というのがあるんです、恐ろしいことに。というのは、名場面だけを歌舞伎は上演するからですね。それも極端な切り取り方をするときがあります。全部で６時間ぐらいあるお芝居の15分だけというのがあるんですよ。石川五右衛門が「絶景かな、絶景かな」と言うお芝居があるんですけど、全然ストーリーはないですね。絶景かな、絶景かなと言った後に、それで幕が閉まるみたいな感じのものですね。そこまで切り取られちゃうと、それは役者を見るために見ているわけですね。だから、さっき言った身体性というのはそこになってくるんですけども、核心といった部分。芸だけを見ている。物語性はまったくなくなっちゃっているわけです、そこからは。そういうことを平気でやるわけですね。

それに対して玉三郎さんがちょっとだけこういうことを言っていますね。「伝統とは年を経ていく中で洗練され、昇華されていくことが多いものです。ところが、時として、それが過剰になったり、肥大化してしまったり、あるいは権威的になることで退廃することも起きてきます。退廃はやがて衰退へとつながっていきます。最近、そんな危機感を私は持っているのです」ということを言っていますね。「自戒の意味も込めて、伝統を守るために細部の意味を再度かみしめたいと思います」ということをおっしゃっています。

なので、芸そのものを楽しむのはすごくおもしろいんですけれども、それだけだと心配ということもおっ

しゃっています。特に最近のお客さんは物語性をすごく重視される方が多くなっているので、さっき私が言った身体性というところがだんだん置き去りにされてきている部分があります。若い役者さんもそういうところがあるかなと思いますね。

だんだん本当にきれいな人しか女形をやっちゃだめみたいになってきておりますから、若手の女形さんは皆さん、すごくきれいです。女優と出ていても違和感ないぐらいきれいなんですよ。歌舞伎があんな苦労して女形芸ってつくってきたのに、どうなっちゃったのかなというぐらい。今月のコクーン歌舞伎では真っ暗闇になる場面があるんですね。七之助さんが声だけで女を演じているんですが、これが違和感がない。そこまでいっちゃうと女形芸じゃなくて、また女優の時代に戻ってきているのかというぐらいですね。

なので、役者の身体性というのは、これから先、どうなっていくのかなというのはちょっとだけ心配しています。現代の若手でいうと、市川猿之助とか中村勘九郎とか彼らは身体性というのを重んじていると思いますけれども、お客さんの方がそうじゃなくなってきちゃうのはちょっと怖いですね。だんだん女形芸から、おかま芸を歓迎するようになっていくのかもしれない等と思ったりもしています。

そうすると、私が語ってきた核心と革新のうち、こっちの核心がだいぶ心配になってきますね。なので、これから歌舞伎をごらんになる場合は、ぜひ両方を見ていただきたいなと思います。それと、歌舞伎のことを聞いているけど、なんとなく歌舞伎を見ているんだけど、ふだんの自分とか仕事にもちょっと役立っちゃったりすることもあるのかなというふうに私なんかは思っていますね。

最後になりますけれども、私はどのぐらい歌舞伎を見ているかというと、サラリーマンをやっているんですけど、月に10回ぐらい見ていますね。そうすると、年に120日ぐらい見ていることになりますね。これまで20年、大向うをやっていますので、2,500回ぐらい歌舞伎を見ているのかなと思います。それだけ見ると、いろいろ見えてくるものがあったり、日常、役に立つこともあるなと思ったりもしております。

なので、歌舞伎に触れていただければいただくほどおもしろいですし、先ほどのいろいろな役者たちの残した言葉も深い言葉がいっぱいありますし、そういったものをぜひ味わっていっていただきたいなと思います。ごらんになるときは、こういう２つの視点でごらんいただくとおもしろいんじゃないかなと思っております。

やや話がとっちらかった形になってしまいましたが、１時間たちましたので、本日はここまでとさせていただきたいと思います。どうもありがとうございます。（拍手）

質疑応答

【司会】 堀越さん、どうもありがとうございました。

ということで、Q&Aタイムに入りたいと思います。どんな質問も、きょうは全部切り結んでいただけるそうなので。では理事長から。

【中谷理事長】 とってもおもしろい話、ありがとうございました。

私も2ヵ月に1回ぐらい歌舞伎を見ていまして、今のお話でおもしろいなと思うことがいくつかありました。バックコーラスですよね。浄瑠璃とか、義太夫とか、常磐津とかいろいろありますよね。浄瑠璃ぐらいは分かるんですけど、識別が分からないということがひとつ。あと、歌舞伎役者に比べてバックコーラスの方々はどのぐらい層が厚いんでしょうか。つまり、すごくうまい、下手があるように僕には思えるんですね。もうちょっとましな人がうたってくれないかなと思うことがよくあるんですけど、その層は薄いんですか。どんな感じなんですか。

【堀越】 残念ながら、薄いです。芸大でも邦楽をやる人が非常に少ないというのと、あの世界は残念ながら閉鎖的な部分もあるので、歌舞伎の舞台に立つ人と立たない人がはっきり分かれていたりします。なので、ものすごい実力のある清元だけど、歌舞伎の方には来ない人もいたりするんですね。

昭和初期ぐらいまでは街中に邦楽のお師匠さんがいて、子どもたちで習っている人もいっぱいいた。そういう中からプロを目指す子たちが出てきていました。要は、庶民の間にちゃんと層があったのが、今はそれが失われてしまいました。小学校でもドレミは教えるけど、和の音階はほとんど教えませんし、和楽器なんて触りませんね。私も教育受けた中で和楽器触ったことは一度もなかったです。せいぜいお琴に触らせてもらう子がいるぐらいですかね、今だと。大正琴ぐらいはあるかもしれないですけど。なので、下地がないのかな。

【中谷理事長】 ありがとうございます。

【司会】 次の質問の方、いかがでしょうか。

【質問】 本日は、おもしろいお話、ありがとうございました。

先ほど歌舞伎をテレビで見ておもしろくないとおっしゃっていましたけれども、私、宝塚は結構見ていまして、最初にテレビを見たときに、すごく不思議なものをやっているなと思っていたんですが、本物を見ると結構はまってしまったんです。

そもそもの話で大変恐縮なんですけれども、そもそも歌舞伎を見られようと思ったこと、また大向うをやられようと思ったきっかけを教えていただければと思います。

【堀越】 歌舞伎は子どものころに父が連れていってくれていたのもあって、あまり違和感なく見られる環境にいたのがひとつあります。最初に見に行ったのは4歳のころなので。

大向うについては、客席に座っていると、子どものころから聞きなじんでいますよね。あれは50歳ぐらいになったらやればいいのかなと思っていたんですね、初めのうちは。あまり若い子がやっていると怒られそうな気がしていたので。

ただ、好きな役者に声がかかるというのは見ていて気持ちいいものなんですね、それなりに。時を経て観客席から大向うが減っていったわけです、私の子どものころから。それは大向うの高齢化ですね。くしの歯を引くようにというやつですけども。そうすると、見に行った日に声がかからない日が出てくるわけです。その中で、大好きな役者がいい芝居をしていて、一声も声がかからないというのは悔しくて、悔しくて、ある日、やったというのが最初ですね。

だから、初めから大向うになりたいと思っていたわけじゃなくて、初めて声をかけたのは24か25ぐらいだったですかね。そんな形で初めて声をかけて、それでやっているうちに今ある大向う弥生会に入れていただいた。

堀越氏

ちなみに、大向うってスカウト制なんですね。私のように、ヤアヤア言っていると、ある日、なぞの人物が近寄ってきて、「君はなかなかいい声でかけているけど、大向うの会とか興味あるの」と言われてスカウトされるという。私もある日、やっていたら、すごいおじいちゃんが寄ってきて、何だこのおじいさんは思ったら、今みたいな形で声をかけられまして、「今度、会長に紹介してあげるから」とかいってスカウトされまして、27歳で会に入れていただきました。

【中谷理事長】 初めは勝手にやっていいんですか。

【堀越】 勝手にやるものですね、最初は。

【中谷理事長】 やってみようかな。

【堀越】 どうぞお願いします。スカウトしに行きます。

そうやって声をかけている人の中から見所がある人を見つけていくというシステムですね、大向うは。その中から、どう見分けるかというのは、役者を応援しようと思って声をかけているか、自分が目立とうと思ってやっているかという、その差ですね。そこは絶対に重視しますね。不思議なぐらい、声を聞いていれば分かります。

皆さんもお仕事をなさっていても分かるんじゃないですか、相手がどういう気持ちで自分とコミュニケーションしているかという。上っ面だけではない何かが自然と言葉のトーンから伝わってきてしまうことってあるじゃないですか。こいつはおれのことを見くびっているなというのは分かったりしますよね。取り引きの相手が若いのが出てきたな、ばかにされているなみたいなのがあったりしますね。それは分かりますね、かけ声していても。この役者のためにかけているのか、自分のためにかけているのか、分かります。自分のためにかけている方はずうっとスカウトしません、何十年たっても。なので、「俺はずうっと歌舞伎座で声かけているけど、声がかからないな」と思ったら、何かだめなんだなと思うしかないですね。そんな感じでございます。

【質問】 本日は、お話、ありがとうございました。

私は、歌舞伎は去年の1月の初春から見に行き始めたばかりで、すごくおもしろくて、今度の7月に歌舞伎座に行かせていただきます。本日も興味深くお話を伺いまして、ありがとうございました。

お話を伺いたいのは、少しまじめな質問になってしまうかもしれないんですけれども、たとえばこの前は寺子屋を見に行ったんですが、私たちと考え方が割と違いますよね、自分の子どもを差し出してだとか。

お話の中心にある価値観が私たちが持っているものとすごく違うときに、歌舞伎の役者さんたちがそれをどういうふうにとらえて芸をなっているのかというのがとても気になりました。生活の感じが分からないというだけじゃなくて、ストーリーの根幹にかかわる部分をどうされているのか。それを身体的な型でやってしまうのか、それともほかの工夫をされているのか。私自身は、全然違う考え方をしているはずなのですが、この前、寺子屋で泣いてしまいました。なので、きっと何かをされているのだろうなと思うんです。よろしくお願いします。

【堀越】 今おっしゃった寺子屋というお芝居は「菅原伝授手習鑑」というお芝居の一幕で、主人の子を助けるためにわが子を犠牲に差し出すというお芝居ですね。私も大好きなお芝居ですけれども、今おっしゃったように価値観が違うという部分が確かにあります。ただ、これを価値観が違うというふうにとらえるのか。もう少し掘り下げて考えていったときに、あれがお芝居とし

て成り立っているという中で、わが子を殺すことそのものに本当に共感して当時の人たちが見ていたかどうかというところまで考えてもいいのかなと思っているんですね。

私が思っているのは、忠臣蔵とかそういうお芝居はみんなそうなんですけれども、歌舞伎の作者たちが描きたかったのは人の生き方だったり、人はどう生きるべきかというものがそこには描かれていると思っています。

私は亡くなった勘三郎さんとは親しかったので、いろいろお話ししたことがあるんですけども、自分たちなりにどこに共感する場所を見つけていくかというのと、作者がどういう気持ちでこの作品を書いたのかというところを役者は向かい合っていますね。

たとえば寺子屋というお芝居は、主人公３人の兄弟がいるんですけれども、梅王丸、松王丸、桜丸、その中の松王丸がわが子を犠牲にしますけど、もともとこの３人の三つ子が生まれたときに、縁起がいいからということで、菅原道真がそのお父さんに土地を永代で与えたりしていたところにさかのぼります。三つ子が本当に縁起がいいかといったら、分からないんです。双子ってものすごい忌み嫌われたんですよ、江戸時代は。双子が生まれると片方を捨てたり、そういうことを普通にしていたんですよ。養子に出しちゃうとか捨て子にしちゃうとか。とにかく２人はだめ。

三つ子が本当に縁起がよかったかといったら、そうじゃなかった可能性もあるんですけれども、菅原道真がすごく縁起がいいと言って、３人の子どもたちの名づけ親にもなった。江戸時代は、名づけ親って産んでくれた親と同じぐらいに重視されたものなんです。名前をつけてくれた人、烏帽子親、成人式の面倒まで菅原道真が見ていて、就職の世話も菅原道真がしているわけですね。

そうやって家庭を営んできて自分たちが幸せになってきたところで、ご主人が失脚して、その子どもが命の危機になっているというときに、自分たちがどう振る舞うかという。そういう裏づけがあって、あそこに松王丸がわが子を犠牲にするという話が出てくるわけです。

ただ、封建主義というか、主君の子だから自分の子どもを殺すんだよという単純な構図ではないと思います。そのときに、役者がその思いをどう処理していくかというのがすごく大事で、亡くなった勘三郎さんの表現はすばらしかったですね。子どもの命ひとつを犠牲にしているというよりも、奥さんと自分とわが子との菅原道真がここまでつくってきてくれた恩に報いるために、われわれ家族みんなの魂がひとつになって恩に報いようとするような態度にも見えましたし、わが子の魂を抱いていくという感覚がすごくありましたね。だから、ただ子どもを殺しただけでなくて、その魂を自分は抱いて生きていく、もしくは最後は自分も死んじゃうという設定だと思います、寺子屋の松王丸夫婦は最後、白い装束で出てきますから。

そういった意味では、単純化しないで、なるべく掘り下げてみるのがいいと思いますね。何か理由があるはずだと思った方がいいです。価値観が違うんだというよりも、同じ価値を持っているはずだけど、なぜこう行動するんだろうというふうに見ていった方がおもしろいんじゃないかと思います。そういうお芝居はいっぱいあります。

吉右衛門はどういうふうに処理するかというと、松王丸の演じ方を見ていると、このままわが子を犠牲にせずに主君の子どもを犠牲にして、主君の子どもの首

を切って、それを自分の主人のところへ持って帰ったとしたら、その後、悪い因縁がずうっと続いていくわけですね。

お芝居のせりふを聞いていると、松王丸は世間の人から後ろ指を指されているわけです。道真を裏切って、あいつはひどいやつだと。わが子も絶対そういうふうに言われていくわけですね。そういう悪縁を引きずったまま生きていくか、よりレベルの高い犠牲を払って自分たちは来世でもっといいところに行こうというか。あの人たちは一世、二世、三世って自分たちの次の人生を信じている文化なので、この悪縁をとにかくここで断ち切るんだという演じ方をしていました。

そういったところで見ていくと、いろいろな価値観が違うなと思うお芝居にも共感できる場所を役者さんが一生懸命探しているのが見えてくるんじゃないかなと思います。

【質問】 ありがとうございます。

あと少しだけよろしいですか。もう質問ではないんですが、価値観という言葉を使わせていただいたのは、私、海外の方とお話しすることがたまにありまして、歌舞伎とかを見ていると、おなかを切ったり、指を切ったりして、考え方が違うんだねと言われることがあるからなんです。そういうときにも、「そういうところまで深掘って考えてみると、同じことを考えられるかもしれないね」と、これからお話しできるかなと思いました。ありがとうございます。

【中谷理事長】 先ほどおっしゃったように、「寺子屋」の部分だけ切り取って見ると、前の段が深く分かっていない場合には、話が理不尽だ、いくらなんでもひどいよと思ってしまうんです。

【堀越】 そうなんです。おっしゃる通りです。

本当は、できれば大序から全部通してやってもらうのが一番いいですね。いきなりゴッドファーザーのⅢだけ見ているとか、スターウォーズのダースベーダーが「おれはおまえの親父だ」と言っているところだけ見ているみたいな、そういう世界ですからね、わけ分かんないわけですね、残念ながら。

【質問】 大向うの会は、若い男性の会員は減らずにふえているんでしょうか。私はお能の世界にいるんですけれども、女性は年齢層を問わず現役の人も入ってきますし、一方で、子育てを終えて、場合によっては旦那さんを亡くされて80ぐらいから入ってこられる方もいるんですが、現役の男性層とシニアの男性層が来ないというものすごく男女比率の悪い状況になっていまして、いかに現役の男性を獲得していくかというのが、継承もそうですし、おけいこ事もそうですし、応援団もすごく課題なんですね。何か試みられていることとか、現状が実は同じだよというのがあったら教えていただきたいんです。

【堀越】 大向うの弥生会の会員は10人なんですよ。幸いというか、私の会の会長は81ですが、会長は若い人を入れなければだめだとずうっと思っていて、私が最初に入った20代当時、その後、結果として若い人を意識的に入れて、若い人といっても僕と同じ年の人間が5人ですかね、一番若い子が33歳です。逆に、上は60代、50代。ただ、私が入ったときは20人ぐらいいたんですけど、平均年齢78歳ぐらいだったんですね。一番年上が98歳という、なんだこれはという状態だったので、だいぶ若返りましたね。若返らせましたというか。東京は大向うの会が3つあるんですね。よその会は3人とか4人しかいないんですけれども、そこは高齢化しちゃいましたね。そろそろいなくなっちゃうかなという方もいらっしゃいますし、なかなか難しいですね。日本舞踊も女性ばっかりですね。

【質問】 女性は自然減を待っている状態なんですけれども、男性は増えないんです。

だいぶ若返られましたけれども、具体的には何か働きかけはなさったんでしょうか。

【堀越】 働きかけはしていないですね。結果として、声をかけている若そうな人たちをスカウトしたというのがメーンであって、年寄りは入れないみたいな感じで一時はやっていましたね。お年を召し過ぎていると、

あと10年ぐらいでいなくなっちゃうかなみたいな感じになっちゃってもあれなので、若くて頑張れる人にやってもらおうという形で入れています。

最近、大向うの話とかをいろいろな人にさせてもらったりするようにちょっとだけしてしたりはしていますね。この本を書いたときにブログを立ち上げたので、そこで声のかけ方なんかもポロッ、ポロッと書かせていただいているんですね。それはふえてほしいというよりも、だめな声をかける人はいっぱいいるんですよ、それをいかに淘汰しながらスカウトに足る人材に育ってもらうかというのがすごく難しくて、そこですね。先ほど言ったように、自分が目立ちたいためとか、お客さんの受けを自分がねらっちゃう人とか、いっぱいいるんですね。その罪は主に山川静夫さんにあると私は思っています。おもしろいエピソードばかり本に書かれるので、そこをまねされるんですよね。おもしろいエピソードは楽しいですからね。

【質問】 おもしろい話、ありがとうございました。

核心と革新が大事とおっしゃってくださいましたけれども、それには型を受け継ぐと同時に精神を受け継がなければならないということを説明していただきました。

たとえば、海外公演は日本の役者がどんどん展開して伝統文化を海外に広めていますけれども、ミュージカルとかオペラとかバレエみたいに歌舞伎も西洋の皆さんとかアジアの皆さんに演じていただくようなものになり得るのかどうか。そこも革新していける可能性があるのかどうか。素朴な疑問で申しわけありませんが、ご意見をいただければと思います。

【堀越】 外国の方が歌舞伎を演じることについては、どうなんでしょうね。海外のワークショップ形式では外国の方に歌舞伎を指導して、実際に上演するというのは昔からやられているんですね。六代目尾上菊五郎の長男は体が弱くて役者を廃業しちゃったんですけれども、彼はハワイ大学に行きまして、ハワイ大学の教授になって歌舞伎をずうっと学生たちに教えていたという先生がおります。もう亡くなっちゃいましたけども。

だから、スタイルとしての歌舞伎を演じることは可能じゃないでしょうか。ただ、どこまでそれが歌舞伎たり得るのかは見てみないと分からないと思います。ひとつヒントがあるとすれば、十五代目市村羽左衛門という昭和初期に活躍したすごい格好いい役者さんがいるんです。その人はフランス人とのハーフだと言われているんです、俗説として。日本人の女性にフランス人将校が産ませた男の子だと言われていて、育ったのは日本なので完全に江戸っ子だということにはなっておりますけれども、羽左衛門、大人気の歌舞伎役者で、そういう意味では大成功しているわけですね。ジャン・コクトーが来日したときに羽左衛門を見て、パリジャンだと言ったというぐらいに顔も美しくて、頭の小さいスラッとした人です。ということでいえば、可能性がなくはないのかなと思いますが、お客さんが受け入れないかもしれないですね、日本でそのままやるとしたら。

ただ、世襲だけかというと、先ほどチラッと言いましたけれども、国立劇場で歌舞伎俳優養成所がありまして、中学を出た後の子たち、要は義務教育が終了した後の子たちに歌舞伎を教育して、3年の間に基礎をたたき込んで脇役からスタートするという制度は一応あって、歌舞伎役者総勢のうち3分の1ぐらいがそういう子たちなんですね。だから、彼らがいないと歌舞伎は成り立たない状態になっています。

そういう中から幾人かは認められて幹部になってきている人たちもいますし、あとは子役のうちに筋がいいというので歌舞伎役者が認めて自分の養子にしたというケースもあります。愛之助さんなんかそうですね。彼はもともとまったく普通の一般家庭のお子さんです。それで言うと、坂東玉三郎さんも、一般といっていいのか分かんないけど、大塚にあった料亭のお子さんですね。歌舞伎役者のところへ養子に入って、ついには人間国宝になったというのもあります。

今の幸四郎さんたちのおじいちゃんは普通の一般家

堀越氏

庭の子で、当時は養子にもらうっていっぱいあったんですね。藤間勘右衛門という人は「こんなに顔の立派な子どもは見たことがない。養子にちょうだい」といって養子にもらって歌舞伎役者にしたのが七代目幸四郎で、その息子が十一代目団十郎、二代目松緑、八代目幸四郎なので、もしそのときに顔のいい子をちょうだいと言ってなかったら、今の歌舞伎界の幹部役者は半分ぐらいいなくなっちゃうということになります。

そういう意味では、必ずしも門閥だけではない世界なのです。ただ、実力を養うという意味では、子どものころから訓練するということの大事さというのは、歌舞伎役者たち、皆さんおっしゃっているので、スタート地点が遅い不利、その不利をどう解消していくかだけですね、これから。

中国は、京劇とかは小さいころからたたき込んで役者を育てますけれども、日本は義務教育の壁があって、なかなかそこは難しいと言われているのと、職業選択の自由の問題があるので、中国みたいに、よしこいつは京劇役者にしようといってたたき込むというのはなかなかできない。その辺で、これから歌舞伎がどう残っていくかというのはとても大きな課題でしょうね。役者もだんだん子どもが少なくなってきて跡継ぎが減っていますから、世襲だけでは絶対立ち行かないのは間違いない。

【司会】 ほぼお時間なんですが、最後にひとついかがでしょうか。

【質問】 質問します。

せっかく大向うさんが来られているものですから、かけ声について質問させていただきます。私は歌舞伎で別にかけ声はかけないんですが、歌舞伎って、舞台の間だとか、うまいなと思ったときにパッとかけ声が裏のタイミングでかかるとか、かけ声自体が舞台と一体となって、すごくいい雰囲気になるじゃないですか。それがないと下手っぴいだなと思うんですが、そんなように見ていればいいのかなということと、もうひとつ、その背景として、たとえば比較しても意味がないかもしれませんが、オペラとか、その派生のミュージカルって、もともとオペラってアリアという概念があるもんだから、たとえばアリアの後で拍手をしましょう、かけ声しましょうという決まり事みたいのがありますよね。歌舞伎ってそうじゃなくて、今言ったように、うまいなというときにパーンとかけられるじゃないですか。そういうものでいいんでしょうかという質問です。

【堀越】 その通りでいいと思います。歌舞伎の場合は決まり事みたいにかける場所と、本当に瞬発力でいくところと両方あると思っていて、芝居に句読点を打つみたいなイメージが自分たちの中ではありますね。ただ、役割としてはお刺身の薬味みたいなものなので、目立ち過ぎちゃいけないというのもあります。お寿司を食べて、わさびの味に言及する人はいないですから、きょうのはいいわさびだねとか絶対言わないですからね。だから、ないと気づかれるけど、大向うが中心になるような見方をされるのは違うと思っていますし、その辺のさじかげんは必要なものですね。

さっきおっしゃったように、ここだというところで声をかけるのは大向うの原点だと思います。こういう話をひとつさせていただきます。昔、片岡仁左衛門さん襲名のときに玉三郎さんが演じている役に外国人の女の子が幕見から突然、「イエス」と叫んだことがあるんですね。これがすばらしい間合いでした。大向うの原点はこれだなと思っちゃいました。全然不快感はな

かったですね。自分が受けようと思って変な声をかけるおっさんよりも、よっぽどさわやかでしたね、彼女のかけ声は。原点はそこですね。感動した瞬間に声をかけるという。

だから、感動に裏打ちされたかけ声であれば、基本的には不快なことにはならないはずなのと、外すこともないはずなんですね。うまいことやってやろうと思っている人のかけ声ほどだめですね。その辺を考えておかないといけないのかな。

あとは役者を引き立てる。相手が主人公なので、それは応援の原則ですね。その人が一番輝くやり方を考える。時には声をかけないほうが輝くときもある。私、勘三郎さんに２回ぐらい、「よくあそこでかけなかったね」といって誉められたことがありました。そういうことなんですね。かけたらいいというものでもないという。その辺が察して引くみたいな大向うの醍醐味かなと思いますし、ごらんになっていて、アッと心に響いたときに誰かの声がパッと聞こえたらいいなと思われるのが正解だと思います。

こんな感じでよろしいでしょうか。

【司会】 ありがとうございました。いいところでちょうど時間になったということで。

きょうは以上でお開きにさせていただきます。堀越さん、本日はありがとうございました。（拍手）

開催日：2016年6月23日

聞き書きで介護の世界が変わっていく
～介護民俗学の実践から～

デイサービス「すまいるほーむ」管理者　六車 由実 氏

【司会】 本日のオープンカレッジでは、六車由実先生をお招きしています。六車先生はもともと民俗学がご専門の先生でしたが、ある日、一念発起で介護の世界に飛び込まれました。そして、民俗学的手法を使って介護にアプローチされ、「介護民俗学」という聞き慣れない分野を提唱されています。この分野では最初のご著書『驚きの介護民俗学』が2013年、第2回の日本医学ジャーナリスト協会賞を受賞されています。ちなみに、2冊目の本『介護民俗学へようこそ！』は新潮社から出ております。この両方をお読みいただくと、六車さんが取り組まれている全容が分かるのではないかなと思います。

どちらの本もすごくおもしろくて、私は発行されたときに読んで、いずれ当社でお呼びしたいなとずうっと思っておりました。ずうっと思っていると幸運はやってくるもので、今年のゴールデンウィークに静岡に演劇を見に行ったときに、たまたま六車さんがその会場にいらっしゃったので、思わず、その場で講演をお願いしたという次第です。

きょうは、「聞き書きで介護の世界が変わっていく――介護民俗学の実践から――」という講演を1時間ほどお話しいただいて、その後、フロアともディスカッション等をできればと思います。

では六車先生、ご講演をよろしくお願いいたします。（拍手）

講　演

驚きの介護民俗学

こんばんは。六車です。きょうはお招きいただきまして、ありがとうございます。

ふだん講演させていただく会は福祉関係が多いものですから、こういった場所でお話しさせていただくのに、どんなふうに聞いていただけるのかというのはまったく予想がつかないので、きのうも非常に緊張して眠れなかったんですけれども、何かどこかで引っかかるものがあればいいかなと思っています。

お話を始める前に、きのうの相模原の事件で、亡くなられた方に心からお悔やみを申し上げます。

私自身にとっても非常にショッキングな事件でとても動揺しています。あの事件を個人の資質の問題として考えるのか、施設の問題と考えるのか、あるいは社会の問題として考えるのかというのが、まだ私の中ではほとんど整理がつかないんです。自分自身、福祉にかかわっている人間として、あの事件をどういうふうに受けとめていかなければいけないのかという点については、これからじっくりと向き合っていきたいと思います。きょうの話も、直接ではないにしても、どこかでつながる、それを考えるためのきっかけや手がかりになればいいかなと思っています。

きょうは「聞き書きで介護の世界が変わっていく――介護民俗学の実践から――」ということでお話をさせていただきます。私は大学の民俗学の教員を7年前にやめて、6年前に介護の世界に入りました。特に介護の世界に入りたくてやめたわけではなくて、いろいろな事情があってやめたわけですけれども、そこで介護に携わりながら、自分が今までやってきた民俗学の聞き書きを介護

の世界で始めてみたら、実におもしろいものが見えてきたというところで2冊の本を書いているんですね。

最初に所属したのは特別養護老人ホームという大きな施設だったんですけれども、4年前から定員10名の小規模通所介護施設・デイサービスすまいるほーむの管理者をしております。すまいるほーむがどんなところなのかということを少しご紹介しながら話を進めさせていただきたいと思います。

皆さんは介護現場をどのぐらいご存じなのか、あるいはどんなイメージを持っているのか分からないんですが、ご自分の中のイメージとすまいるほーむを比較しながら見ていただければと思います。

静岡県沼津市の小諏訪という旧東海道沿いの集落にある民家を改装したデイサービスです。1日の定員は10名ですけれども、登録人数は20名ぐらいです。利用者さんたちは要支援1、2、要介護1、2、3、4、5と、軽い方から重い方まですべての方がいらっしゃって、年齢も53歳から、この間、99歳になった方――でも、おひとりで暮らして自立していらっしゃる方ですけれども――、そういう方もいらっしゃいます。認知症の方もいらっしゃるし、パーキンソンの方もいらっしゃるし、さまざまな病気を背負いながら一生懸命生きている方たちです。

スタッフは全部で9名です。一日2時間ぐらいのパートさんも含めて9名です。福祉の現場ですけれども、福祉のたたき上げの方はほとんどいなくて、私自身もほかの職種から移ってきたのですけれども、たとえばデザイン事務所を自分でやっていた男性が資格を取って、すまいるほーむで働いてくれているとか、演劇を大学で勉強していた若者が来てくれたとか、福祉とは別の世界から来てくれたスタッフも多いですね。そういった自分たちの経験を生かしながら、さまざまなかかわり方をしています。

すまいるほーむの実践

すまいるほーむで大切にしていることは、利用者さんにとってもスタッフにとっても心地よい居場所であると

太下氏

いうことです。「スタッフにとっても」としているところがポイントかなと思っているんですが、お互いにとってここが一番いいと思える場所をつくろうとしています。利用者さんとかスタッフがそれぞれの経験とか能力を生かして、お互いに認め合って一緒につくり上げている場所なのですね。だから、一方的に何かをしてあげるとか、されるというのではなくて、みんなで一緒につくっているという特徴があります。

たとえば、ふだんの光景ですけれども、先ほど言ったデザインを専門にしていたスタッフが中心となって、いろいろなものをつくったりするんです。介護施設はいろいろな手作業をするわけですが、皆さんのイメージの中でどんなイメージがあるんでしょうか。塗り絵をしたり、何かをつくったりというのが結構幼稚だったりする場合が多いんですね。そうではなくて、利用者さんは80年、90年生きてきた人だから、ものを見る目はすごくあって、それなりにしっかりしたものとか、かわいいもの、デザインがすばらしいものを好むわけです。そういうものをそのスタッフがデザインしてくれて、みんなでつくっています。

写真1はスタッフが踊りを踊っているところです。お話を聞いていたら、利用者さんの中で、昔、踊りのお師匠さんをやっていた利用者さんがたまたまいらっしゃったんですね。そこで、「誰も踊りなんかできない。せっかくだから教えてください」と言って教えてもらったのです。レクリエーションの時間は利用者さんがレクリエーショ

ンをするんですけれども、このときは利用者さんに見られながらスタッフが利用者さんに猛特訓を受けたうえで、お祭りのときに披露しているんです。利用者さんの得意なものを生かしてもらって日々を過ごしているということですね。

もうひとつ、写真２はお別れ会をしているところなんです。高齢者のいらっしゃる場所ですから、亡くなる方も当然いるわけですね。そういう中で、私がこれまでかかわってきた施設あるいはほかの施設でも、今まで一緒に通っていた利用者さんが亡くなったということを他の利用者さんたちに対して隠してしまうということがあったりするんですね。なぜそうするかというと、ほかの利用者さんが混乱してしまうからとか、動揺してしまうからとか、落ち込んでしまうからとか、そんな理由でスタッフが気を使って利用者さんにお話ししないんです。

でも、今まで一緒にいた人が突然いなくなったら、皆さんは不思議に思うし、心配するじゃないですか。でも、それを言えないという状況が多くの福祉現場にはあります。でも、そうじゃない。みんなで亡くなったことを悲しみ、そして思いを共有しましょうということで、すまいるほーむでは、亡くなったという事実ももちろん伝えますし、みんなでお別れ会をすることを常としています。

もうひとつ、写真３は、みんなで座談会をした後のものです。最初にスタッフと利用者さんとともにつくっていくと言いましたけれども、たとえばすまいるほーむをこれからどうしていったらいいかとか、来月の行事について何をしましょうといった話を、利用者さんも含めてみんなで話し合うことになっています。皆さん、結構いろいろな意見をおっしゃってくれて、それをもとに、みんなで次は何しようというふうにつくっていくわけです。これが特徴になります。

このようなすまいるほーむにおける利用者さんとスタッフとの関係性というか、この雰囲気の一番基本になっているのが、きょうお話ししようと思っている聞き書きということだと言えます。

介護現場に携わったときに抱いた違和感

その聞き書きの話をする前に、私が介護現場に携わったときに抱いた違和感をお話ししておきたいと思います。それは、支援者としてかかわり続けることへの違和感です。高齢者の介護の現場は、今まで自分自身で生活ができていた利用者さんが、何かができない、たとえば脳梗塞によって左手が使えない、右手が使えない、あるいは認知症になって見当識障害が起きる、記憶が失われるといった形で、何かができないという状態でわれわれの前にあらわれるわけですね。

そうすると、スタッフは利用者さんができないことを「してあげる」という支援者として常にかかわるわけです。逆に言えば、利用者さんは「してもらう」という立場にあるわけです。介護の現場では常に「介護する／される」という非対称的な関係なんですね。これが逆転することはほとんどないわけです。

皆さんの中で、たとえば特養に親戚とかご家族が入られていて、そこに見学に行ったりとか、お見舞いに行ったりした経験がある方もいらっしゃるかと思いますけれども、そういうときにどのような印象を持ったでしょうか。私がかかわったいくつかの施設では、利用者さんがスタッフに対して非常に遠慮しているように思いました。スタッフたちはみんな若いですから、80年とか90年あるいは100年生きてきたお年寄りたちが若いスタッフに常に支えられる、支援の対象として見続けられるということは、自分がその立場になったときに、とても切ないことじゃないかなと思いました。

もうひとつ、『驚き』の方にも書いたのですが、回想法への違和感ということです。私は、民俗学を専門としているときに、お年寄りに聞き書きをして、昔の経験をうかがうというのが仕事だったわけですね。介護の世界に入ったときに、お年寄りに同じように昔のことを聞くという回想法があるということを知って、最初は「同じなんだ」というふうに思って勉強したんです。回想法について簡単に説明すれば、たとえば「認知症フォーラム. com」

の中で説明を読んでみますと、「回想法は、過去を語ることで精神が安定し、認知機能の改善も期待できるとされる心理療法」とされています。具体的には、昔、使っていた道具とか、はやっていた音楽とか、昔の写真等を使って回想を促すわけですね。

それによって、どういう効果があるかというと、「自分の人生の価値を再発見したり、当時の記憶が蘇って情動が活性化したりすることが期待できる。それから、話す、聞く、コミュニケーションをとるという行為が記憶を維持し、認知症の進行をおくらせることにつながる。回想法の有効性は国立長寿医療研究センターで検証され、回想法を実行した人はやらなかった人に比べて認知機能が改善したという結果も出ている」とされています。

確かに回想法をした対象者の認知機能が改善されたり、気持ちが安定したりということもあるかもしれません。だけど、先ほど私が違和感を覚えた関係性についてはいったいどうだろうかということなんですね。介護スタッフは利用者さんの心の状態を安定させること、認知機能を改善することを目的として回想法を行い、どういう変化があったのか、どういう改善が見られたのかというのを評価しなければならない。つまり、対象者は評価の対象になっているということなんです。ということは、回想法を行う場面での介護スタッフと利用者さんとの関係は「介護する／される」という力関係で、ここでも普段の介護シーンとまったく変わらないと言えると思うんです。

人間は関係性の中で生きている動物だと思うので、その関係性が常に「介護する／される」という固定的であったときに、人はいったい生きる意欲を持つことができるのだろうかと私は疑問に思うのです。そもそも認知機能の低下を予防するとか改善するというスタンス自体が、80年、90年生きてきた人たちの老いというもののプロセスを尊重したり、ともに受け入れていくこととはまったく反対なのではないか。つまり、認知機能の低下は、それに抗うんじゃなくて、老いのプロセスとして一緒に寄り添いながら受け入れていくということも必要なのではないかなと私は思っています。

私たちが目指していることは、高齢となっても、介護を受けるようになっても、あるいは認知症になっても、人として尊重されて豊かに生きられるための社会はどうあるべきか、その中で、私たち介護現場で何ができるのかということを常に考えていくことであって、介護民俗学における聞き書きの試みは、まさにそこを考えながら進めているものであると言えるかと思います。

「介護民俗学」とは何か

実際、介護現場で聞き書きをするというのはどういうことなのかということなのですが、まず民俗学について説明します。民俗学は、生活のすべての行為あるいは道具、ものであったり、行為であったり、生業であったり、すべてが研究の対象になるんですが、その主な目的は、失われつつある地域の記憶あるいは人の記憶を次の世代に継承していく、ということなんですね。その場合の主たる方法が「聞き書き」です。民俗学の中で聞き書きの語り手となるのは多くが高齢者なんですね。なぜならば、地域においてたくさんの経験を積んでいて、その地域の民俗的な知識を持っている存在だからです。だから、私は民俗学をやっていたときにも常に高齢者とかかわっていたわけです。

その場合の聞き書きのかかわり方としては、調査する側は語り手に対して「教えを受ける」という立場にあります。これはまさにそうなんですね。私たちは、学問的な知識はあっても、その現場で何が行われてきたのか、あるいはその人がどういう経験をされてきたのか知らないわけですから、それを教えてもらうという立場で聞かざるを得ないわけです。

もうひとつ、「聞き書き」って、「聞き取り」とは違うと私はいつも言っているんです。インタビューなんかでテープ起こしされたときに、聞き取りと書かれてしまうことがあるんです。それは常に訂正するんです。もちろん聞き書きというのは「聞いたことを書く」ということでもあるんですが、実は「書くために聞く」ということでも

六車氏

あるんです。「書く」というのは民俗学の世界で言えば論文を書くとか報告書を書くとか、何か記録に取るとかということで、その「書く」という目的があるわけですね。形にするために聞くわけです。報告書を書くために詳細に聞かないといけないから一生懸命聞くわけです。これが民俗学の聞き書きにおける特徴なのです。

ところで、先ほど太下さんが紹介してくださいましたが、介護民俗学は私の造語で、別に浸透しているわけでもなんでもないのです。介護民俗学って何だろうといったときに、最初からこんなことを考えていたわけではないんですけど、改めて言葉にしたときに、こういうことかなと思うんです。「民俗学的な関心や方法によって利用者さんの人生や経験について話を聞くことで、利用者さんを理解し、思い出を共有するとともに、その個人史から彼らの生きてきた時代とか地域の歴史、生活のあり方あるいは人の生き方について考えていく、知っていく」というものが介護民俗学と言えるかなと思うのです。

その場合の介護現場で行う聞き書きですけれども、さっきの民俗学の聞き書きと同じで、私たちの現場を通して利用者さんの記憶を家族とか地域に継承していく。要するに、介護現場というのは、記憶を継承していく仲介役を務めているのではないかということです。

「介護民俗学」のポイント

２つ目に、やはり、「教えを受ける」という立場で聞くわけです。３つ目、これがポイントになるのですが、「書くために聞く」のです。先ほど回想法と言いましたけれども、もっと一般的に言えば、傾聴ボランティアという言葉をご存じだと思いますが、その方のお話に耳を傾けるということは常に大切だというふうに言われてきたんです。その場合に、何でそうするかというと、その人の思いを察するために、どんな思いでいるのかというのを察するために傾聴すると言われるんですね。

でも、人の思いはなかなか分からないものじゃないかなと私は思っているんですね。思いとか、その人の態度とかじゃなくて、むしろご本人がお話しされている言葉に真剣に向き合う必要があるのではないか。そのために聞く。書くために聞く、表現するということを目的にすると、聞くという行為はまったく違うものになって、言葉に真剣に向き合うことになるのです。

では実際に、どんな話を私が聞いてきたのか。当然、戦争の話はよく出てきます。『ようこそ』で登場した語りをひとつ紹介します。「彼女たちの挺身隊」と名づけましたけれども、戦時中に国民学校を卒業して学校に行かず、職にもついていない独身女性を挺身隊として組織して軍需工場等に送ることがあったんですね。大正２けた生まれと昭和１けた生まれの女性たちが結構行っているんです。

昭和５年生まれのハルコさんは、国民学校を卒業してすぐに名古屋の陸軍造兵廠で働き始めたんですね。最初は爆弾を塗ったりしていたらしいんですけれども、あるとき知らないうちに風船爆弾をつくり始めた。風船爆弾をご存じでしょうか。日本の当時の秘密兵器だったそうです。大きな風船をつくって、その下に爆弾をつり下げて、アメリカまで飛ばすというものだったらしいです。その風船爆弾の風船の部分を貼りつける作業を彼女は担ったわけです。

戦争の話というと、悲惨な経験についての語りが多いように思われるでしょう。確かに、彼女も身近な人間が亡くなったり、つらい経験をされているのですが、最後に話したことがとても印象的なんです。３階建てぐらいの風船をつくったらしいんですけれども、丈夫にするた

めに、その中に入って内側を張りつけたらしいんですね。「それが真っ白で、すごくきれいだった。だから、嬉しくて、飛び跳ねて遊んだんだよ」と言ったんです。それはまさに当時の10代の少女の感覚だったんだろうなと、戦争ってそういうものだったんだろうなと、本当に素直に私は受け取れたんです。

大正13年生まれのサカエさんも挺身隊の話をしてくれました。沼津は軍需工場がすごく多くて空襲もひどかったんですけれども、その軍需工場のひとつに東京麻糸紡績があったんですね。そこでは朝鮮から連れてこられた若い女性たちも働いていたという事実があるんです。このサカエさんも麻糸の撚り糸の工程で働いていたんですが、朝鮮から来た女の子たちとのかかわりも持っていて、何か差し入れをしたとか、でも、差し入れをすると何か自分に危ないことがあるんじゃないかという危険も感じながら、そういうことをしていたとか、そんな話を聞かせてくれました。

戦争と一言に言ってしまうと悲劇を思い浮かべますけれども、ここに見えてきたのは、ひたすらに一生懸命生きてきた少女たちの姿だったと言えるかと思います。

そういった話とともに、個人の人生について語ってくれる方もいます。ゑみ子さんは幼児期にポリオを患って左の手とか足に麻痺があるんですね。今もそれが強く残っているんです。でも、ゑみ子さんは、もちろん障害の話もしてくれるんですけれども、多くは青春時代の恋愛の話なんですね。結構悲しい恋愛をしていて、妻子のいる方と恋愛関係になって、それが最終的には実らなかったという話をしてくれたりしたんです。

話をしている中で彼女が自分を「ゑみ子」と呼ぶときと「きよこ」と呼ぶときがあったんです。最初、何を言っているのか分からなかったんですが、どうやら使い分けているようだったんですね。それで、率直に聞いてみました。2つの名前は何か？と。すると、ゑみ子さんは、こう答えてくれました。「生まれたときにつけられたのはゑみ子なんだけど、ポリオの後遺症が残って障害を負ったときに、お母さんが拝み屋さんに聞いて、障害を忌むためにつけた名前がきよこ。家族はみんなきよこと呼んでいて、自分の結婚した旦那さんも一生、きよこと呼び続けていた」と。2つの名前を背負って彼女は生きてきたわけです。

でも、一番好きだった青春時代の彼はどうだったのと聞いたら、「ゑみ子と呼んでくれた」というんですね。「彼はゑみ子という名前がいいよといってゑみ子と呼んでくれたよ」と。彼女は言わないけれども、きっとこれが支えになってきたんだろうなと思います。そんなことを想像させるような話でした。

今、いくつか紹介しましたけれども、こんなふうに話を聞いていて、聞き書きによって結果的に変わってきたこと、それを目的としていたじゃないけど、話を聞くことによって変わってきたことがあります。

ひとつは関係性が一時的に逆転してきたということです。利用者さんと私は、介護現場では介護される人と介護する人なわけですけれども、聞き書きの場面では教える人と教えられる人になるということです。それは一時的なものに過ぎないんですが、それを繰り返していくことで何かが変わっていくかもしれない。

2つ目は、利用者さんの人生が立体的に浮かび上がってきたということです。私たち介護の世界で、その方がどんな人生を歩んできたのかをほとんど知らないままケアに携わっていることが多いんです。もちろん、いろいろな情報はいただくんです。病気の情報とか、麻痺の状態とか、そういうのはあるんですけれども、その方がどんな人生を歩んできたのかというのは本当に知らされていないんですね。でも、こうやってお話を聞くことで、何かができなかったり、問題をかかえた人から、すごいなと思える人生の先輩に変わっていく。

そして3つ目に、利用者さんへの愛情が生まれたことです。介護現場はなんだかんだ言いながら大変なんですね。本当に大変なこともたくさんあります。認知症の方について、どうしてこうなっちゃうかなと思うこともあるんです。でも、そこでお話を聞いて、その人の人生が見えてくることで、なんとなく愛情が生まれていったり、

許せるようになってくることがあります。

あえて、これは強調しておきたいんですけれども、支援ということからいったん離れて、民俗学等の支援とは異なる関心から、「表現する」ことを目的として聞き書きをしてみる。たとえば、この人のためとか、ケアに役立つからとかじゃなくて、まったく別の関心から聞き書きをすることによって、利用者さんと支援者ではない、福祉の現場にも人と人としての関係が生まれてくるのではないかと、この聞き書きを通して思い始めました。福祉の現場がもっと豊かな開かれた場所になっていく力を聞き書きが持っているのではないかなと思っています。

「すまいるかるた」の試み

今までずっとお話を進めてきましたけれども、ここで、どんなふうに聞き書きをしているのかというのを皆さんに動画で見ていただきたいと思います。最近、試みてきたのが「すまいるかるた」というかるたをつくることなんですね。去年、すまいるほーむが15周年を迎えまして、記念にみんなで何をつくろうかという話し合いをしたときに、先ほどのポリオの後遺症のある𠮷み子さんが「かるたがつくりたい。すまいるかるたがつくりたい」と言ってくれたので、とりあえず、かるたをつくることにしたんですが、イメージが全然わかない。

皆さん、「幻聴妄想かるた」ってやったことありますか。医学書院から出ているんですけど、ハーモニーという精神疾患の方の支援の施設があって、そこの利用者さんが自身の幻聴や妄想を言葉や絵にしたかるたで、すごくおもしろいんです。これをみんなでやったらすごく盛り上がって、これよりおもしろいかるたをつくろうねと言いながら、みんなでつくり始めたんですね。

そのときの聞き書きの様子なんですが、きょうお見せするのは稲夫さんのかるたの聞き書きです。稲夫さんは82歳です。専業農家で一生懸命農業をしてきて、地域の牽引役だったんですね。頼られる存在だったんですが、２年の夏、腰椎の圧迫骨折を起こして治療のために病院に入院したら、せん妄や認知症状があらわれた。それで、病院で身体拘束されたんですけど、ますますひどくなったので退院させられてしまった。

その後、別のリハビリ病院に入ったんですけれども、そこでは薬も打たれて、寝かされて、拘束されてという状態が長期間あったものですから、すごい大きな寝だこがおしりにできました。そして意思疎通もできなくなった。その姿を心配した奥様が、「これはちょっとおかしい。異常だ。このままだとお父さんが廃人になってしまう」ということで退院させて、それから、すまいるほーむに通い始めたんです。半年ぐらいで寝だこも治ったし、明るくお話ができるし、歩くこともできるようになった方です。その方への聞き書きです。

〔動　　画〕

今見てもらったのがその一部なんですけど、前半はお話を聞いていて、後半は、みんなでかるたの読み札をつくるという様子を見ていただきました。

できたかるたは、ご本人に聞きながら、その後も結構直したんですね。実際につくり上げたかるたは「急な斜面はお茶畑に適している、寒さが下っちまって霜がおりないから。そんなことは常識だよ。それが根本だよ」（写真４）というものになりました。ご本人も納得してくれて、きょう紹介するよと言ったら、「それはうそじゃないからいいよ」と言っていました。

こういうふうに実際に聞き書きをして、それをかるたにまとめるときに私たちが大切にしていることは、語ってくれた本人の言葉をできるだけ使うということです。つまり、こちらの言葉に直しすぎないいうこと。それから、語られた内容をまとめ過ぎずに、説明し過ぎたりしないこと。つくるところまで含めれば、全部で１時間ぐらいかけているので、話の内容はお茶畑の話だけじゃないんですね。だから、全部おもしろいから本当はひとつにまとめたいんですけど、まとめちゃうと実はおもしろくなくなるので、最初におもしろいと思ったところを中心に書く。それから、かるたですから、リズムを意識する。それから、何度も本人に確認してオーケーをもらうということです。そうすると、読み札がとても生きてく

るというか、本人の語りのように思えてくるような気がします。

今のビデオを見ていただいて気がついたと思いますけれども、利用者さんとスタッフが共同してつくっています。聞き書きの場面は、語り手の語りに聞き手である私や、まわりで聞いている利用者さんやスタッフが、「エッ、本当」とか「それはおもしろい」と率直に言う。それってたぶんとても大切なことで、『驚きの介護民俗学』の「驚き」ってまさにそうで、話を聞いていると驚くことがたくさんあるんですね。だから、素直に驚く。

そうすると、ご本人もびっくりするんですね。なぜならば、ご本人にとってはあまりにも日常のことだからです。お茶畑を斜面につくるのは霜が降りないからだということはみんな知っていることだと本人は思っているわけですね。だけど、知らない人にとっては、それはすごいことであって、素直に驚くことによって本人も、「これって、実はすごいことなんだ」というふうに自分や経験の意味を再評価することになる。

読み札をつくる場面は、聞き手が語り手の言葉を受けとめて、それを凝縮した言葉にしていく。でも、実は、読み札作りをみんなの前でするというのは、初めは意図があったわけではなく、その場の流れで、偶然そうなったんですね。その場でまとめちゃおうということでやったんですけど、これって、つくる方にとっては緊張感のあるものだったんですが、ものすごく成功したなと思うんです。つまり、かるたをつくるという場面自体が舞台性を持っているというか、見る、見られる関係がさまざまに入れかわって、非常に舞台性を持っているおもしろい試みだったなと思います。

「聞き書き」事始め

このように、すまいるほーむでは、いろいろな聞き書きの試みをしてきているんですけれども、最初の方は聞き手と語り手の１対１の対話だったんですね。最初に私が入った特養では、みんなの前で聞き書きをすることについてスタッフの理解もあまり得られなかったので、そ

の方のお部屋とか別な場所に移って１対１で聞き書きをしていました。

それはそれなりにとても深い時間を過ごすことができるんですけれども、すまいるほーむに移ってきてから聞き書きをしようと思ったときに、実際問題として、私は管理者なのですが、スタッフが日に４人しかいない中のひとりの介護スタッフでもあるので、１対１で話を聞いている時間はほとんどないんです。また、お部屋も狭いので別な場所に移ってというのはなかなかできない。だったら、みんなの前で聞いてしまおうということになりまして、あのように皆さんがいる中で、ある利用者さんに対してお話を聞くようになったんです。

そうしたら、最初は何を始めたんだというふうにスタッフも含めて驚かれたんですが、だんだんそこに自然に入ってきてくれるようになった。ああいうふうに相づちを打ったり、自分で質問したり、突っ込みを入れたり、そんなことをしながら、「１対１の対話」がもっと開かれた、「オープンな対話」になっていったと言えるかと思います。

それによって、いろいろな声がそこにまじってくるようになった。多声性といいますか、いろいろな声がまじってきて、そのおもしろさもあります。あるいは、みんながその場にいるということで、その方の思い出が自然と共有されるようになっていったと言えるかと思います。

それから、介護現場では、利用者さん同士もお互いのことを知らなかったりするんですね。だから、会話もあまり成り立たなくて、同じフロアに一緒にいるのにそれ

ぞれポツンと座っていたりするんです。しかし、聞き書きを始めることによって、お互いに関心を持ち始めて、私たちがいなくてもお互いに聞き書きをしている、聞き書きし合いっこしているみたいな感じになりました。

それから、利用者さんとスタッフあるいは利用者さん同士の関係が、その場に応じて、あるときにはこの人が先生のようにお話を聞かせてくれたり、あるときには別の人だったり、関係が固定的なものではなくて柔軟に変化していくようになりました。

もうひとつ、とても大切なことですけれども、聞き書きをしていない場面でも、誰もが自分の考えとか意見を言いやすい環境になってきたということです。これはとても大切なことだなと思うんです。スタッフも何かをしようというときには、まず利用者さんに聞くということが自然にできるようになってきたんですね。たとえば後で紹介するように、行事のときに思い出の味といって、利用者さんひとりひとりの思い出に残っている料理をつくったりするんですけど、その料理をつくるときに、私が聞こうとしなくても自然にスタッフがすぐにその人に話を聞いてくれたり、すまいるほーむで何かをするときにも、必ずまず利用者さんに話を聞くようになってきました。

このことはすごく大切なんです。すごく大切というより、介護現場ではあまりない環境なのではないのかなと思うんです。先日、運営推進会議をすまいるほーむで開いたんですね。といいますのは、この春から、小規模のデイサービスは県の管轄から市の管轄になり、地域密着型通所介護という位置づけになったのです。そのために小規模のデイサービスは市役所の担当者とか地域包括支援センターの職員とか、あるいは地域の自治会の方を呼んで、地域の中でどういうふうにデイサービスを行っていくのかという会議を開くことが義務づけられたんですね。先週、私たちも運営推進会議を行いました。その会議には、その日の利用者さん全員にも参加していただいて、みんなで活発な議論をしたんです。そうしたら、市の担当者が思わず、「こんなふうに利用者さんがどんどん話をするところは初めてです」と言ったぐらい、利用者さんもスタッフも垣根なく自由に話ができる環境というのは、稀有なことなんです。

「人生すごろく」による他者の人生の追体験

先ほど、かるたのお話をしましたけれども、聞き書きの表現の形はいろいろあります。私が民俗学を専門にしていたときには、文章を書くことを仕事にしていましたから、聞き書きを文章に表現するということから始めました。そして、ひとりひとりに「思い出の記」という冊子をつくったり、聞き書きをもとに本を書いたりして、それを利用者さんとか家族に贈るということをしてきました。また、スタッフにも読んでもらいました。

利用者さんからは、「おれの宝だ」とか、「これからも私の小説を書いてね」と喜んでいただきました。あるいは、先ほど言ったことですが、利用者さんの記憶がこの本を介して家族やスタッフに継承されていく。先ほどのすまいるかるたの聞き書きの場面とは違って、聞いたことを書くという時間は私ひとりの孤独な時間ですけれども、それは、そこにはいらっしゃらない利用者さんと静かに対話している時間にもなったかと思います。

それから、すまいるほーむに来てからは「思い出の味の再現」という試みを始めたんです。これだけの長寿社会の中で、特に女性の平均寿命が非常に長いですよね。デイサービスに通って来られる方も女性が多いんですね。すまいるほーむでは、８割ぐらい女性なんです。それで、お話を聞いていると、お料理の話が出てくることが多いんです。その料理の話を聞いていると、とてもおいしそうで、私も食べてみたいという思いが強くなる。なので、その方の子ども時代とか子育てをしてきた時代の料理について聞き書きをして、それをみんなでつくって味わうということをし始めました。そのときには利用者さんが主役となって料理の先生となるわけです。

この写真５で料理を教えてくれているのは、真ん中の方で、大衆酒場の女将さんをしていた方でした。その方にスタッフが聞き書きをすると、「一番人気だったのはニ

ンニクたっぷり餃子だよ」と話してくれたので、そのお店の雰囲気も醸し出しながら、ニンニクたっぷり餃子をみんなでつくったんです。たまたま地元の中学生が遊びに来てくれたので、その子にも利用者さんが教えてあげている。その方の思い出の味をみんなで味わうことで、その方の味が思いとともにみんなに伝わっていったのではないかと思います。

それから、去年、試みたのが、聞き書きをすごろくにして遊んでみるというものでした。これもおもしろい試みだったんです。私が聞き書きをする時、スタッフも手伝ってくれていたんですけれども、スタッフの中の看護師の羽柴さんが、「自分にも聞き書きができるのではないか。だけど、六車さんのように文章にするのはなかなか難しいから、何ができるかな」といろいろ考えて、すごろくにすることを思いついたんですね。すごろくなので、ます目にそれぞれのエピソードを載せていって、それをたどっていくという形です。

羽柴さんが最初に試みてくれたのが、靖子さんというアルツハイマー型認知症の方でした。靖子さんは、ちょっとしたことで怒りだして、あばれたり、他人を非難し続けたりする方で、私たちスタッフも、どういうケアがいいのか手探り状態でした。そのときに羽柴さんが、「人生すごろく」をつくってくれたのです。

羽柴さんは、その中にいろいろな仕掛けを仕込んでくれました。靖子さんの人生をたたえる言葉をたくさん散りばめてくれたり。たとえば、「小六のとき、カイコの品評会で沼津１位となる。杉本家、有名になる。おめでとうと三回言いましょう」といって、そこにとまったら、みんなで「おめでとう、おめでとう、おめでとう」と言うんですね。そうすると、靖子さんが、そのときに手を合わせてお辞儀をしたんですよ。ふだんは絶対しない行為で、私たちもとても感動しました。

それから、靖子さんは、同じことを繰り返すことがよくあるんですが、その中にすごく印象的なエピソードがあって、「子どものころに、お父さんが酒を飲んで帰ってきたときに、大きな棒を持った男に脅された。命からがら逃げた」といった話をよくしてくれるんですね。それをますのエピソードも取り上げて、そこにとまったときには、そのエピソードにかかわるセリフをみんなで言い合いお芝居をする等という仕掛けもありました。

「父、かんきちさんは婿であったため、たびたび伏見の実家に酒を飲みに帰って行った。とある日、その帰り道に鉄の棒を持った大男に出会ってしまう伏見大男事件」というます目があって、そこにとまった人が「金をよこせ」と言い、となりの人がかんきちさんの役割をして、「2,000円渡します。どこのどなたか存じませんが、ここを通してください」という演劇をしてみる。これはなかなかおもしろかったなと思うんです。それによって、みんなで靖子さんの人生を追体験していくことになりました。

今まで、ほかの利用者さんにとっても靖子さんという存在はなかなか厄介な存在だったんですけれども、これをやることによって靖子さんの人生を肯定していけるようになってきたように思います。遊びながら、その方の人生がみんなに受け入れられていったと言えるかと思います。

個人の歴史を刻んで継承する「すまいるかるた」

先ほどのかるたですけれども、今までお話ししたのは、たとえばひとりの人の「思い出の記」、あるいはひとりの人の「思い出の味」等、対象となる方をそのつど変えていったんですけれども、この「すまいるかるた」の中には利用者さんとスタッフと全員の思い出をそこに詰め込む形になりました。利用者さんについては先ほどのような形で聞き書きで読み札をつくって、スタッフについては利用者さんがスタッフに質問をして、読み札をつくってくれました。今年の春にようやく完成して、6月21日にお客さんを招いてお披露目会を開催しました。その様子をビデオでお見せします。

〔動　　画〕

見ていただいたのでお気づきだと思いますけれども、かるたって、普通は「あいうえお」とか「いろはにほへと」

と並んでいて最初の文字を取るじゃないですか。最初はそういうふうにつくろうと思っていたんですよ。だけど、聞き書きを中心にやるので、まず話を聞いて、それを文章にまとめますよね。だから、「あいうえお」にあわせて札をつくるのが意外に難しいということが分かって、取る字は、最後でも最初でも途中でもいいということにしました。文章をつくった後に取る文字を考えたわけです。だから、実際にゲームをするときには、最後まで聞いてからじゃないと札は取れないですよ、と言ってからかるたを始めるんです。

そうすると、結構おもしろい効果があります。皆さんもやってみて、かるたって、最初の文字でパッと反応して、競争になって、せっかくおもしろい読み札なのに、それを全然聞いてくれないということが、今まですまいるほーむでもあったのですね。でも、最後まで聞かないと分からないということになったので、みんな最後までちゃんと聞いてくれて、それから取るようになった。そうすると、その人の語ってくれた人生がみんなに伝わっていくようになった。みんな、その文章をおもしろがってくれるようになったわけです。

もうひとつ、かるたって、つくってみておもしろいなと思ったのは、未完成の可能性があるということです。私、今まで聞き書きをいろいろな形にしてきましたけれども、たとえば文章だったら文章でひとつの完結したものになるし、すごろくだって完成したら完結したものになるわけですね。でも、話って、その後もどんどんたくさん出てきますので、それをつくり変えていける、あるいは追加していけるような形ってないかなとずっと考えていました。

このかるたを作っている時には気づかなかったのですが、46文字分つくり終えてみたら、たとえば「ガギグゲゴ」とか「ギャギュギョ」とか「パピプペポ」とか、濁音とか半濁音とか拗音なんかも入れればもっともっとたくさんつくれることは分かったんです。そうすると、新しい利用者さんとか新しいスタッフが加わったら、そのたびに読み札を追加していくことができる。それによって新しいメンバーを受け入れていくきっかけにもなるなと思いました。あるいは、これから先、亡くなったり、すまいるほーむを去っていく人も出てくるかもしれない。でも、亡くなった後も、去った後も、その存在は決して消えずに、かるたをするたびに思い出されるということになっていくだろう。そうすると、かるたは個人の記憶を残していくとともに、そうした個人が集まってくる、集うすまいるほーむという場所の歴史を刻んで継承していくことにもつながるのではないかなと思って、実はすごい表現方法じゃないかなと私は感じています。

ちなみに、このすまいるかるたのお披露目会のもう少し詳しい報告については、医学書院のウェブマガジンの「かんかん！」にも出ていますので、ぜひごらんになっていただきたいと思います。

自分が老いたときにどういう社会であってほしいか

このように私の民俗学的な関心から始まった介護民俗学の聞き書きですけれども、もう少し広い意味での「表現する」ことを目的とした「聞き書き」へとだんだん変化してきました。その聞き書きの方法も表現の形も実践の場を通して少しずつ変化を遂げてきたと言えると思います。

改めて聞き書きというものを振り返ったときに、聞き書きというのは利用者さんひとりひとりの人生に深く向き合う行為であるとともに、利用者さんとスタッフあるいは利用者さん同士の「開かれた対話」であるとも言えると思います。あえて「支援」ということを目的とせずに、「表現する」ことを目的とすることによって、人と人としての関係が回復して、お互いの人生を認め合ったり思い合ってともに歩んでいく、それぞれの居場所になっていくんじゃないかなと思っています。

「問題解決」とか「支援」を目的として介護現場は成り立っているんですけれども、そういった介護現場の「ケアする／される」という一方的な関係性とか非常に閉塞的な空間をダイナミックに変えていく可能性を聞き書きは持っているのではないかと思っています。「表現としての

聞き書き」で支援を超えようというのが私の今の目標です。

最後です。皆さんもご存じのように、介護保険制度はどんどん変わってきています。ことしの春の改正も非常に大きなものでした。どっちの方向へ向かっているかというと、ひとつは介護とか認知症の予防に重点が置かれるようになっています。最初に回想法のところでも述べたように、予防を重視するということは、つまり老いのプロセスに抗うということが強要されるということだと私は思っています。

２つ目に、重度者への支援に重点化されるようになっています。特別養護老人ホームは今まで介護１の方も２の方も入れたんですけれども、ことしの４月からは要介護３以上でないと基本的には入所できないとなっています。だから、より効率的に重度の人をケアしましょうという方向に向かっているんですね。

一方で、これからは、軽度の要支援１、２、要介護１、２の方は介護保険から切り離れて市町村管轄の総合事業に移されていきます。それはボランティアも含めた地域の互助と自己責任にゆだねられるということなんですね。当初、介護保険が目指していたものとはまったく反対の方向に向かっています。

この問題で私が一番大きいと思っているのは、重度者と軽度者を分けようという意図なんですね。先ほども言ったように、私たちすまいるほーむには支援１から介護５までの方がいるんです。おととし、県の担当者が実地指導に来たときに、「支援のレベルが違う方たちがどうして同じ場所で同じことをやっているんですか」と批判されました。私はそのときに「一緒にいるから意味があるんです」と答えました。重度の方だからできない、軽度の方だからできる、ということではないのです。普通の社会は、できない人がいて、できる人もいて、その中でお互いに助け合って生きていると思うんです。

すまいるほーむも同じで、できない人に対してできる利用者さんが手伝ってあげるということもありますけれども、重度の手足もなかなか思うように動かない、車いすで過ごしている方が軽度の認知症の方を励ましたりしているんですよ。いろいろな人がいて、お互いに助け合って生きているというのが本来あるべき社会だと思うんです。けれども、介護保険が向かいつつあるところは、これを切り離してしまおうということですね。

もうひとつ、私たちにとって切実なことは、私たちのような小規模のデイサービスの報酬が大幅に切り下げられているということです。そのかわりに特養をいっぱい建てようとしているわけです。すなわち、施設を大規模化していこうという方向にあります。それは一方で必要なことかもしれないんですけれども、小さなところで営んできた利用者さんとスタッフ、利用者さん同士の親密な関係は、大規模な施設ではどうしても築きにくくなるのかなと思います。

私たち介護の事業所をやっているものとしては、非常に厳しい現実になっているんです。だからこそ、このすまいるほーむでの実践のような人と人との関係を回復させて、重度の人も軽度の人も、そしてスタッフも老いのプロセスに寄り添いながら、ともに支え合う場としての介護現場が必要になってくるのではないかと思っています。

きのうの相模原の事件もそうですけれども、何よりも、それは自分の問題だ、老いは自分がならないんじゃなくて、いずれは自分も老いていくという想像力をいかに持つか、ということだと思います。自分が老いたときにどういう社会であってほしいかというのを常に考えていくこと。それは人が最期まで人として豊かに生きられる社会だと思うんです。そのために私たちはこれからも現場で取り組んでいきたいと思っています。

これで終わりにします。ありがとうございました。（拍手）

質疑応答

【司会】 六車先生、どうもありがとうございました。いかがでしたでしょうか。介護施設、高齢者の施設はふだん、皆さんはあまり接点がない施設と思われているかと思いますけれども、きょうのお話を聞いていただいて、確かに施設としては縁がないかもしれませんが、そこで起こっていること、新しい人間性、人間関係の構築みたいなことはわれわれの社会全体にも大きく関係してくることだと思います。

せっかくの機会ですので、短い時間になりますけれども、ご質問等ある方は六車先生にお願いしたいと思います。

【質問】 いろいろありがとうございました。

すまいるほーむのように接してくださると、たとえば私が年を取ってもこういうところに入りたいなと思うわけですけれども、こういうホームが非常に少ないということは、どの点に問題があるとお考えでいらっしゃいますでしょうか。

【六車】 いろいろな問題があると思いますけれども、ひとつは働き手がいないということが多いですね。働き手がいないということのひとつの要因としては、非常に給与が低い、ですのでなり手がいないということですね。それによって現場が密な関係を保てるようなところまで回っていかないということが非常に大きい要因かと思います。でも、私が思うに、そういう介護の現場を変えていったり、社会を変えていくためには、現場に閉ざされていない状態が必要なのではないかなと思うんです。

川崎の施設で入居者を屋上から投げ落してしまうという事件がありました、施設に問題があったとか、個人に問題があったとか言われていますけれども、私は、一番問題なのは介護現場の閉塞的な状況だと思うのです。それをどう変えていくか。もちろん介護現場が変えていかなければいけないことは確かですが、地域であるとか、家族であるとか、いろいろな方がそこに入っていき、どういうことがそこで行われているのか、どういうことをしてほしいのかというのをどんどんそこに行って発言していかなければ絶対に変わらないと思います。

六車氏

すまいるほーむで大切にしていることは、閉ざされていないということで、常に誰でもウェルカムです。だから、地域の人も来ますし、取材にも来ますし、見学にもいろいろな人が来ます。私たちにとっても、介護をする側にとっても刺激にもなりますし、その状態が一番いいんじゃないか。多様な人たちがかかり、いろいろな声がそこに入ってくるということが、とにかく介護現場を変えていくためには絶対に必要なので、私たちの責任とともに、皆さんもどんどんそこに関心を持ってかかわっていっていただきたいと思います。

【司会】 ありがとうございました。

ほかに何かご質問ございますでしょうか。

【質問】 先生、ありがとうございました。非常に参考になりました。

現場からごらんになっていて、たとえば行政であったり、政治家の皆さんも含めてかもしれませんが、老いだとか死に向かっていく人間に対するまなざしはどういうふうに映っているのか、感覚でいいので教えていただきたいと思います。かなりフワッとした質問で大変恐縮なんですが、お願いします。

【六車】 最後に申し上げたように、たとえば認知症であったら、「認知症は予防しましょう」「認知症にならないよ

うにしましょう」と考えるのが一般的なようです。認知症に限らず、高齢になって介護が必要になった人に対しては、言葉には出さなくても厄介者、効率的ではない存在というふうに扱われているのではないでしょうか。それがある限りは、障害者の方も同じだと思いますけれども、きのうのような事件はまた起こるかもしれない、あるいは川崎の事件のようなことがまた起こるかもしれないと思います。

私は「弱者」という言い方は好きではありません。誰が「弱者」で誰が「強者」かって、いったい誰が分かるのかと思うのです。すまいるほーむを例にとったときに、利用者さんはいろいろなことができないですよね。そういう意味では弱い存在かもしれません。でも、私もほかのスタッフも、ほかの組織であるとか、ほかの社会で不適格者だったわけです。

私なんか研究者として何年も働いていましたけれども、そこに適応できなかったわけです。非常に苦しくなって抜け出して、行き着いた先が介護現場だったわけです。

だから、私も弱い人間だし、利用者さんも弱い人間なんですよ。弱い者同士がお互いに弱さを認め合いながら助け合う社会であるべきではないかな。政治とか行政は、そこにどう寄り添い、どう保証していくのかということを見てほしいけど、そうはならないのが世の中だなと思っています。

【司会】 ありがとうございます。今の日本の社会のオルタナティブの可能性がここにあるような気がします。

名古屋、大阪の皆さん、いかがでしょうか。何かご質問ございませんでしょうか。

【質問】 質問ではなくて感想みたいになって申しわけないんですけど、私も入ってみたいデイサービスだなと思いました。将来、年を取ったら入れてください。

そんなふうに非常に楽しい組織づくりというか、施設をつくっておられるなと思っています。そのポイントというか、やり方として聞き書きは非常に有効であるというお話だったと思います。そういう意味でいうと、六車先生のお話は介護と民俗学を組み合わせるということで新しいイノベーションを起こされたのではないかなと思うんです。

きょうのお話を聞いていると、介護施設だけじゃなくて、たとえば自分たちの部であるとか組織であるとか、あるいは住民の方と対話しながらいろいろなものをつくっていくというケースもあるんですけれども、そういうときにも、この聞き書きそのもののやり方ということではないんでしょうけれども、どっちが強者か弱者かということでなくて、多面的な関係性の中でお互いがリスペクトできるような組織をつくっていく、あるいはそういう雰囲気をつくっていくということはわれわれの仕事にとっても重要ですし、われわれの組織運営としても重要だなと気づかせていただいて、非常に感謝をいたしております。

個人的なことですが、父が高齢なので死ぬまでに何とか話を聞いておこうと思って、個人的には聞き書きをしている最中で、聞いていると、本当にびっくりするような話がいろいろあっておもしろいなと実感しているところです。ありがとうございました。

【六車】 ありがとうございました。

すばらしいです。聞き書きをしているんですね。最後に紹介したかるたは、こういった組織、会社でもできると思うので、イベントとしてやってみて、上司の話を部下が聞いてみるとか、つくってみるとかやると、おもしろいかもしれないですね。

【司会】 ありがとうございます。

大阪府は2025年に万博をもう一回開催しようという構想があって、そのメーンテーマが高齢社会ですね。高齢をネガティブなものとしてとらえるのではなく、また、いかに予防するのかということとか、またはアンチエージングみたいな若々しく生きるという単純なことではなくて、高齢の弱さとか、そういったオルタナティブな可能性も追求するような万博になればいいなと私も思っています。

【質問】 私も質問というよりは感想というか、本当に腑に

落ちたなというところがひとつあります。

私は７年ほど母の介護をしました。最初は訪問介護という形でやって、最期は病院で亡くなりました。中でひとつ感動したのは双方向性ということですね。幸せなことに訪問医の先生とかヘルパーさんには恵まれました。私の母は短歌とか俳句をやっていまして、訪問医の先生が短歌を習うくらいで、次に「これはどうですか」とつくってきてくれる。ヘルパーさんも俳句をつくる。そういう幸せな介護を受けてきたのですけれども、今度、病院に行きますと、介護する側は非常に忙しい。そういうのは、毎回行っていると、よく分かるんですね。

すまいるほーむでは決して余裕はないと思うんですけれども、介護という言葉も違うかもしれませんが、こうやって双方向性の介護をして面倒を見てられる。この辺が非常にいいと思うんですね。究極的には収入も足りないということもありますけれども、あとは人手がないというところが問題かなと。すまいるほーむみたいのがたくさんできれば、われわれも安心して老後を迎えられるわけですけれども、現実的にはかなり少ないのではないか。

母が入所したところも、大食堂に大勢の方がテレビを見て座っているんですが、みんな会話はないんですね。ただポツンと座っていて、隣同士のコミュニケーションもないし、まったく一方的です。入浴やトイレも行列のように並んで、流れ作業なんですね。

こういう現実があって、見学したときに、ここへ入れて本当にいいかどうかと思いました。でも、母が自分で希望したので、一応入ってもらいました。だけど、持たなかったですね。それなりに夜もいろいろなことが起きていたようです。すぐ退所しました。退院して、すごく元気になりました。

ですので、すまいるほーむのような施設がもっとできるべきだと思いますし、それには人手とか資金も要ると思うんですね。こういう情宣をしていただいて世の中に広めていただければという意味では、きょうは腑に落ちたというところで感想でございます。

【六車】 ありがとうございます。

実際、いろいろな試みをしているところは結構あるんですよね。大きな施設もそうですし、こういう小さな施設もそうですし、聞き書きにかかわらず、介護職員は心ある人たちが多いんですよ。そこで何ができるかというのは常に考えている人たちがほとんどです。

介護現場を実際に利用するというのは、そういった状況になってから初めて利用するわけですね。さっきの話とつながりますけれども、そこにかかわりを持っていくということかなと思うんです。どういうところに、どういう特徴があってということを普通に知れるようになっていくことが大切なのではないかな。半日いたら雰囲気はだいたい分かりますよね。

介護職で問題なのは離職率の高さなんです。それは給料の問題とかもありますけれども、そこに何か充実感を得られないと消耗してしまうということも当然あると思うんです。うちの施設では、給料は決して高くはないんですけど、少なくともこの４年間、離職者はいないです。それでも充実したものを持っているということは意欲へつながっています。

【司会】 ありがとうございました。他に質問はありますでしょうか。

【質問】 本日は、お話、まことにありがとうございました。２点、お伺いしたいことがあります。どちらも市町村とのかかわり方についてです。

ひとつ目が、市町村に管轄が移られたというお話を

先ほど伺いまして、一方で地域ですとか周りの方々とのオープンなやり取りも重要だというふうに伺いました。なので、市町村にこういうこともしていただけたら、もっとオープンにできるなとお考えのこともあるかと思うんです。具体的にどういうことを市町村に期待されているか、期待されていることがあったら伺いたいと思います。

もう一方で伺いたいのは、期待されていることはあったとしても、うまくいかないことがあると思うんですね。なので、どういうところを課題として認識されているかというのを伺いたいと思います。

なんで伺っているかというと、私がふだん、ごみに関する政策を担当していて、ごみの収集は割と市町村が管轄されているんですが、ごみって結構プライベートなものだったり、市町村の中で担当が２、３年でかわってしまったり、なかなか入っていけなかったりするような分野でもあるのではないかなと最近、思っているんですね。なので、市町村の仕組みかもしれませんし、うまくいかなかったりするところもあると思うんです。

まとめますと、どういうことを市町村に期待されているかということと、どういうところを直していけたらいいなと思われているか伺えると幸いです。

【六車】 まず小規模デイサービスの所管が、県から市町村に移ったのは国の政策によるのですけれども、財政抑制のために介護保険から外すという目的がありますね。市町村の事業に移すので、大幅には変えられないと思いますが、これから市町村が報酬を決めていくことができるので、下げていく方向にあると考えています。

そういう財政的な問題があるんですけれども、一般論として市町村の役所の人たちの意識が非常に低いです。何が低いかというと、私が一番問題だと思っているのは、来年の４月から総合事業という要支援１と２の方が介護保険から外されて新しい事業に移るわけですけれども、その形を決めるのに何をしたかというと、

いくつかの事業所から話を聞いただけなんですね。あと有識者に聞いただけです。何が足りないかというと、当事者からは何も聞いていないんです。ご本人たちがいったい何を望んでいて、何が足りないと思っているのかを聞くことをまったく念頭に置いていないということです。

私は何度かそれを指摘したんですけれども、先ほど認知症の予防の話が出ましたけれども、予防が強調される一方で、認知症の当事者の人たちがたくさんカミングアウトして発言されていますよね。あの勢いってすごいなと思っているんです。発言するだけじゃなくて、それによって社会を変えていこうと、実際変わってきている、認識も変わってきているところがありますよね。

あれは認知症の人だけの問題ではありません。介護を受ける立場の人たちはずっと声を聞かれないままいたんですよ、特に政策的な部分では。だけど、本人に聞かなければ分からないことはたくさんあるから、私たちは利用者さんに「認知症の方たちを見習って、みんなもどんどん発言していきましょう。そういう場にしましょう」と言っています。

だから、市町村が政策を立てるときには、最初に当事者に聞いてほしかったんですね。でも、それがなかった。だけど、批判がどこかであったんでしょう。１ヵ月月に１回、市町村の長寿福祉課から介護相談員が見学に来るんですが、この間、その人が来たときに、たまたまそこにいた要支援１、２の方に総合事業の参考にと

お話を聞いたんです。私も立ち合わせていただいたんですけど、すでに質問の型が決まっている。どういう型が決まっているかというと、今までのように長時間いるのがいいですか、それとも午前中だけいるのがいいですかとかですね。そういう型を決めているのです。それから、今のように専門職の人たちがケアしてくれるのがいいですか、それともボランティアさんでもいいですかとかですね。かかる費用も、専門職の人にやってもらって高いお金を払うのがいいのか、ボランティアさんにやってもらって安いお金の方がいいのかとか、そんな聞き方をするわけです。

どう答えますか。ご本人たちは、みんなすまいるほーむを好んできているから、今のままでいいと答えていました。でも、それはきっと何も反映されませんね。既成事実をつくっているだけなわけです。障害者のことは障害者に聞かないと分からないし、高齢者、介護を受けていることは介護を受けている方に聞かないと分からない。その姿勢を市町村には持ってほしい、社会に持ってほしいと思っています。

【司会】 ありがとうございました。最後に中谷理事長に総括的なコメントをいただきたいと思います。

中谷理事長、お願いします。

【中谷理事長】 きょうの先生のお話をお聴きしていて、理想的な高齢者施設をつくるため、先生がいかに素晴らしいリーダーシップを取っておられるかが分かりました。

市場メカニズムの本質は何かというと労働の商品化です。つまり、マーケットの評価によって人間の価値が決められてしまう。そうなると、要介護者とか高齢者はマーケットバリューがないから、価値ゼロになるのです。ある限度を超えると、価値はマイナスになってしまうわけですね。

「効率性」でどんどん切り捨てていこうというのがマーケットメカニズムです。その結果、人々の表面的な生活水準は上がってきたけれど、「人が最期まで豊かに生きられるか」という話とは無関係ですね。

六車さんは近代以降の市場メカニズムとか資本主義システムに勇敢に抵抗されている小さなコミュニティの話だけれども、現代文明に対するひとつのアンチテーゼとして提言されているわけで、すごく抵抗は大きいと思います。お話を聞くと「すごいですね、いいですね」と私が今申し上げているように皆さん感心されます。それは現代社会が失ってきたものをピンポイントで指摘して、しかもそれを実践によって何とか補おうとされているからです。

そのこと自体はすごく尊くて、なんとも批評の仕方がないんですけれども、現代文明全体に対する挑戦であります。これをどうやってもっと大きな輪にしていくのか。六車さんのような方をどうやって次々と生み出していき、こういう動きを日本社会全体に波及させることができるのかという非常に大きなテーマを私たちは突きつけられたのではないでしょうか。

課題先進国という言葉でよく言われますけれども、日本はこれから本格的な高齢社会に入っていきます。今後、日本において、人と人との関係性を重視したコミュニティがあっちこっちに生まれてきて、日本の介護ってすごいというふうになることが大きな夢ですね。

【司会】 改めまして、六車先生に拍手をお願いいたします。どうもありがとうございました。（拍手）

開催日：2016年7月27日

「資本主義」はどこに向かうのか？
～現代資本主義は、21世紀を生き延びられるか～

三菱UFJリサーチ＆コンサルティング　理事長　**中谷 巌**

【司会】 ただいまより、第５回のMURCオープンカレッジを開催したいと思います。

今回は中谷理事長をお迎えして、「『資本主義』はこれからどこに向かうのか？」というテーマで、１時間ばかりご講演いただき、30分ぐらい質疑応答をするという段取りになっております。では、理事長にマイクをお渡しいたします。よろしくお願いします。

講　演

今の資本主義はちょっとおかしいのか？

皆さん、こんばんは。

きょうは「資本主義がどうなるのか」という話です。「今の資本主義はちょっとおかしいな」と皆さんも感じられていると思う。たとえば日銀はマイナス金利政策をとっているのに、資金需要はほとんど動かない。これは考えてみれば資本主義の危機ではないでしょうか。だって、資本コストがほとんどかからないのに、新規投資が出てこないのですから、これでは成長のしようがない。

それから、アメリカの大統領選挙でも、トランプが出てきた。常識的には「あの人がなんで」と思われているが、白人の低所得者層を中心に強烈に支持されている。これはいったいなんなのか。いわゆるPC（Political Correctness）を完全に逸脱している人がここまでサポートされる理由はなんなのか。これも現在の資本主義と関係あるのです。

わが国は依然として「異次元金融緩和」「マイナス金利」政策で突き進んでいますが、私はこれは的外れな政策なんじゃないかという気持ちを持っております。

これをお話しすると中身に入っていっちゃいますけれども、金融政策で現代の資本主義が抱えている構造的問題を解決するというのは無理だと考えています。なんでもかんでも金融をおっかぶせれば、それでうまくいくと

考えるのは、あたかもドン・キホーテが旧式の槍でオランダを象徴している風車に立ち向かって無残に負けたと同じように、敵についての認識と戦うための手段が本来あるべきものとは違うんじゃないか。

まず資本主義の発展段階をおさらいします。今起こっていることで非常に重要なのは潜在成長率が著しく低下していることです。それから、1930年代にハーバードのハンセン教授が「長期停滞論」を書きましたが、これをもう一度持ち出してきたのがハーバードのサマーズ教授です。それから、マイナス金利の問題。そして、今ちょっと申しましたアベノミクスはドン・キホーテかと、的外れなことをやっているかどうかという話。そして、トランプ現象、英国のEU離脱の裏にあるものは何かということを議論しまして、MURC研究員・コンサルタントの皆さんが、こういう資本主義世界の現実に対して、どういう考え方で、どういうふうにお客さんと接すればいいのかという、私なりに考えたことをお話ししたいと思います。

高度資本主義前史

まず現代資本主義において異常なのは、日銀やFRB等、先進資本主義国で「中央銀行が景気対策の主役になっている」ということです。こんなことは歴史上でなかった。皆さんご存じの通り、中央銀行は通貨価値の安定の

ために設立されたものです。資本主義経済は貨幣経済ですから、貨幣に対する信用がなくなったら資本主義は成立しない。中央銀行は通貨価値の安定を目指すために政府から独立して設立されたのに、そういうことは言っておれなくなった。とにかく景気が底割れしないように、あるいは景気を拡大するために、成長率を高めるために大胆な金融緩和をやろうということで、設立の当初目的とは違う方向で中央銀行が使われているわけです。それほど資本主義はせっぱ詰まった段階にある。

産業革命が始まったころは、発明発見が次々に出て、蒸気機関、電気が発明され、通信手段として電話が生まれたり、移動手段として自動車ができたり、イノベーションの余地が十分すぎるほどありました。つまり、技術革新のコストとベネフィットを考えた場合、一般の人たちの生活が劇的に変わるほどのベネフィットのあるものが次々に出てきた。イノベーションにおけるフロンティアは無限にあったというわけです。ところが、時代を経るにつれてR&Dのコストがベネフィットを上回るようになった。だから、イノベーションによる生産性上昇率が落ちてきた。

それに加えて、初期資本主義の時代は、いわゆるヨーロッパがアメリカとかアフリカ、インド等の未開拓な新天地をフロンティアとして有効に活用した。資源を安い値段で手に入れることができた。初めのころは地理的なフロンティアも無限にあるように感じられた。こういう希望に満ちあふれた時代でした。1820年くらいから100年ほどの間、資本主義はすごい勢いで成長した。

ところが、第1次世界大戦、1929年のニューヨーク株式市場の大暴落と1930年代の世界大恐慌、第2次世界大戦を経て、自由放任主義では資本主義がうまく回らないということでケインズ経済学が登場、政府が総需要管理に責任を持たなければいけないという考え方が登場しました。

ケインズ思想が一世を風靡した第2次世界大戦後から1970年ころまでは、日本やヨーロッパの復興需要が旺盛であり、また、ソ連共産主義の脅威が資本主義国を奮い立たせた結果、資本主義は「黄金時代」と称されるほどうまく機能しました（エリック・ホブズボーム『二〇世紀の歴史　極端な時代』）。アメリカは共産主義に対抗するために、マーシャルプラン等、ドイツと日本に対して強力な経済支援をしましたので、ハンセン教授の危惧していた「総需要不足」は発生せず、「長期停滞論」はいつの間にか忘れさられていました。

大島氏

しかし、1960年代半ばぐらいからアメリカはベトナム戦争の泥沼に入り込み、また、ジョンソン大統領が社会福祉充実を進めようとしたために、財政赤字が急速に拡大し始めます。また、日本やドイツの産業競争力がアメリカの貿易収支赤字を拡大させ始めます。このため、固定為替相場を維持できなくなり、1973年には変動相場制に切り替わった。それ以降は一直線でドル安・円高が進むことになります。

グローバル金融資本主義の成立

1980年代に入りますと、アメリカの「双子の赤字」はますます拡大し、1985年には日米の為替レートは240円ぐらいまで来ました。そこでアメリカはさらなるドル安を求め、「プラザ合意」にこぎつけたことは周知の通りです。「為替をさらにドル安にしてくれ。そうでないと日本やドイツには勝てない」と、アメリカが泣きついたわけです。その結果、為替レートは120円程度までドル安になりました。しかし、そこまでいってもアメリカの競争力は回復しなかったのです。

この流れはすごい。360円から始まって120円、ドルの価値は3分1ですよ。3分の1まで自国通貨を切り下げても、なおかつ競争力が持てない。ついにアメリカ当局は「ものづくり」ではなく、金融で勝負しようとして、国家の産業政策の方向を「金融立国戦略」に切りかえます。貿易赤字でドルが流出するが、金融商品を広く世界で販売することで流出したドルを回収しようというわけです。

「金融立国戦略」で一番重要なのは、国境の壁を取り払うことです。つまり、資本が国境を越えて自由に移動できる「グローバル金融市場」を創る必要があった。

皆さんも覚えておられるかもしれませんが、1990年代のキーワードは「構造改革」でした。とにかく「構造改革」をしろという要求がアメリカから強烈にきました。日本中が「構造改革、構造改革」となりました。21世紀初頭の小泉内閣のスローガンは「改革なくして成長なし」でしたね。この間、「構造改革」が一世を風靡した。その背後にアメリカの「金融立国戦略」があったことは言うまでもありません。

世界各国で「構造改革」が進み、グローバル金融市場が確立したのが1990年代の半ばです。グローバル金融資本主義の成立です。アメリカはその恩恵を受けて、日本が「失われた20年」で苦しんでいる間も順調な経済成長を実現したのです。

しかし、この20年ほどの間に何が起こったかというと、格差拡大です。もちろん中国とか新興国が伸びてきたという意味で、国と国の平等度はある意味、縮小したけれども、それぞれの国内を見ていると、アメリカを筆頭にどの国でも不平等が目立つようになった。貧困層がどんどん発生した。日本でも雇用規制が解除されて、派遣とかパートとかの非正規雇用がふえ、企業は労働コストを下げるということをやりました。

しかし、金融中心に世界を動かそうとしたアメリカの魂胆はリーマン・ショックによって裏切られることになります。金融だけで経済を成長させようとすると必ずバブルが起きるという典型例ですね。このショックからどうやったら立ち直れるか、これを大恐慌にしないためにはどうしたらいいか。財政は多くの国がすでに過大な債務を抱えていて大判振る舞いはできないので、中央銀行に景気の立て直しを求めるしかほかに手はなかった。ヨーロッパは銀行の国有化に相当のユーロを注ぎ込みました。アメリカはQE1、QE2、QE3と呼ばれていますが、大規模の量的緩和を3回やりまして、中央銀行が供給する「ベースマネー」の量を3倍から4倍に急激にふやしたのは記憶に新しいところです。

日本の場合は、黒田さんが登場して、大胆な異次元量的緩和が始まった。その結果、株が上がったし、円安にもなりました。だから、初期のアベノミクスは金融市場を活性化させたという点ですごく成功したと思います。

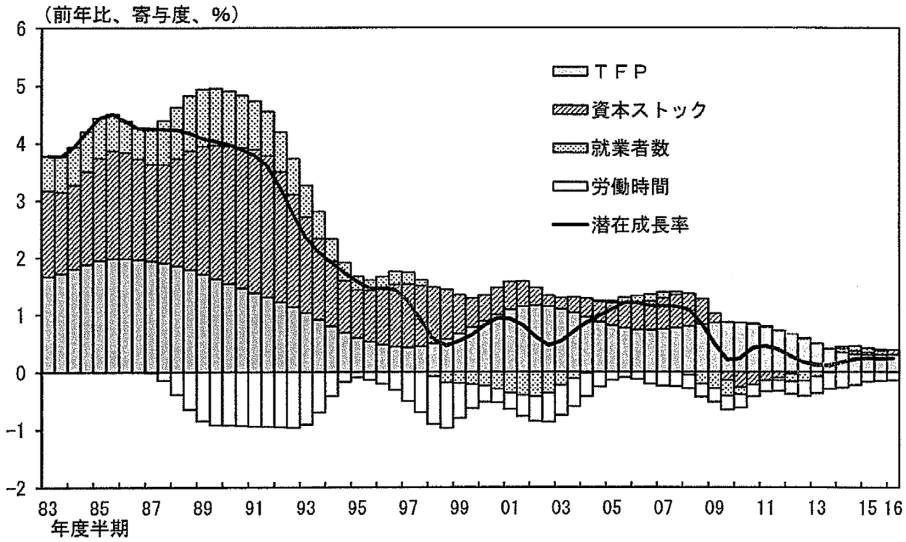
いずれにしても、リーマン・ショック後、EUにしても、アメリカにしても、日本にしても、中央銀行が景気対策、成長対策の中心的な存在として浮上してきた。しかし、これは先に申しあげた通り、資本主義の発展の歴史にとっては異常な事態です。

著しく低下した潜在成長率

以上で、資本主義の歴史を概観したのですが、今何が問題かというと、格差拡大に加えて、成長力が落ちているということに尽きると思います。潜在成長率という概念があります。これは長期的な成長力のことです。景気は良くなったり、悪くなったりするので、成長率はそのつど、変動しますが、潜在成長力はその平均値に近い概念です。グラフを見てください（図表1）。

このグラフの黒い太線が1983年から最近までの日本経済の潜在成長率を表しています。80年代に4％以上だった潜在成長力は最近ではほとんどゼロまで落ちてきています。潜在成長率を決める要因は①労働投入量（就業者数×労働時間）、②資本ストックの伸び率、③全要素生産性の上昇率（TFP）の3つですが、80年代は人口がまだ増加していましたし、投資意欲も旺盛だったので①②の要因が成長を押し上げていた。しかし、今は人口減少時代であり、投資もあまりふえないので③の生産性上昇

図表１　著しく低下した「潜在成長率」



出所：日本銀行

が頼りですが、最近はこれも振るいません。

どれをとっても非常に厳しい。まず、人口減少はこれから本格化します。これから10年間で日本の人口は600万人減るという予測です。しかも、少子化の影響で、生産年齢人口から外れていく人数に比べ、これから10年間で生産年齢人口に達する若者の数は約600万人少ないのです。つまり600万人の人口減少は大部分、生産年齢人口の減少となって表れるというわけです。600万人ってすごくないですか。平均すると毎年60万人ぐらいも生産活動に従事する人たちが減っていくということです（もちろん、高齢者でも働く人が増えるのなら、少し数字は変わってきますが）。

さらに、人口減少が今後どう推移するかという話になりますと、団塊の世代の人たちが寿命を迎える15年から20年先には、毎年人口が150万人ぐらい減ることになります。団塊の世代の人数は毎年、約250万人ですが、生まれてくる赤ちゃんの数が現在の水準（100万人）に留まれば、そのような数字になります。それは、この10年よりさらに先の話ですけれども、いずれにしても、人口減少は日本の潜在成長率に大きな負の影響を持つことになるでしょう。

次に、資本ストックの増加率です。今はマイナス金利の時代で、貸出金利は歴史上最も低い段階まで下がっているのに、新規の投資はほとんど出てこない。そういう状態ですから、資本ストックは増加するにしても極めてわずかしか増加しない。つまり、成長にはほとんど寄与しないということが言えます。

それから、イノベーションによる生産性向上。これは経済学者の間でも議論がある。先ほど初期資本主義の時代にはイノベーションのフロンティアが無限にあったと申し上げました。わずかのR&D投資で、すごく大きな成果を得られる分野がいっぱいあったけど、それが今はだんだんなくなってきた。それを言うと、「IT、AI、バイオとか、いろいろな可能性があるから、悲観的になる必要はない」と言う人もいます。これに関しては、もうちょっと時間がたたないとはっきり分かりません。

ただ、最近のイノベーションは世界的に特定の階層の人たちのためのイノベーションが多いですね。昔は、電気だとか、電話とか、その恩恵を受ける層の広がりが極めて大きかった。しかし、今は必ずしもそうではない。

ある日本の大手製薬会社の経営者から聞いた話ですが、アメリカの製薬会社の社長と会って話をした。アメリカは「カウチポテト」という言葉があるように、テレビを見ながらポテトチップを食べてブクブクに太ってい

る、不健康な人がいっぱいいる。製薬会社としては、ああいう人たちをターゲットにして新薬をつくればもうかるんじゃないのか、と尋ねたところ、アメリカの製薬会社の経営者の答えは、「あんな連中は金がないから、そんな薬開発してももうからない。私たちは高い治療費を出してくれる人のための最先端治療のための開発に専念しています」という話でした。

この話は結構ポイントをついているかもしれない。たとえば、iPS細胞だって、庶民が使えるようになるには、100年くらい待たなければいけないでしょう。AIだってそうです。金持ち層、富裕層に対するイノベーションしかもうからないということになると、昔のような世の中を変えてしまうような国全体の生産性を劇的に引き上げてくれるような技術革新は起こりにくくなるのではないでしょうか。だから、③の生産性向上も昔ほどは期待できないということになります。

いずれにしても、潜在成長率を引き上げるには相当な覚悟が必要だということになります。日銀がバズーカ砲でどんどん金を出したら済む、という話じゃないよということです。

盛んに議論される「長期停滞論」

先にも触れましたが、最近、盛んに議論されているのは「長期停滞論」と呼ばれるものであります。これはハーバード大学のサマーズ教授が最近、盛んに言っています。サマーズ教授が言っているのは、ハンセンという人が1930年代にすでに言っていることと同じです。サマーズさんもそれを認めております。ただ、ハンセンという人が言った頃は、大変な不況だったけれども、第2次世界大戦が起こって、軍需景気で長期停滞論なんて吹っ飛びました。それで長期停滞論はお蔵入りしていたんですがサマーズ教授がそれを引っ張り出してきた。

それは何かというと、資本主義が成熟化してくると所得水準が上がってくる、所得水準が上がってくると消費性向、自分が稼いだ所得のうち消費に回す割合のことですが、豊かになればなるほど消費性向は低くなる。資本主義が成熟すると平均所得が上がる。平均所得が上がると消費性向が下がって供給過剰になる。つまり、需要不足になるというのが基本的な考え方です。もうひとつ問題なのは、中国、ブラジル、ロシア等、新興国と呼ばれるところも、軒並み供給過剰の世界になってきてしまっていることです。

さらに、格差拡大が消費性向の低下にどの程度寄与しているかという問題もあります。昨年度の当社のオープンカレッジで、トマ・ピケティさんの話をさせていただきました。資本主義のもとでは格差拡大は不可避だというのがピケティ教授の結論でしたが、格差が拡大していくと、貧困層は稼いだ金は全部使わないと生活できないということで消費性向は非常に高いでしょうけど、絶対額は大きくはない。富裕層、上位5%とか10%が占める所得の割合は非常に高く、この人たちの消費性向は低い。平均すると、格差拡大によって消費性向が下がる。こういうことだと思います。

たとえば中東の産油国は一部の王族が大金持ちで、あとはみんな貧困層だ。こういうところでは、たとえば自動車産業とか家電産業とか、そういう産業は発達しない。なぜなら、中間層がいない社会はこういった工業製品に対する需要がないという話ですね。中間層が薄くなり、その結果、需要不足が常態化している。そういうことが中東に限らず、世界的に起こっているのではないか。

潜在成長力の低下という話に加えて、世界的な需要不足の問題。現代資本主義が抱えている根本的問題がここにある。これは結構、根が深いと言わざるを得ない。

マイナス金利は資本主義の終焉を意味する？

さてもうひとつの問題は「マイナス金利」です。なぜなら、資本主義の目的は「資本の自己増殖」にあるわけですが、金利というのは資本に対する収益率の代理変数であり、マイナス金利が長期にわたって続くということは、資本の自己増殖が不可能になったことを示すからです。

中世は宗教の時代だった。われわれの祖先の多くは「神」を信じて生きていた。「神」は絶対であり、疑うこと

は許されなかった。神はひたすら信仰の対象であり、信じるだけです。神様のやっていること、教えることに疑義を差し挟むことは中世世界ではできなかったわけです。そんなことをするとすぐに異端裁判にかけられます。

近代になって中世の「神」は死に、何が正しいかは人間が自分自身の責任で決めなければならなくなった（啓蒙思想）。いわゆる世俗化ですね。しかし、自分で何が正しいか決めるということは、自由を得たことの反動として人間にとっては大変苛酷なことだった。だから、「神」に代わる、無条件に信じることができる対象物が欲しい。そのひとつが「貨幣」です。貨幣を信じることから資本主義が生まれてきた。

資本主義においては、資本を増殖させることが絶対的な価値になります。これは宗教的な価値です。これに対していささかの疑問をさしはさむことは許されない。会社にいて投資案件が出てきたとき、私たちが自動的に問うのは「その投資の収益率はどのくらいか」ということで、それは高ければ高いほど良い投資だということになります。できる限り早いスピードで資本がふえていくことを絶対的によいことだと信じる新たな宗教、これが資本主義です。会社にいても、なんでもうけなければいけないのって言えないでしょう？資本の自己増殖自体の目的合理性を疑うことは許されない。それは、中世社会で、なぜ神を信じなければいけないかと問うことが許されなかったのと同じです。

しかし、先ほど潜在成長力低下について話しましたが、成長しない経済で利益を上げることは難しい。金利がゼロ近辺で張り付いているということは、マクロ的には利益の出る投資案件がなくなってきたことを意味しているということです（なぜでしょうか？‥‥答え：金利ゼロでもうかる投資案件が多くあるのであれば、資金需要が旺盛となり、その結果、金利は上昇するから）。

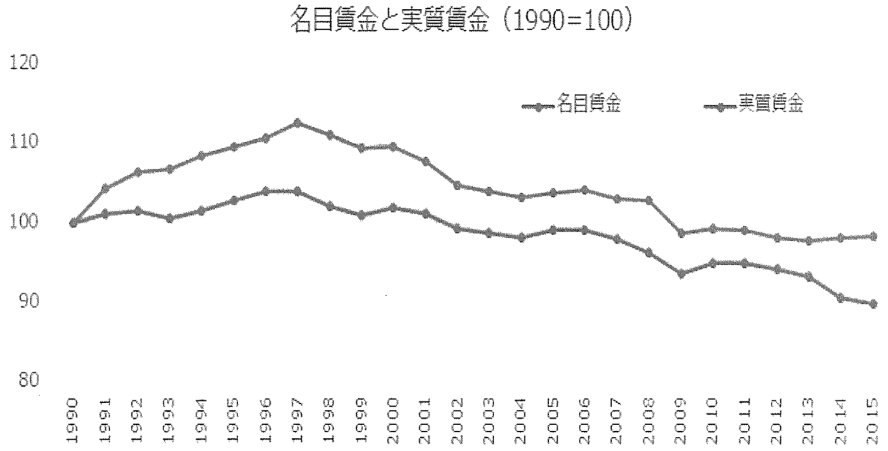
しかし、今世紀に入ってから、上場企業の資本収益率（ROE）は上がっています。これはゼロ金利と矛盾するのではないか。実はこの謎に対する答えは、「実質賃金の低下」です。今世紀に入って非正規雇用の割合がどんどんふえてきました。今は雇用者の40%ぐらいが非正規ですね。一般的に、この人たちの賃金水準は低い。そういうことでとりあえず、労務コストの低下によってこれまでに投資してきた資本ストックに対する利益率を上げることができた、というわけです。

その図を先に出しましょうか。これです（図表2）。

この下の線が実質賃金です。1990年代を100とすると、その後、少し上がり、97年がピークになりましたけれども、そこから実質賃金は下がり続けています。

労働コストが下がった分だけ、日本のROE（資本収益

図表２　1997年以来減り続ける実質賃金



出所：厚生労働省

中谷理事長

率＝すでに投資された資本ストックに対する平均利益率）は、リーマン・ショック直後を除き、改善しております。つまり、資本の自己増殖という目的を維持するために、労働が犠牲になったというのがこの20年間ぐらいの大きな傾向だったと思います。しかし、新規投資については、利益が出ないということなのですね。

マイナス金利は資本主義とは相性が悪い。資本主義の目的は資本の自己増殖ですから、前に前に進まなければいけない。自転車は前に進まないと安定しない。自転車が後ろに進めないのと同じように、資本主義もマイナス金利だと非常に具合が悪いわけです。

繰り返しになりますが、マイナス金利、ゼロ金利になっているということは、新規の投資需要がほとんどないということです。ゼロ金利、すなわち資本コストゼロで投資しないということは、プラスの利潤を生む投資機会がほとんどないということですから。日本の経営者に聞くと、「人口減少でマーケットが縮小するのに投資なんかできますか」と、もっともな答えが返ってきますね。ですから、ゼロ金利でも投資が生まれない状況は、資本の自己増殖という資本主義の目的を達成不可能にするという意味で、資本主義とはなかなか相容れないですね。

それから、銀行経営もマイナス金利政策のもとでは非常に苦しいです。金利ビジネスで儲けるということは大変難しくなっています。貯蓄から投資へという橋渡しをするのが金融機関の役割ですよね。これが資本主義を動かすひとつのエンジンになっていたわけですけれども、たとえばゼロ金利とか国債を買うとマイナス金利になると、下手に金融市場に手を出すと金利を稼げるどころか、手数料を取られるという状態になってきます。そういうことからも貯蓄の供給に支障を来します。

かといって、投資の方は貸出需要がふえるかというと、潜在成長率がゼロに近い状況では、みんなお金を借りようとしないわけです。つまり、貯蓄と投資の橋渡しという金融機関の果たす仲介機能に支障を来すということですね。ですから、これから、銀行経営は非常に厳しくなってくると予想をしています。

「マイナス金利は資本主義の終焉を意味するのか」については、非常に哲学的な議論で、資本主義の定義から始まっていろいろなことを議論しなければいけないので、すぐ「はい」とは言えません。水野和夫さん（今回課題図書に指定した『株式会社の終焉』の著者）はすごく大胆なので、次々に「エッ、そこまで言うの」ということまでどんどん言うので、僕なんかなかなかついていけない。でも、こういう問いが決して不適切ではないような時代になってきたことは間違いないでしょうね。

アベノミクスの評価

そこで、アベノミクスの評価です。アベノミクスは、金融政策だけではなく、構造的な問題である潜在成長率を引き上げる、あるいは、長期停滞論のもとになっている所得格差の問題とか、構造的な問題に本格的に手を打たなければいけない。特に重要なのはすでに始まっている人口減少にどう歯止めをかけるのか、という問題です。これはいい加減な対応では手に負えないテーマです。異次元量的緩和やマイナス金利政策ではどうにもならない。保育園を拡充するといったいくつかの対策は打たれているようですが、もっと根源的な問題、すなわち、出生率の低下をどう食い止めるかといった問題に対する取り組みが必要です。

金融異次元緩和の主たる目的は、消費、投資をふやして、資本ストックをふやすことができるかということだったと思います。マネーを供給すれば投資がふえると

いう期待があったと思いますが、それは幻想でした。あるいは、株が上がる。株が上がると、いわゆる資産効果で消費がふえる。消費がふえると投資もそれに引きずられてふえていく。つまり、ベースマネーを増大させることによって、消費や投資に良い影響を与えるというのが当初の目論見でした。その効果が全然なかったとは言いませんけれども、思ったほど大きくはなかったということです。

問題は、世界的に供給過剰が存在するときに、一国が金融政策でマネーの供給をふやすだけでは効果はたかが知れているということです。グローバルに金融市場が統合されていますので、国内で何かやっても、その影響が海外に逃げていく可能性があり、1対1の関係で効いてくるということはありません。

異次元金融緩和を3年半やってみて明らかになったことは、金融緩和ですべてが解決するというのは幻想だったということです。第2、第3の矢も必要です。第2の矢である財政出動は、日本の国家債務の大きさからいってもたいした期待は持てない。第3の成長戦略についても十分な取り組みはできていないと思います。なんといっても、人口減少の流れをどうせき止めるか、もっと真剣に、もっと大胆に取り組まないと日本経済はどんどん縮小していくと思います。

ドン・キホーテは、中世の価値観をもとに、間違った目標に対して旧式の武器で戦った。しかし時代は変わっており、それで勝てるはずもなかった。スペイン帝国からオランダ帝国に世界の覇権国が移行していくという大きな流れに気づかず、旧式のやり方で立ち向かおうとした。アベノミックスの金融政策で日本経済をなんとかするという考え方は資本主義の変質を十分に理解しないで戦っていることにならないだろうか。そう思えてならないのです。

右肩上がりでどんどん成長する従来型の資本主義世界の価値観と政策手段で、潜在成長率がゼロの人口減少世界に立ち向かおうとしているわけですが、これを続けていると副作用の方が将来的に大きくなるかもしれない。

合わない薬を一生懸命与えていると、いつか副作用が出てくる。そういう感触を持っています。

普遍的システムとしての「グローバル資本主義」の転機

イギリスのEU離脱やトランプ現象はなぜ起こったのか。いろいろなところで議論されているように、ひとつは移民の問題です。移民がいろいろな形でどんどん入ってきて、たとえば自分の家の隣に住み始めた。イスラム教徒が住み始めると、毎日4時になったらコーランを詠唱しているとか、いろいろな習慣、文化の違いが日常生活で周囲とぶつかるわけですね。アメリカの東西両海岸やロンドンにいるエリートたちは、そんなことは日常、経験していないから全然分からないわけです。実際、移民が入ってきたために自分のジョブがなくなったとか、賃金が引き下げられたとか、保育園の順番が後回しにされたとか、福祉水準がいろいろな形で下がっていくとか、いろいろな軋轢が現場ではあるわけですよ。そこが非常に強い力になっていると思います。

トランプさんも、いわゆる「ポリティカルコレクトネス」(差別主義的な発言は差し控えるべきだとする考え方)から逸脱した、とんでもないことを言うわけです。しかし、トランプという人はなんであそこまでサポートされたのか。

実は、2015年10月に、このオープンカレッジに同志社大学の村田学長(当時)に来ていただきました。村田先生はアメリカ政治の専門家です。そのときに、村田先生は断言しました。「トランプさんは、もうそろそろ終わ

りです。あれは夏の花火と同じです。ですから、ご安心ください。冬になったら、まともな候補がかわりに出てきます」と。アメリカ政治の専門家がこう断言していたのです。みなさんも「そうですよね」って、うなずいていました。でも、現実は見えてなかったですね、われわれ全員。

だから、村田先生おひとりを責める気はありません。ほとんどの人が間違えたわけです。それはイギリスのEU離脱の話と同じですよ。現場を知らないからです。現場にいる人たちの不満が渦巻いているわけです。特にトランプさんが目指した相手はプア・ホワイトですね。プア・ホワイトというのは歴史的に、どの政治、政権党にもほとんど相手にされなかった人たちです。たとえば黒人に関しては、昔からAffirmative Actionというのがありまして、たとえばハーバード大学入学定員の５％は必ず黒人にしなさい、という恩恵を受けていたわけですね。

ところが、そういう恩恵をヒスパニックにも与え、いろいろな人に与えているうちに、白人で貧乏な人はどうなるのと。この人たちにはなんの恩恵もないばかりか、Affirmative Actionがどんどん積み重なった結果、自分たちはどんどん追い詰められていく。「おれたちの政治的な主張は誰が受けとめてくれるの」という不満が鬱積していたのがアメリカ社会の現実です。トランプさんが舌鋒鋭く訴えている相手は、そういう人たちです。そういう人たちにとっては、彼が女性蔑視主義者であろうとなんでもいいんですよ。「とにかく、初めてアメリカ政治の中でわれわれの方をまともに見てくれた人がいた」ということで、熱狂的になったわけです。

そういうことで、新自由主義への庶民の反発が大きくなりました。従来のアメリカは「頑張ればなんとかなる。頑張れ。うまくいかなかったら、おまえの頑張りが足りないからだ」という自己責任社会です。ですから、今までは、うまくいった人に羨望の念を抱いて嫉妬するのは恥ずかしいことだと、アメリカ社会では思われていたわけです。だから、みんな我慢していた。我慢に我慢を重ねてきたんだけど、もうだめだと。それは移民の問題もあるし、所得格差の問題もあるし、いろいろな形で、もう我慢できないと、そういう鬱積があったと思うんですね。

それは裏を返すと、人、物、金の自由移動を正義と考えてきた新自由主義の問題でもあります。新自由主義はほとんどの人が抗うことができない価値観として世界に浸透してきたわけです。けれども、実際にそれをやってみると、いろいろな軋轢があっちこっちで生じたということです。

特にグローバリズムの中で、資本はグローバルマーケットで動けますから利潤機会はどんどんふえたんだけれども、労働は地理的に制約されておりますので、所得の高いところほど、低いところと直接競争しなければいけないから、賃金下方圧力が出てくるということで、労働賃金は上がらないという構造になります。そして、これが基本的な構造になっていて覆しようがないわけです。

従来、「規制改革が一番大事だよ」ということをわれわれ日本人の多くが信じていたように、「資本が自由に国境を移動できるということは正義である」という信念が広く世界に浸透してきたわけですが、これに対してノーという人たちがふえてきたということだと思います。

結論的に言うと、ひとつの流れとしては、戦後、覇権国であるアメリカが推進してきた普遍的システムとしてのグローバル資本主義にひとつの転機が訪れているという解釈もできるのではないかと思います。

さて、最後です。皆さん方、シンクタンクにお勤めになっていて、資本主義社会の変質と無関係に研究をしたり、コンサルティングをやっていていいのでしょうか。大きな時代の転換の中身をちゃんと認識して、それを背景にいろいろな仕事を進めていかないと、とんでもない間違いになると思います。たとえばアベノミクスがやっているように、右肩上がり経済を前提にしていろいろな経営コンサルをやるとすると、下手すると、投資案件のうちの多くは不良債権化しますよ。

だって、世界の構造が成長力ゼロの状況になってきているわけだから、そういうことを前提に考えていろいろなサゼスチョンをしていくということが必要であって、それ行けどんどん式の元気のいい提案だけでは、かえっ

て、クライアントにとってマイナスになるということだと思います。

潜在成長力が低下して世界的な供給過剰がひどくなり、また、グローバリズムを推進している限り格差も拡大し続けるという、資本主義経済の構造的な問題について深い理解を持っているということがリサーチをしたり、コンサルをしたりするときの前提になると思います。そういうことを認識したうえで、政策提言や企業コンサルをしないといけないのだと思います。

そのことに関連していますが、マクロで見た平均値とミクロの対策は決して同じではないということも強調しておかなければいけないでしょう。私はきょう「資本主義世界は成熟してしまって成長できない、もう終焉か」というお話をしましたけれども、これはあくまでマクロの話です。ミクロは別です。個々の企業あるいは個々の地方自治体でもいいですけれども、ミクロのアプローチにおいては、どっちみちゼロなんだから何もできないというわけにはいかない。

その峻別をちゃんとやりながら、しかし、それ行けどんどん型の処方せんをやっていると、投資案件の多くは不良債権化していく。事業に失敗して、「あんなこと、やらなければよかった」というふうになりかねない。こういうことだと思います。これは当たり前のことを申し上げているので、皆さん、それは分かっているよということだと思いますけれども、念のため申し上げておきたいと思います。

とりあえず、これで私の話を終わります。ご清聴、どうもありがとうございました。（拍手）

質疑応答

【司会】 理事長、どうもありがとうございました。

お時間が少々ありますので、皆さんのご意見とか、感想も含めて、質疑の時間にさせていただきたいと思います。早速ですけれども、自由に挙手をお願いします。

【問】 初めに口火を切るのはすごく大変だと思うので、私が軽いところから質問します。

課題図書となっていた『株式会社の終焉』という本がありました。これを見てみると、いろいろなことが書いてあるんですけれども、すごく疑問に思ったことがひとつあります。それは「株式会社と国家は対立するものである」というのがあって、それはいいとして、「企業はもっと内部留保を国家に返せ」ということが書いてありました。私は税について研究しているのですけれども、会社の内部留保に対する課税を政府は強化していき、それも全部株主に出せみたいな形のことを言っているんですが、それはちょっと違うような気がするんですよね。

観点がちょっと違うかもしれませんけれども、現状は株主資本主義みたいなところに強く来ちゃっている感があって、もうけたものを誰がもらうのかというと、株主にもっと出せという、渡せという感じの配当性向を高めろとかありますね。そういうのはあるんですけれども、会社が稼いだものは中に残して、また会社が使うようなシステムでどこが悪いんだというのが個人的な感想なんですが、そこから教えていただけませんでしょうか。

【中谷理事長】 私は水野さんを擁護する立場にはないんですけれども、彼はすごく歴史を勉強していて、おもしろい発想でいろいろなことを言っているので彼の本は勉強になります。ただ、今おっしゃった問題も含めて、「なんで、そこへ急に話が飛ぶの」ということはずいぶんあります、はっきり言って。

今の問題も、内部留保を全部政府に還元すると、今

中谷理事長

までの努力はどうしたらいいのという話になります。でも、そこまで行かなくても、「現代の神」としての資本に従属するという現状から脱却して、普通の人々に恩恵が行き渡るようなシステムはないのかという話なんですね。特に日本の場合は巨大な国家債務を抱えていますし、企業がため込んだお金をなんらかの形で国家債務の返済に当てなければいけないと、こういう課題があることは事実です。

しかし、その辺になってくると、独裁政権でもない限り絶対できないことです。彼の言っている多くのことは独裁政権でないとできないということは明らかなので、その辺が論理の飛躍だと思います。民主主義社会の中で、どういうプロセスで、どういう手を打っていけば、そちらの方向に行けるのかという議論をしなければいけないということですよね。

だから、違和感はいっぱいあるのではないですか。だって、「配当は全部サービス給付にして、その地域の人だけしか恩恵がないような配当にすれば、グローバル資本は引き上げていくだろう」と言っているわけですけど、グローバル資本が一挙に全部引き上げてしまったら日本経済は壊滅しますね。だから、急にできることではないということもあります。

【司会】 どうもありがとうございました。ほかにどうぞ。

【問】 コンサルタントでも研究員でもない一社員でございます。

最近、本屋さんへ行くとフィンテックという本が非

常にたくさん並んでいます。きょうのお話の中で、ミクロの世界というか、ビットコインとかポイントとか、そういうものが一般の人にも浸透してきているんですけれども、一面で、こういうエネルギーみたいなものがあるような気がするんです。こういうものは焼け石に水というか、日本にとってもフィンテックは、ある意味では大事なものではないかなという人もいるんですけれども、この辺は何かご意見ございますか。

【中谷理事長】 確かに、フィンテックになって銀行に払う手数料が安くなっていくし、金融取引がスムーズになるんじゃないかということはあると思います。

確かになんらかの改善は行われると思いますけれども、根本的にわれわれの生活の中身を豊かにするのかという面から言うと、正直言ってよく分からないですね。

【司会】 ありがとうございました。引き続き、いかがでございましょうか。では、MCの私の方から。

それこそ第２次世界大戦の後で世界中が生産能力をドーンと落としたおかげで、長期安定的な成長が結果的に実現できた。悪魔のささやき的に言うと、今の世界でもどこかの生産能力をたたき落としてしまえば、しばらくの間、経済が安定するんじゃないかという悪魔のささやきがあるような気もするんです。あまりにもポリティカルな発言ですが、いかがでございましょうか。

【中谷理事長】 ポリティカルというより破滅的な発言だと思います。

どこかに核爆弾に落ちて地球の３分の１ぐらいが破壊されてしまったら、いろいろな形でそこを復興しなければいけないということで、今の供給過剰の世界どころか、ものすごい需要過多の世界になるでしょうね。

ですから、成長率という観点から言うと、潜在成長力は劇的に上がるでしょう。けれども、亡くなった３分の１の人の命の価値はどうなるのかと、失った財産はどうなるのかというストックの面で考えると、プラス面ばかりではない。いったん、大きく後退してから、それを取り戻すというプロセスを楽しみましょうという形になるわけで、それをエンジョイできる人にとってはいいかもしれないけど、実際に命を落としたり財産をなくしたりした人の立場に立つと、これは大変な悲劇ですよね。そんな悲劇もあった方が資本主義にとっていいんですかね。そこのところが問題だと思います。

【司会】 もちろん、そうならないようにはしていかないといけないのですけれど、今の話の流れで、中世の神にかわる資本が近代の神だとしたときに、それが自己増殖を果たし続けた結果としての現代がある。格差拡大がその裏側に常にあるとすると、当然ながら、中産階級の復活をどういう形で遂げるのかと、それをしないと人口増という回答にもたどりつけないような気がするのですが、そのあたりについてはいかがでしょうか。

【中谷理事長】 現実的に言うと、金融市場にしても、財政にしても、いったんなんらかの形で破綻することは避けられないのではないか。民主主義の限界を考えると、民主的なプロセスだけで現代のさまざまな問題が解決できるとはなかなか思えない。特に世代間の問題が深刻です。若い人たちはろくに年金ももらえそうもない。高齢者で資産を持っている層に資産課税をかけて、その税収を若い人用の年金基金に注入するとか、そういう荒療治をしない限り、世代間の不平等問題は解決しないでしょう。

でも、そんなことできますか。だって、高齢者の方が割合的には多くなっているのだから、選挙をやったら、そんなことを言い出した政党は絶対勝てない。つまり、民主的なプロセスというのはすごい近視眼的なので、望ましい解決策はなかなか実現しないわけです。実現しないで、どんどん矛盾が拡大していくと、日本の国家債務もすごいですし、今のような路線でドン・キホーテ的な政策をどんどんやっていると、どこかで行き詰まって、ドーンと来る可能性が高いと思いますね。

そうなったときに初めて、本当に立ち直るには何が必要なのという議論になってきて、ひょっとしたら、

今申し上げたような資産課税の強化とか、今は絶対にノーという答えしか出ない政策に移行していけるようになるかもしれないですね。

資産課税の強化については、橋下徹氏がかつて打ち出した「維新八策」の中で主張していました。でも、選挙のときに彼はそれを封印した。なぜかというと、それを言うと選挙に負けるからです。あんなに元気のいい人でもそうなんですよ。

だから、この日本社会がズタズタになった時に初めて、資産課税の強化のようなドラスティックな改革案が通るようになると思います。

【司会】 分かりました。ありがとうございました。まだまだ時間はかかりそうな気もいたします。

【問】 ご講演ありがとうございました。ひとつ質問させていただきます。

今から８年ぐらい前だと思いますけれども、ドイツ銀行がレポートで、「これから新しい銀行ができるんじゃないか」みたいな内容を出していたんですね。誰が銀行を設立するのかというので、ドイツ銀行のレポート上では、たしかGang of Fourという言い方だと思いますけれども、アメリカのIT企業、グーグル、マイクロソフト、アップル、フェイスブックだったと思います。こうした企業たちが新しい銀行をつくるんじゃないかみたいなことが書かれていて、その後、さっきご質問があったようなフィンテックの話が出てきたと思うんです。

現在に至るまで、それらの企業が銀行をつくったという事実はないわけですが、なんとなくSF的な話になりますけれども、もしグーグルが新しい銀行をつくるとしたら、今の銀行を代替するようなものではない、まったく違う価値観が流通するようなものをつくるかもしれないなという期待も持っているんです。

ですから、ビットコインの話にしても、これは単に普通の通貨を代替する機能として、より便利なものとして騒がれていますけれども、もしかしたらまったく違う価値観が流通するような社会が生まれる可能性もあるかもしれないと漠然と期待しているのです。そんなことについて、もしコメントがあれば、ぜひいただきたいと思います。

【中谷理事長】 なかなかおもしろい話ですね。われわれは無意識のうちに従来型の価値観にとらわれて議論していますので、貴兄が言われたような発想になかなかならないのですけど、ひょっとしたら、今までの資本主義的な発想とは全然違う発想でやりましょうよという話になるかもしれない。

以前、「地域通貨」の話があったじゃないですか。あれもそうですよね。誰かをボランティアで助けてあげたらポイントをもらえて、自分が困った状態になったら、それを使える。物々交換みたいな感じですよね。

【問】 当初の地域通貨は減価していくという発想があったんですね。

【中谷理事長】 減価していく。つまりマイナス金利ですね。

【問】 そうです。

【中谷理事長】 だから、それが当たり前だと思えるようになったときに、新しいサービスの形が生まれてくると思います。グーグルとかIT企業が本当に斬新な資本主義世界にかわる新しい価値観をもとに金融機関をつくれるのかどうか私には分からないけど、可能性はありますよね。だから、今までの資本主義の成り立ちとは違う社会のつくり方みたいな感じでやっていく可能性は出てくると思います。先のことなので、分かりません。

【問】ありがとうございました。

【司会】ほかにいかがですか。

【問】どうもありがとうございました。

ちょっと本題とは違うかもしれないのですけれども、本日の講義でトランプの話が出てきましたが、日本にとっては、トランプが勝った方がいいのか、ヒラリーが勝った方がいいのか、本当はどっちなのかなというのがあまりきちんと議論されていないような気がするのです。ヒラリーは中国寄りだという話も聞いたことがあるのですが、日本にとってヒラリーとトランプはどっちがいいのでしょうか。

【中谷理事長】 私が答えるより皆さん方にアンケートでも取った方がいいかもしれないと思います。

では、アンケート取りましょう。日米関係について、トランプが勝った方が日本にとってはよくなる。もうひとつはヒラリーが勝った方がよくなるというか、現状維持かもしれないけど。

どっちが相対的に日本にとっていい大統領候補と思うかというので、トランプと思う人。――質問したひとだけだった。

ヒラリーの人。――みんなヒラリーですね。

というのがアンケート結果でした。

かといって、あなたが間違っていると言っているわけではありません。これは本当にやってみなければ分からないことでもあります。

しかし、ご存じのように、トランプはたとえば「米軍の駐留費用を全部日本が持て」と言っていますよね。そうすると、どういうことが起こるかというと、あと2、3兆円防衛予算が増えそうです。「全額出しました。しかし、アメリカ軍の指揮権はアメリカにある。全額、お金を出しているけれども、指揮権がない」。そんなことを日本国民が許すと思いますか。ナショナリズム的に考えて、そんなことは維持できないでしょう。ということは、「アメリカ軍には帰ってもらおう、同じ金がかかるなら自前でやろう」ということになって、日本は軍事大国にならざるを得ないというふうになります。

長期的には、これがひょっとしたらプラスかもしれない。軍事的にはほとんどアメリカの属国ですから、トランプが大統領になることによって、独立への機運が高まるじゃないかという長期的な考え方も可能ですけど、短期的には日米関係がすごくぎくしゃくして、どうしようもない状態になるかもしれない。隣に頼りになるような国があればいいんですけれども、日本は地政学的に見てもややこしい国々が隣にいるわけですよ。ロシア、中国、韓国、北朝鮮でしょう。でも、日本は疎開できませんので、この人たちとつき合っていかなければいけないわけです。そのときに、アメリカが相対的にベターな友人であるのかどうかということですね。

【司会】ほかにいかがですか。

【問】先ほどの資産課税強化のことですけれども、アメリカもたぶん、それを考えていたと思うのですね。ブッシュのときに、相続税ですけれども、資産課税を停止して、停止条件つきにして、その後、なんとか条約というんですけれども、課税しようとしているんです。そして、オバマもできていないという現実があるので、資産課税を強化していくというのは政治的には難しいのかなと思ったのですが。

【中谷理事長】 先ほど言いましたけど、資産課税は難しいです。平常な状態が続いた状態で、そんな簡単に民主主義というものが最適な回答を出すとは、私は思っていません。マーケットクラッシュが起こって、どうしようもないという状況になって、誰かが金を出さなけ

ればいけない、という状況になれば話は別ですが。たとえば第１次大戦、第２次大戦と戦争をしたときに、金持ちがしょうがないから金を出したんですよ。だって、金持ちしか金持っていないから、戦費は金持ちしか出せなかったわけです。

逆に言うと、それがものすごい社会の平等化になったんですね、結果的に。だから、資本主義の黄金期は可能になったんですよ。あのとき日本でも3Cだとか自動車とか、中間層が物をどんどん買ったじゃないですか。あれが成長を支えたんですね。戦争という名の「強制的資産課税」が実現した結果、資本主義経済がすごくうまくいったわけです。

だから、今回も金持ち連中を納得させるようなことが起これば、否応なく、そうなると思いますけど、そうなるにはどうしたらいいのかというのは私には分かりません。

【司会】 ありがとうございます。ちょうど切りもよさそうなので、理事長に改めて盛大な拍手をお願いいたします。どうもありがとうございました。

開催日：2016年10月11日

戦後社会の３つの生き方とその変容
～労働・家庭・政治行動～

慶應義塾大学総合政策学部　教授　**小熊 英二 氏**

【司会】 三々五々、まだいらっしゃるかもしれませんが、時間ですので始めたいと思います。よろしくお願いします。

きょうは第６回のオープンカレッジということで、繁忙期に関わらずたくさんの方々から参加申し込みいただきまして、ありがとうございます。

私、環境・エネルギー部の齊藤ですが、今回初めてこの幹事を引き受けてやっております。不慣れな点が多いかと思いますが、よろしくお願いします。

先だって、ポスター掲示、全社メールでご案内をさせていただき、全社メールでは小熊先生の４つの顔を紹介しています。小熊先生と事前に、みなさんの関心に応じて話が変えてもいいかもしれないですねと話しましたので、本日、みなさんがどの点に特に関心があって参加いただいたかを挙手で調査をしたいと思います。複数挙手OKですので、挙手お願いします。

４つというのは、１つ目はきょうの本題で、先生の大学のご専門である、戦後史、社会史の顔です。リベラルアーツの会としては、ここが一番であることを願っています。

２番目が民主的な活動、社会を変えるにはどうしたらいいかという著作等も出されている顔です。原発の官邸前の行動では、団体として野田首相に顔合わせをしたというところでメディアにも取り上げられたという顔を持っていらっしゃいます。

３番目が、「生きて帰ってきた男」の著者としての顔です。

４つ目は、ギタリストとしての顔です。

１、２、３、４ということで挙手をお願いできたらと思います。

１番目の歴史社会学というところで、きょうのお話を期待していますという方は手を挙げてください。

〔挙　　手〕

ありがとうございます。そちらに期待ということで、願ってもない話でございます。

２つ目の社会運動的盛り上がりにも実際関与されていらっしゃるという話にも、人物として関心があるという方、どれくらいいらっしゃいますでしょうか。

〔挙　　手〕

ちょっと減りますね。

３番目、「生きて帰ってきた男」を読んで、ぜひお会いしたいと思った方はどれくらいいらっしゃいますか。

〔挙　　手〕

あれは本当に奇跡のたまものみたいな、いい本だと私は思っておりますけれども。

４番目、ギタリストと期待して来た人はいらっしゃいますでしょうか。

〔挙　　手〕

済みません。きょうはちょっとギターご持参じゃないので。ありがとうございます。少なくてよかったです。

ということで、予定通り１番目がメインでありつつも、少し社会活動のところを織りまぜていただきながら、パーソナリティーの話もできたら含めていただいて、お話を伺いたいと思います。

では、よろしくお願いします。

講　演

イントロダクション

ご紹介にあずかりました、私、小熊と申します。では、お時間も限られておられることと思いますから、早速話させていただきます。

「戦後社会の３つの生き方とその変容」というタイトルで、「労働・家庭・政治行動」と副題がついております。私は歴史を研究しており、かつまた、それを社会学的にアプローチしております。社会学ということにあまりこだわりはないのですが、学際的なアプローチ、つまり経済と政治と社会の中間のような相互の連関関係を見たいと考えております。その具体例として、いろいろな研究をさせていただいています。

では、きょうのテーマ設定ですが、第一に、日本社会はどのような人々、ないしどのような生き方によって構成されていたのかという点であります。先ほど私の父の伝記の話もありましたが、私の父も決して大企業型の生活をしていた人間ではありませんでした。また第二として、そのような日本社会の経済的、政治的な組み立てというもの、コンポジションは世界的にどう位置づけられるのだろうかという話。それから３番目は、現在の世界はどのように変化しているのかということ。そしてその世界的な変化を受けて、今後の日本社会はどう変化していくのだろうかというのが４番目の話です。その４つについて、お話をさせていただきます。個々の論点については、もちろん私よりもはるかに詳しい方が多いと思いますから、ご教示もいろいろいただければと存じます。

戦後日本の生き方その１：大企業型

では第一の話である、戦後日本の３つの生き方についてです。

この３つの類型という考え方は、労働経済学者の野村實さんの著作である『雇用不安』（岩波新書）を参考にさせていただいております。この本では、３つの生き方として、「大企業型」「自営業型」「中小企業型」という類型を、野村さんはなさっておられます。私はこれを参考にさせていただきまして、自分なりの考えも加え、政治行動の分野等も含めてお話をさせていただきます。

齊藤氏

「大企業型」というのは、いわゆる「昭和のサラリーマン」とイメージすれば分かりやすいでしょうか。男性が終身雇用と年功賃金で福利厚生を保障されます。特に重要なのは、子供の教育と住宅取得にお金がかかる時期に、年功賃金が上がることです。この前提が現在揺らいでいるという点が、後ほど大きなポイントになります。

社会保障の関係の方々等はよくご存じだと思いますが、ヨーロッパですと大学が無償だったりする。アメリカですと給付型の奨学金がつきます。ところが、日本はどちらの条件もなかなかありません。それでなぜ子供たちを大学に進学させることができていたのかというと、教育にお金がかかる時期に年功賃金が上がっていたという前提があるわけです。この前提が現在なくなっているため、どうなっているかという話は、後ほどさせていただきます。

また、女性が専業主婦になることが可能でした。男性の稼ぎがよくないと、女性は専業主婦になることはできません。近代日本や現在の中国等もそうですが、経済発展して男性の稼ぎが多くなった国・地域から、専業主婦がふえていくという現象が見られます。したがって、歴史学や社会学では、専業主婦というのは近代的な産物であるというのはよく知られた話であります。

専業主婦というのは、いわば過渡的な形態です。つまり伝統的な自営業、たとえば農民で男女ともに働くという形態から、男性だけが賃金を得て近代的になっていくという形であらわれたのが、専業主婦だと見ることができます。

でも、これは男性の稼ぎがよくないと不可能ですので、全人口まで広がることはありません。日本の場合には、数え方にもよりますが、女性の労働力率が一番低くなった、逆にいえば専業主婦率が一番高くなったときでも全体の半分ぐらいです。1975年のことであります。ちょうど団塊世代の女性の第１子が生まれたぐらいの時期に当たりますね。

大企業型は男女ともに比較的高学歴で、大都市部に多いです。高学歴でないと、男性が終身雇用や年功賃金を保障されるような大企業に就職することはできません。また女性の方は、そういう人と出会わなくてはならない。ですから職場結婚、あるいは同窓生という形で、高学歴の女性がこういう男性と結婚するパターンが多いのです。

日本の女性があまり働かないという言い方をされることがありますが、マクロ的に見ると女性の労働力率は決して低くありません。日本の特徴は、高学歴女性の労働力率が低いという点にあります。学歴が中程度以下の女性は、結婚相手の収入が低いケースが多く、したがって働かざるを得ないと言うこともできます。

それから大企業型の生き方は、地方間を移動しています。これは大企業型の働き方の大きな特徴でもあります。地方から東京ないし大都市に移動するというパターンは全学歴にわたって多いのですが、地方と地方の間を移動するというのは、特定のライフスタイルの人間にしか見られないパターンであります。つまり、大企業か官庁の従業者ということになります。

そしてこの生き方は、定年がありますが、厚生年金、企業年金等が適用されます。この点は後で述べる自営業型とは大きな違いになってきます。

日本人の生き方その２：自営業型

生き方その２は、自営業型であります。これは、農業や自営商店等で男女ともに働く、近代以前ではごく一般的な形態であります。こうした農業や自営業では、男女ともに働くのが当然です。一家総出の家族労働で、主に無賃金労働であります。家族労働の場合には賃金が払われるというケースは、どちらかというと少ないですね。

これは後で述べる点ですが、無賃労働部分が多い国ほど賃金が下に引っ張られます。それは当然競争相手が無賃労働ですから、高い賃金を払ったセクターは競争ができなくなってしまうという現象が生じます。

でも、それでなぜやっていけるのかというと、土地と持ち家があるというのが大きな条件でして、伝統的な自営業型はそのタイプです。農業は典型的であり、商店でも持ち家があります。持ち家があって、子供の教育は義務教育だけでいいということであれば、年功賃金は必要ないという前提に立っていたとも言えなくはありません。

自営業型は非大都市圏で定住が多いです。これも後に述べますが、定住が多いために、むしろこのセクターは投票行動においては非常に力を持ちます。つまり、選挙区に定住している人たちが政治家にとって一番のターゲットであり、一番話を聞かなければならない相手になるからです。

年金は国民年金となります。年金額というのは、払った保険料に依存しますから簡単なことは言えませんが、実際の支給額は40年間保険料を払った満額でも、厚生年金が月14万7,513円、国民年金は月に５万4,497円だと厚生労働省が2015年12月に公表しています。月額５万円でどうやって生きていくのかということになりますと、もちろん持ち家があるのが前提です。家賃を払ったら到底生きていけません。あとは、老齢になっても働くというのが前提です。つまり商店や農業の場合には、60歳で定年が来るということはないわけですね。あとは、跡継ぎの息子夫婦が同居することも大きな前提だったと言えるでしょう。だから月額５万円でもいいの

だ、という制度設計だったとも言えます。

だとすると、持ち家がなくて、農業でも自営商店でもない人が年をとってしまったらどうなるのか。これが現在、大量に生活保護に流れ込んでいる層になります。

あともうひとつ、このタイプの現金支出を抑えていた大きな要件として、地域の相互扶助によって、現金６割の生活をしていたということがあります。たとえば、隣近所でお米のやりとり、野菜のやりとり、魚のやりとりが行われているわけです。ですから、食料品を買うのに支出が非常に少ないということが、コミュニティの生活ではよく見られました。

あと、ほかにもたとえば共同で雪かきをするとか、共同で掃除をするという相互扶助が、公的支出や現金支出を抑えていた背景にあるわけです。これが現在、高齢化、その他の要因によってだんだん難しくなっていることが、いろいろな形での支出増加につながっているということも、よく論じられる通りであります。

日本人の生き方その３：中小企業型

生き方その３は、中小企業型であります。これは私の考え方では、あまりはっきりした類型とは言えないと考えております。というのは、大企業型と自営業型はかなりはっきりと類型化することができますが、その中間形態と考えるのがたぶん一番適切な位置づけではないかと私は考えるからです。

自営業型というのは、いわゆる近代以前の自給自足および村内相互扶助みたいな形の生き方だと思えば分かりやすいですし、大企業型というのは賃金に全面的に依存するという形態であるわけです。中小企業型というのは、その中間だと言えます。

特徴としては、初任給はまあまあなのですけれども、大企業ほど年功賃金は上がりません。教育と住宅取得にお金がかかるようになってくるとどうなるかというと、女性が働きに出ざるを得ないという形になります。

先ほど、団塊世代が第一子を生んだ時期である 1975 年に、女性の労働力率が一番低かったと言いました。そのときでも、約半分の女性は働いておりました。しかしそのときは育児に忙しく専業主婦だった女性たちも、あと 10 年後には子供の教育にお金がかかるようになり、働かざるを得なかった人が多かったはずです。

この中小企業型は、年功賃金がありません。持ち家がなく、コミュニティに定住しておらず地域内の相互扶助がない場合は、老齢期は大変苦しいことになります。

正社員でずっと勤め続けることができれば厚生年金が出ますが、中小企業の場合には厚生年金を適用していない場合もありますし、そもそも転職が非常に多い。日本企業の平均寿命は約 30 年だと言われておりますが、中小企業の場合には十数年ということもあります。終身雇用という約束で入ったとしても、会社そのものがそう長続きしなかったりする。あるいは年功賃金が払えないので、この会社にいつまでいても仕方がないということで、どんどん転職をする。

そうなると結局、年金保険料の積立額がいろいろな形で少なくなったり、途切れたり、あるいは履歴を追えなくなったりということが起きます。それで年金が少なくなり、そのうえに持ち家がないという形ですと、老齢期は苦しいことになります。

中小企業型は、もともと自営業型の派生系、ないしは補助形態の生き方だったと考えてみてもいいかもしれません。持ち家があるという前提で、息子や娘さんが中小企業に勤めるとか、主婦の方が中小企業に一時的に勤めるということで、補助労働で収入を得るという形ならそれでやっていけます。ですが、それ一本でやっていくのは、老齢期を考えると難しいということです。

ある地方家族のスケッチ

ここで実例として、ある地方家族の例を紹介します。私は、東日本大震災後に三陸沿岸地域を調査いたしまして、現在の復興政策はいかに機能不全かという話も論文に書いたりしているのですが、そこで見つけた例であります。

この家族は、持ち家があり、農地があり、地域で相互扶

小熊氏

助があります。野菜や米等は、ほとんど買うということをしません。世帯主男性が小さな建設会社と電子部品会社を経営しています。

世帯主男性は主に建設会社の方をやっていますので、電子部品会社の方は配偶者女性が現場の指揮監督をしています。工場は庭にありまして、小さなビニールハウスみたいな感じでした。工場は電子部品を孫請みたいな形で納品するわけですけれども、換算してみると時給300円相当であります。それは最低時給以下なのですが、納品したものによってお金をもらう契約なので、時給に換算してしまうとそうなってしまうわけです。納品額をもっと上げてもらえないのかということについては、納品額が上がると発注先をペルーに変えると言われたそうです。グローバルに競争しなきゃならないわけです。東北でサプライチェーンが震災後に途切れたというのは、大工場の部分よりも、むしろこういった零細企業の方が多かったのかもしれません。

この部品工場は、周辺に住む中年婦人を好況期、つまり部品の発注のある時期に雇います。周辺の中年婦人たちも、家計のメインの収入は、旦那さんがほかのいろいろな形で得ています。ですから安い賃金でも、喜んでとまでは言わないまでも、補助労働としてお金を稼ぐわけです。

こうした女性たちは、解雇しても統計上の失業になりません。というのは、ハローワークに行ったりしないからであります。こういういわゆる保蔵労働力は、地方には大量に存在します。好況で部品の需要が上がると工場を再開し、不況になって需要が減ると解雇するわけですから、彼女たちは一種の調整弁の役割を果たしていると言ってしまってもいいでしょう。

そして長兄は牧畜をしています。長女は町役場に勤務していました。主要食物は農地と相互扶助で自給しております。この家族は、収入はいろいろな形で、各自でリスクヘッジしていると言ってしまってもいいでしょう。

リスクヘッジとはどういうことかというと、景気がいいときは部品会社を運営します。景気が悪くなると、公共事業で建設会社の仕事が入ります。農産物価格が上がると牧畜の収入がふえます。どれもだめな場合には、ベース収入として、長女が役場で稼いでくる賃金があるわけです。つまり野菜とコメは自分たちで作っていて、そのうえに４人全部組み合わせて世帯収入を得るという形になっているわけです。

こういう実例をみますと、自営業型と中小企業型の生き方が混合していることが分かります。中小企業型の生き方は、自営業型の生き方をベースにして、補助的な収入を得るものだったと、私が言ったゆえんであります。

３つの生き方の経済的連関

次に、３つの生き方の経済的連関についてです。結論からいうと、３つの生き方が組み合わさることで、日本社会全体を構成しています。

よくいわれるように、大企業型、中小企業型、自営業型の順に労働生産性が低い。では全部を大企業型の生き方にしてしまえるかというと、それは現状の日本社会の構成を大幅に変えない限り困難です。

大企業型の生き方は、人口の２割以上に達したことはないと言ってしまっていいでしょう。日本に会社は約300万社あると言われていまして、従業員1,000人以上の会社はだいたい3,000社、0.1%ということにとなります。大会社は雇っている人数が多いですから、雇用としては３割くらいになりますが、その全員が終身雇用で厚生年金がもらえる正社員ではありません。

中小企業と自営業は、低生産部門か、大企業の下請が多い。大企業の下請というのは、たとえば部品の製造の下請という形です。低生産部門というのは主にサービス業で、飲食とか小売です。あとは建設の中でも下請という形でしょうか。

日本の88年の対ドル実力を、こういう視点から計算した学者の方がいらっしゃいます。それによると、輸出先端企業が対ドル実力で125円。東京をひとつの国に見立てた「東京国」、これは輸出大企業だけじゃなくて自営業や中小企業も入っているわけですが、これが183円。大企業が少ない「地方国」が207円です。輸出先端企業と「地方国」は、約２倍近い開きがあると考えてもいいでしょう。

しかしながら、大企業部門だけが単独で回るかというと、これはなかなか難しい話です。まず、下請け企業が低コストの供給元になっている。安く部品を買うだけだったら、別に外国でもいいじゃないかということになりますが、そうすると失業が発生します。失業が多くなると、社会が不安定になり、社会保障の費用がかさみ、法人税も上がるかもしれません。

歴史的にも、1970年代の第１次、第２次石油ショックの時期に、中小企業で働いていた人はむしろ比率がふえました。要するに、大企業がある程度整理や統合を行ったりしたときに、自営業や中小企業がショックアブソーバーとして過剰労働力を受けとめたわけであります。たとえば、大都市の会社を解雇された中卒や高卒の労働者が、故郷に帰って建設会社や部品会社を開くとか、小さな会社に勤めるとか、なんらかの形で生きていくということです。

こういう部門が存在しなかったら、日本の失業率はもっとずっと高いでしょう。もちろんハローワークに行かないという形で、解雇された女性が「主婦」をやっているということも含みます。つまり相互依存関係というか、３つの歯車で回っている形態だと考えたほうがいいかもしれません。

３つの生き方の政治的連関

次は、３つの生き方の政治的連関であります。

大企業型は、経済界と労組を通じて政治力があります。自営業型は定住していますから、地域に集票力があり、これによって政治力を持ちます。

定住していない労働者は、大企業であろうと中小企業であろうと、あまり政治的な声を反映する回路を持っていないというふうに、この場では言ってしまいましょう。転居して転々としている人たちは、労働組合にもなかなか組織されにくい。政治家としても、３年したら引っ越してしまうだろうという人に選挙で働きかけても、あまり意味がないという扱いになってしまうわけです。

結果としてどういう形になるかというと、政治に声を反映しやすい生き方を保護する制度が充実します。

大企業型を優遇する社会制度は、たとえば厚生年金や、配偶者控除等があります。自営業型を保護する各種政策は、いろいろな規制とか公共事業があります。これはあるひとつのコンセプトに立って行われたというよりは、いろいろな形のインプットが、制度となってあらわれてきたと言えるかと思います。その中で一番不安定なのが、中小企業型の生き方だったと見ることができます。

近代初期の日本というのは、「官庁型」と「自営業型」の２大類型だったと言ってしまっていいでしょう。というのは、近代セクターは官庁しかない。これは近代文学を始めた人たちの顔ぶれを見れば分かりますが、森鴎外にしても夏目漱石にしても、みんな軍人か先生、要するに公務員です。公務員として定収を得ながら、小説を書いていた。ちょっと前の発展途上国に行けば、決まった給料をもらえる職業は公務員しかいないわけですから。

この官庁型の生き方が大企業型に発展したと言っていいでしょう。その後の大企業の、たとえば年功賃金や人事異動のやり方は、日本に唯一あった近代類型の働き方である官庁システム、すなわち「学歴と年次で位が上がりそれによって俸給が決まるというシステム」を、自動的に模倣していったという側面が強かったのではないかと思

います。

一方で自営業型は近代化で当然縮小していきます。自営業は1950年には50%近くありました。現在、自営業の比率は10～11%ぐらいです。これは各国を見ても、だいたいどこの先進国でも自営業の比率は10%以下には下がりませんので、これが限界線のようです。そして中小企業型が、自営業型と大企業型の中間に発生したと見ることができます。

しかし、実は自営業（家族労働）と短期雇用の合計は、あまり変わっていないのです。自営業の比率がどんどん減っていくに従い、一方で短期雇用や非正規雇用等がふえているのです。ですから両方を合計すると、全体の4割か5割は、一貫して占め続けていると見ていいかもしれません。現在、いわゆる非正規雇用が4割いて、自営業が1割いるということは、1950年の自営業5割と同じだ、考えることができるのかもしれません。

自営業型はそれなりに集票力があって定住していて政治力が持てました。けれども、中小企業型の生き方をしていた人たちは、自営業型の延長としてしか政治力を持ち得ませんでした。具体的に言えば中小企業の団体をつくるという形だったのですが、これは自営業団体がほとんど変形したようなものと言ってしまってよく、自営業型や大企業型ほどの強い影響力を持ち得なかった。逆に言うと、今はこの部分が一番困っていると言ってしまっていいかもしれません。

実質的には、中小企業型は自営業型の家計補助部門であり、大企業型の下請部門であり、短期雇用低賃金部門であり、単独では生きていけない。ですから、必然的に女性が多くなる部門です。実際、非正規雇用も女性が多いわけですし、地方の町工場とか、あるいは部品工場等で働いている人たちは、80年代以降は女性が多い。しかも子育てを終えた中年女性で、解雇してもハローワークには行かないという人が、かなりの調整弁になっていたことは先に述べた通りです。

高度成長期には、中小企業型は初任給だけ大企業型と並びました。人手不足だったからです。なんといっても、初任給を払わないと人が来ない時代でしたから。ただ、その後は中小企業の賃金は上がりませんでした。それ以後、つぶれてしまった小企業ももちろん多いです。

それでも人口構成が全体に若くて、その人たちが職を転々としながらでも働けていた間は、それほど問題は顕在化しなかった。ですが、初任給だけは同じだったとしても、50歳になったら大企業型とものすごい賃金の差がつきます。年金の段階になったら、もっと差がついてしまう。社会全体が高齢化すると、それが大きな問題になっていったわけです。

1968年の時点で、日本の平均年齢は29歳ぐらいでした。そのころは、こうした格差は目立ちませんでした。現在は46歳ぐらいです。

国際比較でみた日本経済：日本はハーフサイズのEU

次に国際比較です。日本は内需依存の国でありまして、貿易依存度が非常に低い。輸出のGDPに対する寄与率は10%から15%の間をうろうろしています。しかも、1960年ぐらいからあまり変わらない。ほかの国に比べると、ドイツや中国だったらだいたい3割、4割ですし、マレーシアとかですと8割です。それから、労働力の海外依存度が低いということは、もちろんよく知られている通りであります。

また日本は、先進国の中でも顕著に自営業、中小企業が多い国でした。自営業は減ってしまいましたけれども、中小企業は今でも多いと言えます。近代化が遅かったからだと言ってしまえばそれまでなのかもしれませんし、自営業や中小企業を保護する政策をとってきたからだという意見もあります。1981年に家電や衣料の小売店の数は、ドイツやイギリス等のだいたい2～3倍、労働人口の半数以上が従業員30人以下の事業所で勤務しておりました。そのために、生産性も低いですが、一方では失業率も低かった。

これはまったく私の自説なのですが、日本はハーフサイズのEUと考えた方がいいと考えております。EUがつくられた当時は、日本のだいたい2倍ぐらいの人口でし

た。分かりやすく言うと、ドイツとポーランドを込みにした国が日本です。つまりたとえ話として、ドイツが東京、ポーランドが東北地方というふうに考えると、ドイツの工場がポーランドにあったり、ポーランドからの出稼ぎ労働者がドイツに来たりという形と、近いのではないかというわけです。またドイツで安い農産物を買うと、みんな東ヨーロッパから来ているものです。

そのような形で、日本は国内にいくつもの部門を抱え込んだ国で、それでひとつの独立経済圏をつくっていると考えることができるかもしれません。そのようにラフに考えますと、貿易依存度が低いということも納得がいく話で、つまり自給度が高いわけです。ドイツの貿易も、じつはEU域内貿易が多いのですから、日本は国内の購買力に向かって国内輸出をしているという国だったと言えるかもしれません。東京で失業したら地方に帰るのも、いわば「失業の国内輸出」です。

次に、国際比較で見た日本政治です。日本における政治対立の構造は、基本的には西欧型よりは中南米型に近いと私は思っております。西欧型というのは保守と社民ですが、私は社民政党というものは北西ヨーロッパの特産物だと考えております。北西ヨーロッパ以外には、社民政党を見つけることはできません。

一方、中南米の政治対立は、都市部のビジネスコミュニティを中心とし、外資の導入等も支持し、自由貿易も支持するような人たちを基盤にした政党と、地方の地主を中心とした政党の利害対立という形で構成されているケースが多いと私は認識しております。

そして実は、戦前の日本がそうなのです。戦前の日本では、社民勢力や共産党のような存在は本当にごく少数でありまして、民政党と政友会が二大政党でした。非常に大ざっぱに言ってしまうと、民政党がどちらかというと都市型で、政友党がどちらかというと地方に基盤があるという政党だったと考えると分かりやすいです。

それでもなぜか戦後には、1955年体制と呼ばれる保守と革新、一見すると社民政党と保守政党の対立のような構図が一時的に成立したことがあります。しかし、実際の政党支持の理由を見た場合には、共産党や社会党を支持する人たちは護憲・平和の党として投票していたのであって、共産主義や社会主義の政権になってほしいから投票していたわけではありませんでした。社会党という名前はついていましたが、実際には平和感情で実力よりもブーストされていたといえます。つまり実際には日本に社民政党が存在する基盤はないのに、平和感情の表現としてブーストされていたといえます。

一方で、自民党の中を見ても、都市勢力と地方勢力の対立は著しかったわけです。1955年に自民党として保守政党が合同した当時は、どうせすぐに分裂するだろうと言われていました。それでもなぜ合同して、なぜずっと自民党という形であり続けたかといいますと、冷戦なのだから社会党や共産党と対抗するために保守合同をしてくれという要望や働きかけがアメリカや経済界等各方面からありましたし、実際に社会党の方が先に合同したからです。つまり、冷戦が作用して、本来なら対立していたはずの亀裂が合同したといえます。

そして社会党の方がなぜ先に合同したかというと、平和感情、つまり国民の「戦争はもうごめんである」という感情によって、著しく支持が集まるという状況であったからです。繰り返しますけれども、それは社会主義政策を期待してというよりは、平和感情の反映だったと言ってしまっていいと思っています。

そのため社会党と自民党といっても、主要対立軸は、国内でどういう経済政策をやるかではなく、憲法や安保をめぐる対立でした。それは、西欧のような社会民主主義と保守主義の対立軸ではありませんでした。

つまり、本来なら中南米型の「都市型政党」「地方型政党」の対立の方が、日本の社会に適合していたはずだった。しかし戦争と冷戦が作用して、そうではない形で、「保守」「革新」の軸ができたのです。とはいえそれは、社民政党と保守政党の対立軸だったのかといえば、そうではなかったといえます。

自民党は、中南米型の都市と地方の二大与党を合同する形できたのですから、本来的に言えば圧倒的に強いは

ずです。ですが、平和感情の部分で革新側が膨れていた時期は、それなりに社会党や共産党も膨れていたわけです。

その結果、いいか悪いかは別として、国内の経済政策に関しては対立軸ができませんでした。そして、都市部の勤労者を代表する政党も成長しなかったということだと思います。

20世紀の政治システムと21世紀の社会のミスマッチ

現代の変化にまいります。今、世界で起きていることを考えるうえで、20世紀の社会と21世紀の社会という、大ざっぱな図式を立てさせていただきます。

20世紀は、組織の時代であり、工業化の時代であり、製造業、大量生産、大組織、長期雇用の時代でした。大企業から男性は高い賃金を得られますから、専業主婦が可能になり、いわゆる「標準家庭」ができることになります。あれは男性が高賃金で長期雇用されないと無理です。また労組とか自治会とか業界団体といった組織が強く、それに政党が支えられていた時代です。

マスメディアという存在も、大組織の時代の産物です。特に日本はマスメディアがすごい。読売新聞と朝日新聞の部数が700万部とか800万部とかで、世界の1位と2位です。

20世紀の先進国の政治システムというのは、どういう形でできていたか。まず製造業が、男性に安定した雇用を供給していました。製造業の特徴は、高卒ぐらいの男性に長期安定雇用を提供することでした。そして男性の安定雇用を前提に、地域や家族や労働組合等が存在していました。労働組合は、ずっと長期雇用されていない人を組織するのは難しい。男性が高賃金でずっと安定雇用されていないと、一定の形態の家族や地域社会を維持するのも難しいわけです。

そしてこうした家族、労組、地域社会が、政党の基盤でした。外国で説明するときは、私は「チャーチ＆ファミリー」と「レイバーユニオン」という言い方をします。そしてチャーチ＆ファミリーが保守政党の基盤であり、レイバーユニオンが社民政党の基盤です。

日本では教会はありませんが、神社を中心とした地域コミュニティは保守政党の基盤です。集票においても意見集約においても、自治会、町内会、商店会、業界団体、労働組合といった各種の共同体が非常に重要でした。どの人も、どこかの組織に所属し、それが政党につながっていた。また選挙区における投票は、地理的な定住が条件でもありました。こうした社会に、一律の情報を提供していたのがマスメディアでした。

これらが21世紀になってくると、全部機能不全になりました。まず製造業が縮小し、雇用が不安定化すると、各種の共同体が衰弱します。チャーチ＆ファミリーが弱ると保守政党が弱り、レイバーユニオンが弱ると社民政党が弱体化します。すべてが不安定化し、流動化していくことになります。

21世紀を特徴づけると言われていたのは、グローバル化と情報化です。これは、世界で進行している同一のことを、2つの側面から言った表現です。たとえば、メールを使えば外国の工場に発注するのが楽になった、ということに典型的に連関が分かります。

21世紀には、サービス業、なかでも金融やデザイン、リサーチ等情報を加工する産業が増えます。こういう産業では、製造業のような大量生産・大組織ではなく、多様化、プロジェクト化、短期雇用、専門職が主流になります。

そして「標準家庭」に代わって一人親や未婚、長期親元同居がふえているのはご存じの通りです。男性が長期雇用されなくて年功賃金が上がらなかったら、子供をつくるのはかなりリスキーなことになります。今の日本では子供の教育費は、大学まで行かせると公立で全部やってもだいたい1,000万円、私立で全部やると2,000万円かかります。年功賃金が上がらなくて長期雇用される当てもないのに、子供をたくさんつくるというのは困難です。

そして当然、自分ひとりで家賃を稼げる当てがなければ、親元から出ていきません。これは日本だけの現象で

はありません。アメリカでもヨーロッパ諸国でも、最近は親元同居がふえてきました。北欧等、社会保障制度が充実していて、家賃の補助制度等がある国では、子供が親元から出ていきます。そうじゃない国、たとえばイギリスやイタリアでの親元同居の長期化は、結構広がっています。

さらにマスコミに代わって、インターネットが出てきます。そうなると、社会に一律の情報が共有されることが少なくなり、情報の多様化と分断が激しくなります。社会の多様化と分断を反映する形で、インターネットが出てきたと言った方が正しいかもしれません。労組とか自治会とか業界団体が衰えている状況に、こうした変化が加わると、ポピュリズムが現れやすくなります。

また人の移動が激しくなり、一定の選挙区に定住していることが少なくなりました。投票行動の専門家の意見ですと、定住３年以下の人は顕著に投票率が低い。地域ネットワークに入っていないですから、情報も入ってこないし、投票する動機にも欠けるわけです。

また人口の配置が変わってきたため、旧来の選挙区が社会に合わなくなった。日本では、皆さんよくご存じの通り、19世紀に決まった県を基盤にしてやっていれば無理が出ます。

このように、社会の在り方が大きく変わってきました。ところが、政治のシステムの方は、20世紀のままです。つまり、選挙をやって議員を選んで、政党があって、議会で審議しているわけです。しかし20世紀のようにうまくはいきません。社会が変化しているのに、システムが20世紀のままなのだから当然です。政党は、いまだに町内会とか労組とかを基盤にしている。町内会や労組の組織率が落ち、それにカバーされている人が大幅に減っているにもかかわらず、です。つまり20世紀の政治システムと、21世紀の社会はミスマッチを起こしているのです。

そうなると、政治システムから疎外感を感じる人が大幅にふえていきます。おまけに格差も拡大していく。グローバル化、情報化、格差の拡大、それにもかかわらず政治がまったくわれわれの声を聞いているように見えない。そういう不満が非常に強くなってくるわけです。

そうなると、２つの傾向が出てくる。ひとつは右派ポピュリズムの台頭であり、もうひとつが社会運動の再興です。前者は移民排斥政党やトランプ現象とかで語られる者であり、後者はエジプトとかアメリカとかスペインとか香港とか台湾でみられる社会運動の台頭です。

後者の社会運動の台頭について、もう少し詳しく背景を説明します。

現代では、高学歴にもかかわらず、安定した雇用のない人がふえています。どうしてかというと、高卒労働市場では職がないので、大学に行く人がふえている。日本でも、高卒労働市場が91年から現在までに、８分の１ぐらいになりました。高卒では時給何百円の職しかないという形になってしまうので、どこの国でも大学進学率は上がっています。しかし、大学に行っても安定した職が少ない。そうなると、知恵がある、スキルがある、しかし安定した職がないという人がふえてくる。

そういう形になってくれば、いろいろな運動が起きてくるのは当然の話であります。アメリカのオキュパイ・ウォール・ストリート運動を担ったのは、高学歴なのに不安定な人々でした。2014年の香港や台湾、あるいは2016年の韓国も同様です。2014年に香港に行きましたけれども、大学を出ても安定した職がないどころか、自営業をやらざるを得ない人が多いのにもかかわらず、60平方メートルのアパートが２億円する。そこに不透明な政治状況があれば、なんらかの抗議運動が起きやすいのは当然です。

その人たちは、従来の組織や政党にかわって、独立系の小グループをたくさん作っています。そしてインターネット等を駆使して、いろいろな社会運動を起こす。彼らは知恵があり、インターネットのスキルがあったり、デザインや音響装置のスキルもあったりします。近年の運動は、音響装置やデザインを駆使したものも大変多く、デモひとつとってもカラフルです。

日本でも最近の抗議運動では、ホームページにアクセ

スすると、プラカードのデザインをダウンロードできるようになっています。それをプリントアウトして貼って持ってくればいい。デザイナー等も主催グループにいます。もっとも主催グループといっても、大きな組織ではないので、数十人くらいだったりします。もちろん、組織動員等ありません。

こういった状況が、各国の選挙にも影響しています。どこの国でも、既存の二大政党の力が落ちて、右派ポピュリズムと社会運動の勢力が伸びている。アメリカでいえば、トランプとサンダースが評判になりました。オーストリアの大統領選挙は、極右の候補と、緑の党にいた候補の一騎打ちでした。オーストリアは、ドイツと同じ社民党と保守政党の二大政党構造だったわけですけれども、70年代以前の二大政党は力を失いつつある。これは社会構造が大きく変わってきたためです。

日本の社会は90年代以降、どう変化したのか

日本の変化にまいります。90年代以降の変化の背景として、まず冷戦が終わりました。冷戦が終わったということは、中国その他の旧社会主義圏が本格的に世界市場に入ってきたということです。

それまでの日本は、東アジア唯一の民主的工業国として、独占的な地位を持っていたと言っていいでしょう。西側陣営の工場は、アジアでは日本しかないという状況でもありました。また日本から製造業を外に移すといっても、貿易摩擦を避けるためにアメリカに工場を建てるといった話はともかく、東アジアは政治状況が安定していなかった。韓国や台湾でさえ、80年代ぐらいまでは軍政で政治も不安定でした。これらの軍政は、西側陣営における冷戦の結果であり、これらも冷戦が終わる直前に民主化されて行きました。

そうなると、情報技術の発展とあいまって、東アジアに製造業を移転しやすくなった。日本では、92年が製造業の就業者数のピークです。アメリカでは60年代の終わりです。いわばアメリカや西ヨーロッパで製造業が衰えた石油ショック後の時期、70年代後半や80年代に、日本が「西側陣営の工場」のポジションを占めていたという言い方もできるかもしれません。そして冷戦終結後は、そのポジションを中国に奪われたという言い方もできます。

日本の製造業の就業者数は、1991年から2013年までに3分の2にまで減少しました。また1997年をピークに、平均賃金が15%減少しました。ほかにもいろいろな指標、たとえば新車の国内販売台数、パチンコの総売り上げ、出版の総売り上げとかは、90年代後半がピークです。「週刊少年ジャンプ」も、95年に653万部を記録しましたが、いまは300万部くらいです。

そして、いわゆる「非正規労働者」がふえていきます。この「非正規労働者」は、英語に翻訳しにくい。いろいろなタイプの「非正規」がありますし、「パートタイム・ワーカー」だけではないですね。私は「共同体外補助労働者」と呼んでいます。要するに「正規メンバーではない」というくくりとしか考えようがないのですが、これが4割に達しております。そして大企業の正社員であっても年功賃金が廃止されてきましたが、これは教育と住宅取得の前提が失われたということを意味します。

そうなると、生活状態が変化します。日本に限らずどこでもそうなのですが、輸入可能なモノは物価が下がっています。たとえば衣類や電気製品等はベトナムでつくれば安い。

しかし、輸入不可能なものは高いのです。輸入不可能なものの典型は、土地と教育サービスです。特に高等教育サービスは高いです。多くの先進国では、どこでも都市部の地価と、高等教育が値上がりしています。

物価が下がっていけば、低賃金でも一応生きられます。食べていくことはできますが、家と教育は買えません。教育が買えなかったら職業が限られてしまい、格差が再生産されます。製造業が縮んだので、低学歴ではいい職がありません。

ある試算によりますと、年収600万円の世帯でも、都市部に住んでいて子供が2人いて、子供が2人大学に行った場合、600万円から税金と保険料と教育費を除く

と、残りの生活費は生活保護基準を下回るそうです。年収400万円だと、地方在住であっても、公立の小中学生の子供がいるだけでも下回ってしまう。

一方で日本の雇用者の年収で、トップ10%の下限が580万です。上位5%の下限が750万ですが、それくらいないと苦しいということになってしまう。2014年の内閣府の調査で「生活が非常に苦しい」という回答が30%、「やや苦しい」を合わせると64%になっていますが当然です。

そして先にも述べたように、持ち家なし、国民年金のみの高齢者は生活保護に流れ込んでいかざるを得ません。それに対して、いろいろな政策が工夫されているのですが、相互の連関があまり感じられない。駒村康平さんという、税と社会保障の一体改革に取り組んだ方が書いていたことなのですが、「税と社会保障の一体改革」のときでも、医療は医療、介護は介護、子育ては子育てでそれぞれの部会で議論したので、相互の連関性はあまり論じなかったと書いておられました。

そしてどういうことが起きているかというと、医療費を削減して入院が減っても、介護がふえている。介護保険の負担を減らそうとすると、家族に負担がかかり、介護離職がふえます。介護離職がふえると、今度は生活保護がふえます。また年金を減らすと生活保護がふえます。要するに、相互関係をつかまずに１ヵ所だけ減らしても、効果的ではない。総合的なビジョンというものが必要になってきます。

政治文化の変質

それから、自民党は組織力が低下しております。自民党は勝ち続けているのにどうして、と思う方もいらっしゃるかもしれません。しかし党員数を見る限りにおいては、自民党は1991年に547万人だったのが、2012年には73万人にまで減りました。政権に回復してから懸命にふやしていますが、まだ100万くらいです。やはり自民党は日本の鏡だなと思いますが、91年というのは日本経済がピークで、製造業の就業者数がピークだった年です。

90年代以降、自民党員はどこの部門で減っているか。2000年代の自民党愛知県連の数字ですが、建設部会が90%減、医師会や薬剤師の部会が50%減、郵便部会が99%減でした。これは何が影響しているかといえば、いわゆる「構造改革」です。つまり2000年代の公共事業の削減、郵便の民営化といったことが作用したわけです。自民党は基本的に共同体基盤の政党なので、近代化とか、いわゆる新自由主義改革には弱いというのは当然のことです。それから自民党の基盤である町内会、商店会、自治会等も衰えて高齢化しています。

その結果として、自民党の選挙基盤が不安定化しています。いまの自民党衆議院議員は、当選２回以下が４割以上です。当選４回以下を加えると７割近い。基盤が弱いので連続当選が難しいからです。

基盤が弱っているということは、人材の供給源が減ってくるということでもあります。こうした状況のなかで連続当選する人はどういう人かというと、どちらかというと都市部でなく、地方でも県庁所在地でないところの、旧来の基盤が残っている選挙区で、親から地盤を継いだ人です。それが結果的にどういうことになるかというと、90年代以降の自民党の首相はほぼ全員が２世か３世です。

日本の首相はどういう人たちがなったかというと、1945年から1954年までは外交官でした。どうしてかというと、占領軍と交渉するのが仕事だったからです。そして1955年から1980年代いっぱいまでは、元官僚か地方の有力者でした。この時代がいろいろな意味で自民党の全盛期でした。そして90年代以降は、２世か３世です。要するに、日本社会の変化が、首相の変化に反映しているわけですね。

それでもやはり、自民党が強いように見えるのはいろいろな理由があって、一言で言うとほかの政党が弱過ぎるからです。自民党の基盤も弱っていますが、労組等はもっと弱体化している。

おまけに、全国単位の選挙が日本は実質的にありませ

ん。大統領選はないし、全国比例代表も参議院の一部です。そして小選挙区は、自民党の基盤が残っている地方に配分が多い。これらの要因で、自民党が実力以上に勝っていると言っていいでしょう。

また自民党の内部に関して言うと、党内に有力な基盤がある議員が少ないので、総裁と戦うほどの有力者がいない。総裁の地位についた人が政党助成金の配分権限を持ちますし公認権を持ちますから、それに逆らって物が言える人、つまり「地盤があるから逆らえる」という人が少なくなってきた。つまり全体が弱くなっているので、総裁の一強状態になっていくわけです。

それでも、不満は日本でも広がっています。町内会とか自治会とか業界団体とか労働組合とか、旧来の組織が弱ってきて、政党の包摂度が低下しているからです。そして傾向的に、投票率はどんどん下がっています。とくに地方選挙の投票率は、一貫して下がっています。国政選挙は、2005年や2009年の総選挙ようにマスメディアで評判になると一時的に上がりますが、傾向的には下がっています。

そのなかで、旧来型の政治システムから疎外された人たち、特に学歴が高かったりスキルがあったりする都市部の人たちは、不満を蓄積させています。それが構造改革というものを待望する声になったりする。つまり、旧来の体制を壊してくれという願望になるわけです。あるいは、大阪や東京の知事選では、テレビで有名になった政治家に期待を託すという現象も見られます。これは、政治家個人の問題というより、全体構造の問題です。

一方で、保守系政治家は世襲化が進んでいるわけですから、政治家は世襲とテレビ有名人という形になってしまっている。ただし、これは日本だけの傾向ではないでしょう。ヒラリーとトランプは、政治家の親族と、テレビ有名人でしたから。

20万人のデモと選挙結果

その一方で、日本でも社会運動が台頭しております。2012年以降、毎年のように官邸前、国会前が抗議集会であふれております。つまり2012年は原発の再稼働をめぐって、13年は特定秘密保護法をめぐって、14年は憲法解釈の閣議決定をめぐって、15年は安保法制をめぐって、国会前が抗議の人であふれました。

これらはそれぞれテーマは違いますが、組織動員のない独立系の小グループが、SNSでデザインを駆使するというスタイルは同じです。その中心にいるのは、高学歴でスキルはあるけれど、雇用が安定しない人たちです。つまり、アメリカや香港や、台湾や韓国と、同じ現象が日本でも起きているわけです。

一例として、SEALDsというグループが有名になりました。そのリーダーは、こう述べております。「家が大変だったり奨学金の借金を600万円も抱えていたりするメンバーが半分ぐらいいる。交通費がないからミーティングに来られないやつとかがいるんです。たった数百円の余裕もない」。大学生で学歴は高く、SNSやデザインを駆使するスキルはあるけれど、経済的な安定性がない状態であるわけです。

ちなみに日本で奨学金を受給している学生は、現在約半数です。年収600万円でも、子供2人を大学に行かせると、生活保護基準を下回ると先ほど述べました。平均貸与金額は、学部卒で295万円です。これだけの借金が卒業時点にのしかかっていると、それは就職活動に必死になるでしょう。SEALDsのメンバーの状況は、特別なものではありません。

2012年の夏には、脱原発を求めて約20万人が官邸前に集まりました。これはその時の映像です。〔ビデオ上

映〕

このビデオを見ると分かりますが、集まっている人の年齢や服装がばらばらです。組織動員ではないからです。また金曜の夕方なのに、背広を着ていない男性と、子供を連れていない女性が多い。これは当然、非正規雇用の増大、フレックスタイムの普及、少子化や晩婚化というものが反映しています。「会社員と専業主婦と子供たち」で日本社会が構成されていた時代とは、もう社会の構成そのものが変わっているのが分かります。

実際に20万人いたかどうかは知りませんが、ご覧の通り、相当の数がいたことは間違いありません。それが組織動員ではなく、ほとんどSNSで集まってきた。こういうことが日本でも起きているわけですね。これは原発の再稼働をめぐって起きたことではありますけれども、先ほど述べたいろいろな社会変動が背景になっているわけです。

しかし、こうした運動は、選挙結果にはあまり反映しません。これは日本に限ったことではなく、組織されていない運動だからです。

この種の運動は、大きな組織があるわけではありません。集まってくる人も、SNSや口コミで集まってくるわけで、組織されていませんし、支持政党もばらばらです。ですから、選挙には反映しにくいわけです。

とはいえ、これは運動が未熟なのかというと、そうとばかりもいえません。もともとこの種の運動は、20世紀の政治システムが、21世紀の社会に合わなくなってきたから出てきたものです。その性格上からいって、20世紀の政治システムとは相性が悪いのです。むしろ、弱体化しているとはいえ、労働組合や業界団体の方が、20世紀の政治システムには声が反映しやすい。

しかし本当は逆であって、20世紀の政治システムの方が、21世紀の社会にあわせるべきなのかもしれません。とはいえ、日本に限らず、この種の新しい運動はなかなか選挙結果に反映しにくい。比例代表制の選挙制度がある国では、運動がもとになって新興政党が出ていますが、そうでない国ではなかなか困難です。

日本に即して言うと、各種の選挙結果を吟味すると、自民党と公明党で各小選挙区の人口の３割を把握していると考えると分かりやすい。公明党は各小選挙区に２万票ぐらい持っているといわれ、２万票が反対候補に寝返ったら落ちる自民党議員は100人ぐらいいるという試算もあります

そして2012年以降の国政選挙の投票率は、53%から59%です。ということは、３割の票があれば絶対勝つわけです。

民主党が勝った2009年の衆院選は投票率69%で、野党が選挙協力もしました。そうすると、自公が３割を持っていても、図式的にいえば４割対３割で民主党が勝った。しかし民主党は、2012年に政権を失ったときに、２つないし３つに分裂をいたしました。そして、民主党支持者は、その後の選挙では有意に棄権が多いです。

その結果どうなるかというと、投票率が下がり、野党が分裂していれば、自公が必ず勝つわけです。自民党も弱体化しているのですが、実力以上に勝っていると見ていいでしょう。

日本の選挙制度は、小選挙区が多いという点からいっても、地方に配分が重いという点からいっても、変化が出にくい制度です。また公職選挙法の制限が非常に大きいので、選挙活動でできないことが多く、新人が出てきにくい。旧基盤を持っている現職が、実力以上に勝ちやすい制度です。

ただしこうした制度は、政治の安定には寄与しますが、不満が蓄積しやすい。やはり小選挙区制度をとっていたイギリスでは、新興政党が出てきにくく、二大政党がいつまでも勝っていたわけですが、EU離脱の国民投票をやったら予想外の結果が出てしまった。あれは既成政党に不満がたまっていた結果だともいわれています。

結論

さて、結論に参ります。その前に、若干の印象論をつけ加えます。

印象として、大企業型の人々は、それが日本の「標準」

だと思っているところがあるように私は感じております。それはひとつには、近代文学やマスメディアが、大企業型の生き方ばかり描き出してきたからです。夏目漱石の家庭とか、あるいは現在のトレンディードラマと呼ばれる世界とかは、ほとんど大企業型のライフスタイルしか描きません。だからそれが日本の標準だと思ってしまいがちですが、実際にはそうは言えません。

私は全国を旅して思うのは、東京の中心部が一番変わっていないということです。霞が関、永田町、六本木、新宿や渋谷の風景が、日本全国で一番変わっていない。地方はみんなシャッター街になったり、ショッピングモールができたり、いろいろな形で変化している。経済が伸びているときは中心部からビルが建ちますが、全体が沈んでいるときは中央だけ昔の姿のまま維持するように資源を投入するからかもしれません。

私がよく人に言うのは、いつも新宿とか渋谷とか霞が関ばかりを歩いていたら日本全体のことが分からない、ということです。でも、いまだに日本のマスコミは、たとえば国会前のデモがあったりしても、会社員と「ママ」を探しますね。いまだに「標準家庭」が日本の典型だと無意識に思っているからです。

結論です。戦後の日本は、３つの生き方の微妙なバランスで成り立ち、経済と政治のシステムをつくっておりました。しかし、この状態は前提の変化により、格差の再生産と国民の分断を生んでおります。

根本的な問題は、20世紀のシステムと、21世紀の社会状態がミスマッチを起こしていることです。既存の選挙制度や政党制度、あるいは社会保障や雇用のあり方を手直ししないと、21世紀に適合できないのではないかと思います。選挙結果だけを見ていると昔の状態が続いているように見えますが、実態の方はかなり変化してきて、不満が蓄積していると私は思います。このままいくと、社会と政治の不安定化が避けがたいのではないかと思っております。

以上です。ありがとうございました。（拍手）

質疑応答

【司会】 ありがとうございました。

非常に熱がこもって、残り時間は一応30分ぐらいを予定していたのですが、いろいろ貴重なお話をありがとうございました。早速、質問を受けたいと思うのですが。

【小熊】 どうぞ。

【質問】 きょうはお話を聞いて、日ごろ、いつもどうしても近視眼的なことばかりになってしまうので、とても見取り図がよくて非常に参考になりました。

２点お聞きしたいのですが、ひとつが、多様化して、自由化して、不安定化している中で所得格差が拡大しているということだと思うのですが、昔、サイモン・クズネッツという経済学者は、格差は逆U字型に動くのだと言っています。最初は低いのだけれども、製造業がふえてくるとだんだん格差が広がって、しかし、製造業がマジョリティーになっていくと縮小していくのだという話をしていたと思うのですが、技術革新が起きるタイミングに、もう一回結局格差が拡大してしまうのではないかと考えています。つまり、IT化が進むとか、AIが進むとかです。そして、そのタイミングでこういう不満が出るというのは仕方ないのかなとも思います。ラッダイト運動みたいなことが、こうやって起きていくのは仕方ないのかなと思います。そうすると個人的には、やはり再分配をもう一回強化するしかやり方はないのかなという気がするのですが、その点についてはどうでしょうかというのがひとつです。

もうひとつは、小選挙区制が導入されたから政党の基盤が弱まっているのか、もしくは政党の基盤が弱まりつつあるから小選挙区制度が導入されたのか、どっちが先かよく分からないのですけれども、いずれにせよたぶん、大多数の人が、自分が投票する先がないというか、自分の思いを代弁してくれる人たちがいないと思っているのではないかと思います。その結果がブレグジットになったり、ドナルド・トランプになっているのではないかと思っているのです。では、どうやったら代替的なものがつくれるのかということです。たとえば、インターネットの中のコミュニティで政党をつくるようなことができるのか。ドイツ等でもオルタナティブドイツのような政党ができたりしていますが、どうやって既存の政党ですくえない意見をすくっていけるのかという点をお聞きしたいのですが。

小熊氏

【小熊】 今のお話は、相互に連関している話だと私は理解しているのですね。確かに所得の格差が開いていることは所得の指標として見ることができますが、格差が開いているのは所得だけなのかという問題もあります。たとえば機会の格差とか、参加度の格差とか、あるいは教育の格差とか、いろいろなものが拡大していく。

もっといえば、中産層と呼ばれていたものはなんだったのか。中産層というものは決して所得、インカムが単に多いということではなくて、それなりにプロパティ、財産がある人です。では財産とは何かというと、たとえば土地があることです。これはコミュニティの中で居をかまえる、つまり地域に責任のある位置があって、社会参画をする人ということですね。

これはイギリスなどでは非常に強い考え方です。つまり土地を持っているということは、ある社会の中に確実に位置を占めていて、安定している。そしてあしたやあさっての生活のことはとりあえず煩わずに、社会全体のことを考える余裕がある。そういう人が地主の紳士であり、中産層です。わかりやすくいえば、「社

会の中核になって社会を支えてくれる人」が中間層の本来の意味で、単に「所得が中くらいの人」ではない。

その意味で言えば、日々、株式投資のやり繰りで手いっぱいだとか、あるいはほかのことや社会参画を考える余裕がまったくないという人は、所得がある程度多くても、昔の定義の中産層ではないのではないかと思うのです。現代の問題は、こういう意味での中間層、つまり社会と一体感を持っている人が減ってきたという問題であって、それが政治の不安定になっている。小選挙区制はそれを加速したかもしれませんが、問題の根源ではない。小選挙区制ではない国でも、政治は不安定化しています。

そうなると問題は、どうやって正しい意味での「中間層」を増やすか、という問題になってくる。そうなると、単に所得を増やせばいいのか、ということになってきます。人間に社会との一体感、それを通じての充実感を与えるということになってくると、単にお金を配るというだけの問題なのかということになってきます。

もちろん、具体的に政策に落とし込んでいく場合にはいろいろな形があります。現金給付じゃなくて現物給付にしろという考え方もありますし、あるいは現物給付を与える場合でも、敗北感とか剥奪感を与えないような形にするべきだという考え方もあります。また、生活保護という形よりは、たとえば「負の所得控除」みたいな形の方がいいんじゃないかという議論もあります。

あるいは、現在の不満のたまり方というのは、結局、全然われわれの声が反映されてないじゃないかという不満が、ものすごくいろいろな形で出ているので、それは単にお金だけ配って解決する問題なのかというと、そこはなんとも言えないですね。だから、それらを総合的に考える必要があると思います。

これを具体的に政策にどう落とし込むかということになってくると、もちろんいろいろなことを考えなきゃいけないわけです。だから社会保障政策という枠で考える場合には、単にお金を配るだけじゃなくて現物給付も考えるとか、あるいは地域相談みたいな形も考えないといけないと思います。そして、相談された人間がさらに相談者になるようなシステムをつくりますと参加意識が増しますから、そういうようなやり方が必要ではないかと思います。そもそも、「こども食堂」というものも、ただ食事を出すということじゃなくて、「あなたに居場所があるよ」という感覚を与えるのが非常に重要なわけです。この場合、「現物給付」はお金の目的外使用を防止することが目的ではなくて、「現物」の施設や食堂を介して社会と接触することに意味がある。お金を配る方が当事者の剥奪感を減らし、参加意識を増進させるなら、その方がいいでしょう。要は目的に沿ったやり方をすればいい。

現在起きてきている現象というのは、私は否定しても仕方のないことだと思うのです。というのは、たとえば、社会運動が出てきたり、右翼が台頭したりという現象は、ある角度から見るとよくないことなのかもしれないけれども、ただ、ウイルスがたくさん入ってきたのに熱が上がらなかったら危険でしょう。そうすると、こういう現象はむしろ健全なことじゃないですか。それは熱だけ下げてどうにかなることじゃないですよね。デモを鎮圧して、それで治る問題じゃないですよね。

最終的には社会への参加意識が増大し、社会と一体感が持てるようにならないと解決しないのですから、なんらか政治的な意見が反映される回路をつくらないとだめだろうと思うわけです。経済や福祉の政策も、社会の一体感の回復、あるいは「中間層」の増大を目指すべきだと考えます。単に「所得を増やす」とか、「お金を配る」だけでは、必ずしも効果的ではない。

そう考えると、既存の政党の回路が変わる方がいいのか、新政党をつくった方がいいのかはケース・バイ・ケースです。比例代表制等ですと新政党をつくる方が出てきやすいです。小選挙区制では新政党をつくっても、ほとんどまず当選は難しいので、そういう形でないとすれば、既存の政党が変化した方がいいでしょう

ね。しかしもっと大切なことは、どんな選挙制度にするにしても、たとえば労働組合と自治会と町内会と業界団体だけで回っているのではなくて、もうちょっといろいろな形で社会の広い部分と対話と政党や政治家が参加を行なっていくことでしょう。

私はある意味、社会運動が出てくるというのは非常に健全なことだと思っているのです。だって、あの人たちって基本的に一文のお金にもならないのに、国のためとか社会のためのことを考えているのですよ、ある意味で言えば。それなりにスキルもあるし、それなりに知識もある人たちですよね。私はそういう志向のある人のほうが、本来の意味の「中間層」に近いのじゃないかと思います。そういう人が増えるような形で社会運動がおきるなら、それは社会にとってよいことではないでしょうか。

【司会】 ありがとうございました。

あちらの方でも手が挙がっております。

【質問】 政策研究事業本部という、官公庁の関係の仕事をするところでやっております。

見せていただいた映像がすごく強烈だったなと思っております。大阪にいると、ああいう社会運動というか、人がたくさん集まって何かに抗議するみたいなものは見たことがないので、すごくびっくりして、なぜ東京では起こって、大阪では起こらないのかということを思いました。

また、毎年夏にそういう運動が起こるとおっしゃっていましたが、メンバーの重複はあるのでしょうか。テーマは変わるけれども、参加者の多くがかぶっているのではないかと疑問でした。その２点をお伺いします。

【小熊】 夏だけではなくて冬に起きることもありますが、それはさておき、来ている人はどのぐらいかぶっているのかということになってくると、きちんとした調査は難しいのですが、私の印象で言うと半分ぐらいはかぶっているという感じでしょうかね。入れかわってはいるし、もちろんテーマによっても違いますね。これは印象論ですが。

東京と大阪でどうして違うのかということに関してはなんとも言えないですが、ただ、大阪は大阪でいろいろありますよ。実際にこういうことはあまり報道もされないので、東京ですら、見るとショックを受けたという人がいるんですけれど。

【質問】 大阪ではこれだけの規模のものはもちろんないのでしょうけれども、東京は規模感がまったく違うなという感じがしました。

それから、確かに不満をぶつける相手がいないというか、大阪府庁とか大阪市役所に抗議してもしようがないかなという感じがしています。確かに、霞が関とか首相官邸という分かりやすい対象が大阪にはないので、こういう行動も起きないのかなとも思ったのですけれども。

【小熊】 そうですね、そういうことは言えると思います。ただ、不満をぶつけているという言い方で処理していいかということになってくると、そこは微妙だとは思います。また、不満を表出しているという形であったとしても、それは結局いろいろな形で社会に反映しますからね。

【質問】 はい、分かりました。ありがとうございます。

【司会】 事前に質問をいくつかいただいています。こういった問題はマスコミで意外と報道されなかったとよく指摘されているのですが、こうした日本のマスコミの報道について質問があるようですのでお願いします。

【質問】 きょうのお話にあった、マスコミとインターネットの論調の大きな違いについてです。さっきご紹介いただいた脱原発のデモも、全然マスコミに取り上げられなかったわけですけれども、一方で、SNS等では数十万人規模で動いているのでしょうか。

【小熊】 私は記録映画をつくったので、その一部を映させていただいたわけですが、いろいろなところやいろいろな国でも上映しており、「なぜ報道されなかったのか」という疑問を尋ねられるわけです。

私が2011年から12年ぐらいにかけて、マスメディアの人たちと会っていて感じたことは、彼らは何が起きているか分かっていなかったということですね。その後はまたちょっと違いますが、当時は別に民主党政権がメディアをコントロールできていたわけではありません。もちろん、いくつかの会社はいろいろなことに配慮して、わざと報道しなかったということはあるかもしれませんが。

マスメディアの人たちにとっては、過去30年間、大きな社会運動等を報道したことはなかったし、その人脈もないし、スキルもないし、コネもないし、起きると思ってなかったし、ということだと思います。私の印象で言うと、起きるとすれば共産党や労働組合がやるだろうと思っていたので、そこばかり追いかけていたら、全然目に入らないところから出てきて、現象に追いつけなかったというのが実態だったようです。

これはやはり、ひとつには日本のマスメディアの体制の問題でもあるのです。よくご存じのように、日本のかつての枢要なところである官庁とか経済団体とか、政党とか労働組合とか自治体等には記者クラブが配置されているわけです。そこで起きたことは、公式ブリーフィングも含めて情報がたくさんインプットされてくるのですが、それ以外のところの情報は、自分たちでとりにいかないと入ってこないですよね。それ以外のところに出かけていくときに、過去に前例のないところはあまり回っていないということが実態ではあるわけです。

だからこれは、先ほど述べた日本の生活状態の部分や何かも含めて、なんとなくおかしいなとは思っていても、報道がなかなか追いつかないわけです。報道されるのは、どちらかというと議員会館の中の出来事とか、政府の中の出来事とか、あるいは記者クラブが配置されている部分ですね。旧来のセクターの部分は比較的情報が入ってきやすくて、紙面も占めやすいのです。

もうひとつは、マスコミの上層部の中堅マネジメントにあたる人たちが、意識がなかなか変わっておらず、昔の意識のままですから、新しい情報が入ってきても、よく理解できないということもあるでしょう。また、読者そのものが高齢化しているので、たぶん高齢者の読者に理解できないから報道しないという形で、ぐるぐる回ってしまうわけです。そもそも、SNSとは何かというところから説明しないと分からないだろうというところから始まるわけですから。だから、日本の新聞は中高年向けの紙面にどんどんなっていっていると思いますね。これは載っている広告や記事を見ていてもはっきり分かります。

特定のところとしか対話していない、しかもその「特定のところ」が高齢化している業界団体などであるという意味で、政治とマスコミは同じ病理にあります。政治とマスコミに対する不満は日本に限らずどこでも増加していますが、これはどこの社会でも構造が変わって、既存の労働組合や業界団体や地域共同体が衰えて、そうした場所に包摂されない人が増えていることが根本の原因です。

もちろん、新聞で得られる情報も大変多くて、それは有効活用すべきだと私は思います。新聞だけではフォローできない部分は多いですが、ネットだけではそれも偏ってしまう。ネットは局部に情報を取得するのには便利ですが、全体は見えづらいですから。

【司会】 ちょっと時間がないので、今の時点で質問したいなという方はどれくらいいらっしゃいますか。では、どうぞ。

【質問】 先ほど、教育と住宅取得が家庭の収支に対して結構インパクトが大きいという話がありましたよね。実は教育の内容についてお聞きしたいのです。

日本の教育は、たとえば、政治のこととかお金の使い方とか、具体的なことはあまり教えないで知識集約型みたいになっていますよね。それで今の日本の若者が、自分の意見が言えないとか、そういう方向になってきていますよね。そういう日本の教育についてどういうふうにお考えかをお聞きできますでしょうか。たとえば、日本の教育はどうあるべきかとか、こういうところが嫌だなとか。また、若者についてどんなふうに思っていらっしゃいますか。

【小熊】 まず、今の日本の教育について言うと、知識は与えてはいると思うのですけれども、知識の使い方を教えていないというのはまったくその通りだと思います。ただ、知識の使い方を教えるということになってくると、現在の教育の仕方を変えなくてはいけないということになってきます。

たとえば、数学の知識を応用するという問題なら、作ることはできる。しかしビジネスの具体的なやり方や、政治的な知識の応用に関して比重を移していくということになってくると、経済や政治のことを公共の場で自由に議論できるということが前提になってきます。現在は、教育現場では政治のことを一切語らないのが政治的中立だということにされてしまっているので、その状態を変えないことには、政治的な知識の応用はできないと思います。

だから、教育の場で政治や経済が議論されていたりするようでないと、知識の使い方は身につかない。場合によっては教師なり学校なりで、ある程度の偏りなり偏差というものが出たとしても、それはある程度許容するというか、許容しながら多様な議論を巻き込んでいくという形を許さないと、知識の使い方を学ぶことはできない。

従来は、知識を覚えている人間を養成すればいい、技術の使い方などを教えると危険だ、という考え方が

ありました。明治時代は、維新をなしとげた第一世代がトップに立って方針を決めるから、新たに養成するのは黙って命令通りに従う人間でいいのだ、という考え方だった。しかしこれからは、ある程度オープンに議論できる環境をつくらないことには難しいと思います。

具体的には、職場でどこの政党を支持しているかみたいなことを平気で言い合えるぐらいにならないといけないと思いますし、学校の中であの先生はなんとか党を支持して、この先生はなんとか党を支持しているけど、それでいいじゃないかというぐらいの感じにならないといけないだろうと思います。

【質問】 このまま指示待ち人間ばかりができてしまうような形になってくると、日本の将来はかなり暗いのではないかという感じで、非常に不安な感じがするのですよね。だから、その辺に関して、若者たちに対して何かメッセージみたいなものはないですか。

【小熊】 ただ、それは若い人にメッセージを出すという問題ではないと思います。そういうことを言う年長者自身が自由に論じているのかといえば、たぶんそうじゃないので。年長者が自分でやっていないことを若い人に要求して、自分たちは態度を変える気はないのに若い人に意識を変えてくれというのは、いくらなんでも勝手な話ですねとしか言いようがないですよね。まず、それは誰かに説教するよりは自分で先にというふうに思いますけれども。

【質問】 分かりました。ありがとうございました。

【司会】 最後は理事長にお願いします。

【中谷理事長】 小熊さん、どうもありがとうございました。

20世紀と21世紀の経済状況、社会状況の違いというものを非常に総括的に整理していただいたし、21世紀の世界がうまく対応するようなシステムづくりに成功していないことが根本的な問題だというメッセージはすごく参考になりましたし、勉強になりました。

ひとつ言及されていなかったことで私が気になるのは政治と市場の関係についてです。

かつて、自民党政治が全盛の時代には、「政治が市場を支配していた」と言ってもよいかと思います。ところが今は、グローバル市場が政治を支配するという形になっている。政治は何をやっているかというと、金融市場の参加者が喜びそうな政策を最優先しているように見える。たとえば、雇用規制を解除するとか、資本規制を解除するとか、富裕層に対する減税をやるとか。あるいはリーマン・ショックの後は、中央銀行が政策決定の前面に躍り出て、資本主義をどうやって延命させるかということをやっ ている。延命させるために必要なことは何かというと、市場の御機嫌をとるということなのではないでしょうか。

先ほど中間層の話が出ましたが、政治が中間層を大事にするという考え方はきわめて希薄になっている。むしろ市場が不安定化しないように、マーケットが喜びそうなことに、政治エネルギーの中心が移ってしまっているということがある。その典型は1,200兆円に上る国債ですし、今、日銀が猛烈な勢いで異次元金融緩和をやっているということも、ある種同じことなのですよね。将来の資源を今のマーケットの安定のために使っているという状況です。そして、このような政策が結局のところ、貧困層を大量に生み出しているということなのではないのでしょうか。

きょうの整理の仕方で私は全然違和感ないのですが、そういう市場重視の政治が格差拡大を助長していると思います。

【小熊】 今のお話を引き取って、私の考えていることを述べますと、まず第一には、現在政治に対して不満がたまっていることのもうひとつの要因というものは、国という単位が中途半端になってきたということです。

民主主義というものは、国の規模が小さい方がいいのです。古代ギリシャのポリスでは市民全員参加で民会を開いていたわけですが、そういう都市国家の理想の人数は5,000人だとアリストテレスは言っています。ですから、民主主義を理想通りにやろうとするなら、規模が小さい方が自分たちの意思は反映しやすいわけです。

だからその意味では、近代国家は大き過ぎるわけですね。ほかの先進国と呼ばれているところを見ていても、比較的うまくいっているスウェーデンとかデンマークは、人口が700万人とかそういう規模の国ですよね。そういう規模ですと、政治的な声が比較的簡単に響きやすいわけです。

ただ一方で、一国の政策でやれることはとても限定されてきました。これはヨーロッパの小国を回ってきて聞いたことなんですが、「自分の国の政権を変えるところまではいくのだけれども、そこから先、結局のところ、わが国だけでは何も決められない」ということを不満としてよく聞きました。

つまり、アメリカみたいな大きな国は、政治が遠すぎて変えられないという不満がある。一方で小さい国では、国の政治は変えられるのだけれど、一国だけでは全体状況を変えられないという不満になってきているわけです。

いわゆるグローバル経済と呼ばれるものに対して国は小さ過ぎる、しかし、民主主義をやるには国という単位は大き過ぎるのです。経済の規模なり、人間の行動範囲なり、経済だけじゃない社会活動の範囲というものがある程度限定されていた時代には、国という単位でよかったのかもしれないですが、だんだん合わなくなってきたということが現在起こっていることの背景にあるのかもしれません。だからその意味で言えば、

ある種小さな単位に決定権限を落としていきながら、グローバルな連携も図っていくみたいな政治システムが基本になるのだろうということは、いろいろな思想家が提案はしています。それがひとつです。

もうひとつは、これは私の印象なのですが、市場ということを言う場合に、いったい何を指しているのかということになってくると、統計数字になってあらわれてくるような、たとえば株式の数字であるとかGDPであるとか、それを市場と指していることが非常に多いように思うのですね。

ただし、「経世済民」という言葉があるぐらいですので、市場というものは本来、人間の社会行動すべてを指していたことのはずです。いわゆる人間の社会行動全部を指すにもかかわらず、現代では「市場」を経済指標としてのみ使っているわけです。これはよく出すたとえ話なのですが、仲よくしている家庭はお金を使う必要がないわけです。別にどこかの遊園地にわざわざ行ったりする必要もないし、おうちで仲よくしていればそれでいいわけですよね。不満がたまって買い物マニアになる必要もないわけです。でも、そういう家庭はGDPに寄与しないわけです。早い話が、暴飲暴食して体を壊した方がGDPは上がるわけです。

たとえば、日本の部品を輸入して、アップルのスマホを中国で組み立てているだけで、中国のGDPは上がるわけですよね。また、中国で日本の自動車会社が生産して、日本に輸出すると、中国のGDPが上がって日本の貿易赤字になるわけじゃないですか。そうなってくると、要するに国単位でGDPをはかるということに、いったいどういう意味があるのかという話にだんだんなってくると思うのです。

現状の指標のとり方で経済政策を策定するということが、もう実態にあってないのではないかと私は思うのです。特に最近常々思うのは、一部のマクロ経済の人が論じる議論を見ていると、とにかく株価を上げてGDPをふやすために、いろいろな努力をなさいますよね。そのためには何が犠牲になっても構わないという考え方だと、いったいなんのためにやっているのかという話になってきます。GDPを社会の健全度の指標として使うのはよいですが、GDPを上げることを目的にするのは本末転倒です。それは、体温を体の健全度の指標にするのはいいけれど、体温を下げることを医療の目的にしても意味がないのと同じです。

そういうことを考えていくと、新しい時代に合わせてもうちょっといろいろと考え直した方がいいのではないかと思います。GDPという概念は、総力戦の時代である1944年に、米英カナダで所得勘定の共通定義を決めたところから広がった。しかしそれだって、1944年にできた時点では「何じゃ、それ」って言われた指標であるわけです。だから、20世紀半ばにできた政治システムだけではなくて、20世紀の半ばなり後半にできた経済指標というものにも、現在われわれは縛られ過ぎているのではないかと思います。また逆に、そういう一部の経済指標を動かすことを説得材料に使ってもうけている人たちやそれで利益を得るという行動をしている人たちもたぶんいるのだろうと思います。

でも、それらが説得材料として機能してしまっているということが、果たしていいことなのかということも時々考えます。これは経済学者に対するお答えにはなっていないでしょうが、ちょっとメタな視点に立つと、そう思います。

【司会】 ありがとうございました。小熊先生から最後に一言ありますか。

【小熊】 最初に申し上げた通り、シンクタンクには専門の方がたくさんいらっしゃるわけですから、個々のことについてはむしろ教えていただきたいと思うわけです。ただし、専門の方々というのは連携が時々欠けていることがあるなと思うこともありますから、タイムスパンを長くとったり、視野を広くとったりして、ラフな図を描いてみたのですが、そういうことが皆さん方にとって、なんらかの得られるところがあったのであれば幸いに思います。

どうもきょうはありがとうございました。（拍手）

【司会】 ありがとうございました。

このような機会を与えてもらった小熊さんと、このオープンカレッジの場に感謝させていただき、おしまいにしたいと思います。ありがとうございました。（拍手）

開催日：2016年10月25日

次号予告 2017年7月発行予定

特集：「未定」

既　刊

2016 vol.2（通巻第38号）
特集：オープンカレッジ

2016 vol.3（通巻第39号）
特集：環太平洋パートナーシップ（TPP）協定

2016 vol.4（通巻第40号）
特集：クリエイティブ・エイジング

2017 vol.1（通巻第41号）
特集：グリーンインフラ

http://www.murc.jp/thinktank/rc/jorunal/quaterly/

Quarterly Journal of Public Policy & Management
季刊 政策・経営研究
2017 Vol.2
2017 vol.2（2017年2号）通巻第42号

発行責任者：藤井　秀延 代表取締役社長
中谷　巌 理事長
編集長：太下　義之（政策研究事業本部）
編集委員：鈴木　明彦（調査本部）
三浦　秀樹（コンサルティング事業本部）
国松　麻季（政策研究事業本部）
加藤　三貴式（会員・人財開発事業本部）

本誌掲載記事のご照会は
三菱UFJリサーチ＆コンサルティング
コーポレート・コミュニケーション室（広報）まで
ご連絡ください。
連絡先：TEL03−6733−1653（東京）

編集・発行
三菱UFJリサーチ＆コンサルティング株式会社
東　京　〒105−8501 東京都港区虎ノ門5−11−2
オランダヒルズ森タワー
TEL：03−6733−1000　FAX：03−6733−1009
名古屋　〒461−8516 名古屋市東区葵1−19−30
マザックアートプラザ
TEL：052−307−1110　FAX：052−307−1126
大　阪　〒530−8213 大阪市北区梅田2−5−25
ハービスOSAKA
TEL：06−7637−1500　FAX：06−7637−1501
E−mail：info@murc.jp　http：//www.murc.jp

印刷・製本　株式会社 カントー
2017年4月発行
（禁無断転載複写）落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。

本号2017年・No.2（通巻第42号）では、「オープンカレッジ」を特集している。

この「オープンカレッジ」とは、弊社の研究員やコンサルタント個々人が自ら基礎的教養を高め、クライアントに対してより魅力的で洞察力のある知恵を提供できるようになることを目指して、リベラル・アーツを中心とした「学び」の場を提供する社内交流イベントである。

ちょうど1年前の2016年・No.2（通巻第38号）においては、2015年度の「オープンカレッジ」の講義5件を採録したが、それに続いて、本号においては2016年度の講義6件を採録している。

さて、目線を世界に転じると、英国の欧州連合（EU）からの離脱（ブレグジット）や米大統領選における共和党候補ドナルド・トランプ氏の勝利など、グローバリゼーションのさなかで“想定外”の事態が頻出している。

これらの現象は、民衆による「反知性主義」の反乱である、とも論評される。この「反知性主義（Anti-intellectualism）」とは、知的権威やエリート主義に対して懐疑的な立場をとる主義・思想のことであり、本来は、民主主義や平等主義に近い考え方である。

そして、仮に「反知性主義」の立場をとるとしても、または「エリート主義」の立場であるにしても、自らの主義を主張し、実践していくためには、幅広く、深い教養を身に着けておくことは不可欠であろう。

このような時代であるからこそ、「オープンカレッジ」のような学びの場に関して、その意義や必要性がより高まっているのだと考えられる。本号に収録した講義を通じて、そうしたことにも思いを馳せていただければ幸いである。

編集長　太下 義之

コラム　サーチ・ナウ

サーチ・ナウは政策研究事業本部の研究員が個々の専門分野で得た知見を元に政策提言や社会動向に対する推察などを、わかりやすく読み切りサイズで定期的に執筆・公表しているコラムです。

社会の「今」を鋭い視点で切り開く多彩なコラムを是非、一度ご覧ください。

（http://www.murc.jp/thinktank/rc/column/search_now）

ISSN 1881−5308

三菱UFJフィナンシャル・グループの総合シンクタンク

MUFG

三菱UFJリサーチ&コンサルティング

〒105-8501 東京都港区虎ノ門5-11-2
TEL : 03-6733-1000

ISSN 1881−5308

VEGETABLE OIL INK

Waterless Printing Naturally

FSC
www.fsc.org
ミックス
責任ある木質資源を使用した紙
FSC® C014473